
Fate/return

くろいあくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / r e t u r n

【Nコード】

N 3 3 2 9 N

【作者名】

くろいあくま

【あらすじ】

第五次聖杯戦争が終結して数年後。衛宮士郎は正義の味方となるために世界を渡り歩き、死ぬ運命にあった百人を救うために世界と契約した。そしてその死後、守護者となったエミヤはかつての自分のあり方を憎むようになっていた。聖杯戦争に呼び出されればかつての自分を自身の手で殺せる。それを希望に守護者を続けていたエミヤがついに、聖杯戦争に呼び出される。しかし、呼び出された時代は聖杯戦争が起こる筈の無い未来の世界だった・・・

第零話 運命の始まり（前書き）

初投稿の初心者が無謀にも挑戦してみます。完結を目指し、頑張りたいと思います。拙い文ではありますが、読んでもらえれば幸いです。

第零話 運命の始まり

第五次聖杯戦争の終結からおおよそ90年以上が経過し、現在は西暦2095年2月4日。

かつて聖杯戦争の舞台となった冬木の街に一人の少女がいる。

彼女は名を桜といい、冬木市の穂群原学園の一年生である。容姿は黒い長髪に黒目の純日本人であり、目鼻がくつきりとしていて、密かに行われているミスコンで学校2位を取るほどの美少女だ。

「おい、桜！弓道部に寄ってかないか？」

その桜という少女が授業が終わり、帰宅しようとしていると、別の少女が誘いかけてきた。桜は弓道部には所属していないが、度々誘われて弓道部に行っているので、殆ど部員扱いとなっている。

「ごめん。私、今家で一人だから、帰って夕ご飯の支度しないと・・・」

「ああ今は別宅に家出中だっけ？そういうことなら仕方ないか・・・」

現在、桜は家庭のある事情から本家とは離れた別宅に一人で暮らしている。弓道部に寄っていたら帰るのはどうしても遅くなってしまう、夕食を食べるのが遅れる。

一応、人並み以上には食欲がある桜には、夕食が遅くなるのは死活問題だ。

「あーあ、せっかく桜に射を見て貰おうと思ったのにな」

「ごめん、また今度絶対に行くから」

この椀という少女は家族が全員弓をしているので、実は弓道部の部員より断然上手い。だからよくこの少女に勧誘されるのだが、様々な事情があり断っている。

「じゃあ、また今度！」

少し無駄話をした後、そう言いながら弓道部の少女は弓道場に去っていった。

弓道部の少女と別れた後椀は夕方の暁に染まる道を、一人で別宅に向かって帰宅している。別宅への道のりは普段も人影は少ないが、今日は椀しかない。

そんな道を黙々と歩いていると、急に空気が重くなったような気がした。

「えっ？何！？」

椀は善良な一般人であつたので、これまで空気が重くなるなどといった経験をしたことは無かった。それでも変化に気付くのが、如何に空気が変容したのかがわかる。

驚いている椀に一人の男が話しかけてきた。

「ふむ、そこな娘。お前がモミジという者か？」

「えっ？はい？」

先ほどまで近くに誰もいなかったのに急に現れ、出会い頭に名指しされれば狼狽するのも無理は無い。

いや、それ以上に袴を狼狽させているのが男の格好だった。20代前半の金髪、ここまではいい、外国人など別に珍しいものでもない。しかし、それが重厚な鎧を着込み、大剣を携えるという騎士の格好をしているとなれば話は別だ。

「おい、我はお前がモミジとやらかと聞いているのだが？」

「えっ、ええそうですけど・・・」

その言葉を聞いて騎士はニヤリと笑いながら、剣を構えた。

「そうか、それならば良い。さて、疾くと逃げよ。我は抵抗もしない者を殺す趣味はないからな」

「ヒ……ッ」

騎士から殺気が漏れ出る。いきなりの事で混乱しながらも袴は本能的に危険を感じ、転びそうになりながらも自分が住んでいる別宅に走った。

「そうだ！それで良い！無様であろうと生に執着するのが人というものだ！」

騎士が高笑いしながら喋っているが、袴にはそんな言葉など聞こえていない。今は少しでも速く走る方が重要だった。

「ハア・・・ハア」

柊は今までの人生で一番速く走ったと思われる速度で、別宅にたどり着いた。

「ハア、ハア・・・と、取り敢えずどこかに隠れなきゃ！」

後ろを振り返るが、あの騎士はいない。しかし、いつ追いついてくるかわからない。身を隠すのが先決だろう。

「でも、どこに・・・」

「おい、止まるな。間違つて直ぐに殺してしまう」

反射的に後ろを振り返ると、今まで何も無かった所に騎士がいた。柊の顔が絶望に染まっていく。

「3度は言わんぞ、逃げよと言っておる」

柊は何も考えずがむしやらに走る。だが、普段余り運動しない女子高生である柊の体力は既に限界だった。敷地内にある土蔵の前で立ち止まってしまう。

「ちっもう良いわ！」

騎士は面倒になったのか、柊を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた柊は開いていた扉から土蔵に放り込まれる。

「がっ、あっ」

柊は苦悶の声を上げる。そしてこれまでなのか、という考えが頭

に過ぎるがそれでも諦めずに土蔵を這う。

「ふむ、加減はしたのだが・・・」

土蔵に騎士の声が響く。こうなつては柎に生き残る術などない。いや、彼女は知るよしも無いが、この騎士はサーヴァントである。サーヴァントに狙われれば、普通の人間が生き残ることなど奇跡が起きない限り不可能である。

しかし、彼女にはその奇跡が起こった。土蔵に召喚陣が現れ光が溢れる。サーヴァントの召喚である。

現れたのは褐色の肌に白髪日本人離れた男。男は現れた瞬間状況を判断し、すぐさま夫婦剣を何も無い所から作り出し、佇んでいた騎士に斬りかかる。

斬りかかられた騎士は軽々と大剣でいなすと、少し逡巡した後扉から出て行った。

褐色肌の男は鷹のような眼で騎士が出て行った扉を睨んだ後、果然と座り込む柎に振り返る。

「あ、あの、あなた達は一体・・・」

柎は突然現れ、自分を救ってくれた男に恐る恐る問い掛ける。

男は目を閉じ、少し考える素振りを見せる。その時間は刹那の間だったが、柎にとってはとてつもなく長く感じられた。

そうして、考えがまとまったのか男は目を開き、柎に問い掛けた。

「問おう。君が私のマスターか」

この瞬間、
椀の運命が大きく動き出した・・・

第零話 運命の始まり（後書き）

第零話どうでしたか？拙い文ですが満足いただけるよう頑張りました。

アーチャー最後の少しだけでしたが、次からのメインは彼です。・

・まあ予定では戦闘するのはかなり先ですが。

誤字脱字、おかしい点があったらどんどん言ってくれと嬉しいです。

第一話 主従の契約（前書き）

何か色々と間違ってる気がしなくもないな

第一話 主従の契約

“座”と呼ばれる空間に一人の英霊がいる。

- - - 英雄エミヤ。第5次聖杯戦争の勝者にして、その身に人の身には過ぎた魔術を宿す錬鉄の英雄。衛宮士郎。

彼は正義の味方だった。自分の身を省みず、他人のために死力を尽くす。その果てに彼は英雄となった。

彼は満足していなかった。彼は生前、いずれこぼれ落ちる一を切り捨てることで残りの九を救ってきた。彼の理想は全てを救うことしかし、それを彼の力だけで実現するのは不可能だった。

衛宮士郎ではこぼれ落ちる一を救うことはできない。けれど英霊となり、人ならざる力を得れば、より多くの人間を救うことができる。

衛宮士郎が切り捨ててきたものを救うことができる。

そしてその死後も、守護者としてより多くの人々を救うことが出来る。そう思ったからこそ、守護者とは世界の奴隷なのだと知りつつも、衛宮士郎は世界と契約し、命が尽きる時も未練なく、満足だと笑って英霊となった。

だが、実際は違った。守護者とは既に起こってしまった事に対し、霊長の存命のためだけに、善悪の区別無く行使される存在。そのあり方は生前の衛宮士郎と何も違わなかった。

エミヤはしたくもない人類の後始末をずっと続け、絶望し、次第

に理想は磨耗していった。そして過去の自分のあり方を憎み、その存在を消したいとまで思うようになった。

かつて彼が参加した聖杯戦争。あの戦場には今の彼の姿をしたアーチャーがいた。ならばこのエミヤが、あの場に喚ばれることもあるかもしれない。

そうすれば、かつての自分を自身の手で殺せる。歪みが大きければ、あるいは、エミヤという英雄は消滅するかもしれない。

それは、果てしなく0に近い確率。しかし、それだけを支えにエミヤは守護者を続けていた。

そして、その時が来た。英霊の座からはじき出される感覚の後、聖杯戦争の知識が与えられる。

彼は歓喜した。ようやく彼に残されたただ一つの願望が叶うかもしれない。

しかし、そこである事実気づいた。呼び出される時代が未来だったのだ。

期待していた分、彼はどん底に突き落とされた気分になった。しかし、サーヴァントとしてマスターに勝利をくれてやるのも一興かと意識を変えて、英雄エミヤは再び冬木の街に舞い降りた。

倉庫か何かと思われる場所に召喚され、始めに目に入ったのは地面に倒れている少女、そしてサーヴァントとおぼしき騎士。この状況はどう見ても、あのサーヴァントが少女を襲い、少女が私を召喚したということだろう。

そう判断すると、この身に一番慣れ親しんだ夫婦剣を投影し、件の騎士に切りかかる。それは簡単にいなされたが、何を思ったのか直ぐに騎士は扉から出て行った。

その扉を一睨みしておいて、私のマスターであろう少女に振り返る。私が口を開く前に少女が恐る恐る問い掛けてきた。

「あ、あの、あなた達は一体・・・」

少女の言葉に違和感を覚える。まさか、かつての私のように何も知らずに聖杯戦争に巻き込まれた口だろうか。

そう考えた時、この状況は守護者という地獄に落ちても忘れることは無かった、あの騎士王との出会いとそっくりだと思えた。だから、あの時と同じ台詞をあの時とは逆の立場で言ってみることにした。

「問おう。君が私のマスターか」

少女は目を困惑の色に染め、予想通りと言えば予想通りの言葉を続けた。

「え・・・マスター？」

こんな予想なんて当たって欲しくは無かった。少し頭が痛くなったが我慢しておくことにする。

「マスター、聞きたいことがあるのだろうが、あの騎士を追わなければならぬ。少しここで待っていてくれ」

「え、ちよっと・・・」

待つて、という言葉を聞かず、扉から出て行く。建物から外に出て最初に感じたのは既視感。何故か私はこの場所を知っているような気がする。

答えが出る前にすぐそこに騎士が剣を地面に突き刺し、佇んでいるのが見えた。

「ふむ、貴公はアーチャーか？いやはや、やっと7体のサーヴァントが揃ったということか」

「そういう君はセイバーかな？おそらく間違っではないと思うが」

「うむ、我こそはセイバーであるぞ」

「理由は知らないが、セイバーのサーヴァントともある者が弱い少女に手を出したのかね？私はつきり、セイバーとは誇りあるものだと思っていたのだが」

「我とて、あのような少女を追いかけて回す趣味など無い。しかし、マスターの命令とあらば話は別だ。騎士とは主の命を忠実にこなすものだからな」

「ほう、君のその行動はマスターの命か。それを言ってしまうても良かったのかね？」

「構わんさ。いずれは露見することだ」

やり取りの間に得た情報を整理する。この男は間違いなくセイバーで、既に7体のサーヴァントは揃っている。私のマスターである少女を襲撃したのはセイバーのマスターの命令。

そして何より気になったのは、それがいずれは露見していたということ。かなり重要な気がするが、情報が足りない。

「で、どうするセイバー。ここで雌雄を決するつもりか？」

「いや、マスターからも帰還命令がでておるところであるし、我はここで帰るとしよう。まあ貴公が立ちふさがるとなれば話は別だが？」

「・・・私としても戦わないで済むならそれに越したことはない。ここは素直に剣を引くことにしよう」

「そうか、ではアーチャー、また会おう」

そう言い残すとセイバーは、悠々と歩いて帰って行った。正直サーヴァント最優といわれるセイバーと真正面から戦うには分が悪かったなので、帰ってくれて安堵していたりする。

「やれやれ、面倒なことになったものだ」

干将・莫耶の投影を破棄し、後ろに振り返る。

「すまなかつたな、マスター。突然のことで驚いたろう」

「えっ、いや、驚いたのは驚いたけど助けて貰ったし、別に謝られることじゃ・・・」

セイバーとのやり取りの途中で出てきていた少女に謝罪するが、少女は直ぐに否定の言葉を口にする。

「そ、それより、さっきの質問に答えてください！あなた達は何なんですか！？学校から帰ってたらいきなり騎士に襲われるし、土蔵に追い詰められたと思ったら何も無い所からあなたは現れるし、しっかり説明してください！」

今までのセイバーに追われていた恐怖が消えたのだろう、怒涛の

勢いでまくし立てる。まあ錯乱して話が出来ないよりははるかにましだ。

「勿論だ。では先ずマスター、念のため聞くが君は魔術師・・・で間違い無いな？」

サーヴァントを召喚できるのだから魔術師の筈だが、一応前提として聞いておく。

「・・・え？魔術師？」

何ですかそれ？と言わんばかりに聞き返してくる。・・・何ということだろう、前提から間違っているとは。

「・・・少し待ってくれ、解析、トレース・オン開始」

魔術師で無いとすれば、どうやってサーヴァントである私をを呼び出したというのだろう。それを確認するため、彼女の状態を解析する。

「・・・ふむ」

結論から言うと、彼女は確かに魔術師ではなかったようだ。だが、彼女には魔術師としての才能があったようだ。魔術回路の本数など、あの遠坂以上である。この膨大な魔力が何故か外に漏れでて、そして何故か出現した召喚陣に反応したということだろう。

これを人為的にやったとすれば、犯人はセイバーのマスターだろう。何故そんなことをしたかはわからないが、偶然にしては出来過ぎている。

「あ、あの？」

何はともあれ、この少女は魔術師の世界の事など何も知らずに巻き込まれたということだ。聖杯戦争に巻き込みたくはない。しかし、セイバーのマスターがこの少女に干渉したとすれば、下手にマスター権を放棄させれば逆に危険かもしれない。

「すまない、どうやら認識に大きな差があったようだ。これから説明するから落ち着いて聞いて欲しい」

「魔術師に聖杯戦争、そんなものが本当にあるなんて・・・」

少女は信じられないのだろう。無理も無い、一般人ならば当然の反応だ。

「残念ながら事実だ。そして君にはマスターとなるか、決断をして貰わなければならない」

「でも、私もしかしたら狙われてるのかもしれないですよ？マスター権を放棄したら、あなたが居なくなっって危ないんじゃない？」

この反応で良かったと思える。かつての私のように聖杯戦争を止めるために参加するなどぬかしたら、斬り殺していたかもしれない。

「ふむ、その通りだ。監督役の所に逃げ込む、という手もあるが、私は監督役を知らないし、暗躍する監督役というのもしいるからお勧めはしないな」

思い出すのは、あの外道神父。あんな奴の所に逃げ込んだら命がいくつあっても足りない。

「むう、選択権なんて無いじゃないですか」

「確かにそうかもしれない。しかし自己で決めるのと、他者に決められるのでは大きな差がある。で、どうするかね？」

「いいですよ、マスターになります。ただし、絶対に私を守ってくださいね？」

「ああ、もちろんだとも。マスターは私が死んでも守ってみせる」

「はい。じゃあ、これからよろしくお願いします」

そういつて少女は頭を下げる。

「待て、マスター。その前に契約に置いて最も重要な事をしなければならぬ」

「？」

「名前だ。私達はまだ名前の交換を行っていない」

おろそかにされがちだが、これはとても重要な事だ。

「ああ、そうでしたね。私の名前は椋、藤村椋です」

「私はアーチャーだ。真名ではないがそう呼んでくれ」

藤村椋か、良い名前だ。と言おうとして、藤村という名字に聞き覚えがある事に気づいた。

あかいあくま・・・あれは遠坂、くろい後輩・・・あれは間桐、

しろいこあくま・・・あれは日本人ですらない、冬木の虎・・・それだ。

なんということだろう。信じられない。まさかこの少女はあの虎の血を引いているとでもいうのだろうか。

そういえばここを見た時、既視感を感じたが、ここはかつて私の住んでいた屋敷だったようだ。細部が変わっていたのでさっぱり気づかなかった。私が正義の味方になるために家を出た時、藤村組に管理を任せたのだったっけ。

「あの、どうかしました？」

「い、いや、では椀と呼ばせて貰おう。ああ、この響きは君に実に似合っている」

「なっ！」

椀の顔が赤くなっていく。どうしたのだろうか？

「どうした、椀。顔が赤いようだ」

「もう、わかってて言ってるでしょう・・・」

「いや、わからないから聞いたのだが」

「もっいいいです・・・」

一体何だと言っただろう？

「それより椀、そろそろ屋敷に入らないか？今は冬だ、体を冷やしては拙い」

「あつ、そうですね。やだ、夕ご飯の準備してなかった！」

椀は慌てて屋敷に入って行った。私もその後を追う。

「それにしても・・・」

私はかつて聖杯を壊した、それは間違いない。ならば何故、この時代に聖杯戦争が起こったのだろう。新たに聖杯が出現したとでもいうのだろうか。

考えても答えが出る筈もないか。今はマスターである権を守ることに終始することにしよう。

第一話 主従の契約（後書き）

基本的にはこの小説はアーチャー視点と三人称視点からなります。
あとセイバーの「我」は「我^{オレ}」ではなくてそのまま「我^{ワレ}」です。

第二話 主従の交わり（前書き）

感想でも言われたんですけど、この作品では未来だからって空飛ぶ車とかが有るわけじゃありません。ですから、未来を大して感じられません。基本的には現代と一緒に、プラスチックファ展してるかな？ぐらいです。

第二話 主従の交わり

段々と空が白んでいく。そろそろ夜が明けるようだ。私は見張りのために登っていた屋根から飛び降り、元衛宮邸の庭に着地する。この屋敷もかつてより幾ばくかハイテク化が進み、解析してもよく分らないような機械が壁に埋め込まれていたりする。

昨日は酷く疲労していたであろう椛が直ぐに就寝してしまったため、聖杯戦争についてあまり詳しく話すことが出来ていない。今日はしっかりと説明しなければ、などと考えながら厨房へ向かっていく。

椛は昨日の疲れから起きてくるのは遅くなるだろう。そうすれば今日は土曜日で学校が無いため、朝食を抜くという可能性が出てくる。私のマスターにそんな不衛生な生活を送って欲しくはない。ならば私が朝食を作るというのは必然だ。

これは渾然たる事実であり、決して私が久しぶりに腕を振るいたいと思つた訳では断じてない。

・・・何故だろう、どこからかツンデレという単語が聞こえる。はて、ツンデレとはどういう意味だっただろう。

椛はやはり予想通り、ピンクで程よく統一された部屋の中で熟睡していた。寝かしておいてあげたいという気持ちはあるが、せっか

く作った朝食を冷ます訳にはいかないので、心を鬼にして起こすことにする。

「おい、起きないか椀」

「ん、あと10分。・・・って、あれ？アーチャー？」

「私以外に誰がいると言うのだ。それより起きたなら早く居間に来い、朝食を作っておいた」

私の発言に思う所が有ったのか、椀は覚醒しきっていない眼で此方を胡乱気に見てくる。

「アーチャーはサーヴァントで過去の英雄なんだよね？何で朝食なんて作ってるの？」

「英雄ならば食事を作ってはいけないのか？」

「いや、そういう訳ではないけど」

「ならば良いではないか、この話はここで終わりだ。冷めない内に食事にしよう。私は先に行っているから早く来い」

椀はまだ何か言いたげだが、さっさと切り上げておいて私は椀の私室から出て行く。椀を起こすために仕方なく部屋に入ったが、基本的には思春期の女子の部屋に入るべきではないだろう。加えて、私には少女の着替えを見る趣味はない。

居間で待つこと5分、椀が着替えを済ませてやって来た。遠坂のように寝起きが最悪ということは無かったようだ。

「うわっ、これ本当にアーチャーが作ったの？」

「そうだが、もしかとは思うが和食は駄目だったか？」

今朝のメニューは、白米に味噌汁はデフォルトで、鮭の照り焼き

に煮物、冷や奴とほうれん草のお浸しを加えたこれぞ和食という献立だ。

和食なら他の者には負けないと自負している（他の料理でも勝てないとは思わないが）ので、口に合わないということはないと思うが。

そんなことは無いと言いながら、椀はゆっくりと煮物に箸を伸ばす。それを口にした瞬間、目を見開き他の料理に手を出していく。そしてそれらを口に入れる度に表情が変わるところを見ると、満足して貰えたようなので作った側としては嬉しくない筈もない。

「・・・何でこんなに美味しいの？女として負けた気がするんだけど」

椀は尊厳を傷つけられたようで、酷く落ち込んでいる。昨日彼女は、今はこの屋敷に一人暮らしと言っていたので、おそらく彼女自身も料理をするのだらう。まあ彼女の年齢なら今から修行すればこの領域に達することもあるのかもしれないが。閑話休題。

結局、椀はご飯を3杯もおかわりをして朝食を終えた。一般の女子高生からすればよく食べる方の筈だが、腹ペコ王や虎を知ってしまつた私からすれば可愛いものだ。

何故だらう、目頭が熱くなってきた。

「さて、食事も済んだことだし本題に入るとしよう」

食事の後片付けを済ませてから切り出す。椀は緩んでいた顔を引き締めて此方を見据えてきた。真面目な話の時は切り替えることがきちんと出来る人物らしい。

「昨日は魔術師というものがいることと、聖杯戦争とは魔術師7人が万能の釜である聖杯を過去の英雄であるサーヴァントを使役しての奪い合いという所まで話したな？」

「うん、それと私に魔術師の才能があるってのも聞いたよ？」

「その通りだ。おそらく君の先祖の誰かが魔術師だったということだろう。まあ、それはさして重要なことではない。私は魔術について教えることが出来ないし、仮に覚えることが出来たとしても付け焼き刃では殆ど意味がないだろう」

私が使えるのは基本的に固有結界から漏れ出た投影と強化ぐらいのものなので、的確な指示をすることは出来ないだろう。それに教えたとしても、桜を魔術師の世界に完全に引き込むことになるのであまり教えたくはない。

まあ、彼女は魔力が桁違いなので私の力が十全に発揮できることは僥倖だろう。これで魔力供給まで出来なければ目も当てられない事態になっていた。

今思えば、パスが通っていて本当に良かったと思う。パスが通じていなければ、もし魔力供給がどうしても必要になった時、かつての私とセイバーのように・・・駄目だ、本当にパスが通っていて良かった。

「まあそれは良いとして、君には別に聖杯戦争に参加する理由はないのだから、この屋敷にずっと隠れていることをお勧めするが」

「うん、私も死にたくないし、基本的には出ないようにする。けど学校にはきちんと行uksi、本家の方にも顔を出さない」と

「どうやら無謀なことをしようとは考えていないようだ。と、ここで気になる発言をしたことに気づく。」

「君は家出をしたのではなかったのか？家出中に顔見せをするものなど聞いたことがないが」

「別に家族と仲が悪くて家出した訳じゃないの、しばらく会ってなかった兄が帰ってきて、ちょっと家に居づらくなっただけ」

「どういうことだ？実の兄に久しぶりに逢えたのならば、逆に一緒に居たいものではないのか？」

桜が少し困った顔をする。もしかしたら、あまり聞かれたくない内容なのだろうか。

「私の両親は離婚してて、父の方に兄はついていったの。どうも兄は父に虐待されてたらしくて、ぬくぬくと暮らしてた私が気に食わないみたい。」

そんな兄を追い出す訳にもいかないし、一緒の家に居たら空気が悪くなるから別宅の方に私だけ住むことにしたの」

そういうことならば無理もないか、高校生の少女を一人にするのは感心出来ないが他に方法も無かったのだろう。彼女自身も納得しているようだし、部外者である私が口を挟む問題でもない。

話が少し脱線してしまっていたようだ。気を取り直して話を進めることにする。

「・・・本題に戻ろう、家を出ないにしても君はマスターであり、私はサーヴァントである以上我々は聖杯戦争の参加者だ。故に必ず戦闘をすることになるだろう。その時にどんなことがあるうとも、我々の戦闘に近づいてはならない。それを理解しておいてくれ」

まあ、この少女ならばおそらくは必要のない忠告だろう。今までの会話からして、自分の引き際を分かっているタイプであろうことが推測される。

椛も頷いてくれた。出来る限り私も椛を守るが、安全な所にいるのと近くにいられるのでは守りやすさが違うし、全力を出し辛い。

「それと、君の両腕のどちらかに痣のようなものがないか？」

「えーっと、これ？何なのこれ？少なくとも昨日の昼まではなかったと思うんだけど？」

「それは令呪というものだ。マスターの証であり、サーヴァントを律する為の道具。」

それを使えば3回までサーヴァントに命令をすることが出来る。例えば、私は瞬間移動などといったことは出来ないが、それに願えば私と君の魔力の届く範囲ならばそれを可能とする」

椛は自分の右腕に刻まれている令呪をまじまじと見つめる。自分にいつの間にかついていたものにそのような効果があるなど信じられないのだろう。

「だからもし、私が何らかの事情で君と離れていた場合はそれで私を呼び出してくれ」

出来る限り一緒に行動するつもりだが、そういう機会が訪れることも有るかもしれない。こういうことは想定しておくに越したことはない。

「うん、分かった。でもこれどうやって使うの？私魔術なんて使えないよ？」

「それを使う時に使いたいと考えればいい。声に出しても構わんがな。別に特別な魔術を必要とする訳でもないのだから、君でも問題なく使えるだろう」

「ふーん、じゃあ令呪に命じる、アーチャーよ執事服を着ろ！って言ったら本当に着ちゃうの？」

「・・・なんだその命令は、確かにそのような命令でも実行される。しかし3回しか使えない令呪で、そんなふざけた命令を本当にするつもりではないだろうな？」

何故に執事服なのだ？確かに私は生前ルヴィアの所で執事をやっていたから着たことが無いわけではないが、この少女が知っている筈は有るまい。

「いや、なんかこの男には執事服を着せろってどこかで誰かが言ってたような・・・」

誰だ！そんな怪電波を発信しているのは！あかいあくまか！あかいあくまなのか！

あのあかいあくまの笑い声が私にまで聞こえてきたような気がする。・・・遠坂よ、私は未来に来てまでも君に弄られ続けなければいけないのか？

「・・・椀、頼むからそんな命令はしないでくれ」

「いや、冗談だから。なんでそんなに落ち込んだの？」

「・・・聞かなくてくれるとありがたい」

「・・・うん、分かった。ごめん、言いたくないなら言わないでいいよ」

先ほどから生前、遠坂にされた仕打ちが頭の中でリピートされている。私の記憶は磨耗していたんじゃないかなかったのだろうか、どうしてこんなに鮮明に覚えているのだろうか？

なんとか記憶を払拭して、私は心配そうにしている椀に向き直る。

「まあ、大まかな説明はこんなものか。言い忘れていたことが有っ

たらその時に伝えよう」

「うん、ありがとアーチャー」

かつての聖杯戦争のことなどは話していないが、話す意味もないし、話すつもりもない。

と、ここで桜が何かおもいついたようで、身を乗り出して問い掛けて来た。

「ねえ、サーヴァントは聖杯に生前叶えられなかった未練を叶えて貰う為に、聖杯戦争に参加するんだったよね？」

アーチャーも聖杯を手に入れたいんでしょう？私が勝つ意志が無いと困るんじゃないの？」

「ああ、そのことか、ならば心配は無用だ。私は生前に未練など無かったし、あんなものに願いを叶えて貰おうとは思わない」

桜は私の言葉に驚いたようで、目を点にしている。

「え、じゃあなんで聖杯戦争に参加してるの？」

「私は聖杯に興味こそ無いが、聖杯戦争に一つ用が有ったのだ。まあ、今回その用が達せられることはないだろうが」

私の目的は衛宮士郎を抹殺し、私自身の存在を消すこと。それが達成出来るのは第5次聖杯戦争だけ。今回の聖杯戦争でその願いが叶うことはないだろう。

もし仮に今回の聖杯は汚染されていなくて、その聖杯に願えばそれも叶うかもしれないが、私にその意志は無い。

「だったら、ここには用は無かったってこと？」

桜が恐る恐る聞いてくる。私にとって無意味な召喚をしてしまっ

たことに申し訳なさでも覚えているのだろうか。それとも、私が椀を恨むとも思っているのだろうか。

「いや、私は君のサーヴァントだからな。私が君のサーヴァントである以上、私は君を守り続ける。だから私はまだ聖杯戦争を降りるつもりはない」

私は消えたところで守護者という掃除屋に戻るだけだ。椀を守ることに抵抗などない。

椀はそれを聞いて安心したようでほっと一息ついている。

「それに、少し気になることもあるしな」
「気になること？」

この聖杯戦争は何故起こったのか、今回の聖杯は汚染されているのか、セイバーは何故椀を狙ったのか、挙げられるのはこのあたりか。

「いや、別に大したことではない。それより椀、朝食を作っていて気づいたのだが、冷蔵庫の中が殆ど空だったぞ？買い出しに行くのが賢明だと思うが」

これ以上突っ込まれると余計な不安を与えかねないので、話題を切り替えることにした。

だが、買い出しに出ないといけないのは本当だ。朝食はなんとか作ることが出来たが、それで冷蔵庫の中はすっからかんになった。外出は出来るだけ控えるべきだが、こればかりは仕方がない。

ちなみにこの時代でもスーパーやコンビニは健在だ。近年では自分で料理するのが流行っているらしく、巨大スーパーには世界中のありとあらゆる食材が集まっているらしい。

「そういえばそうだった。うん、じゃあ私は出かける準備してくるね」

そう言い残し、椛は廊下をぱたぱたと走っていく。私は用意することが無いので、部屋に有ったこの周辺の地図を再度確認しておく。

今回外出するのは確かに買い出しがメインだが、その他に地理の把握というのも入っている。

地理の把握というものは戦闘において、とても重要だ。逃げる際は逃げ道が分からなければすぐに捕まるし、逆に罠を仕掛けることも出来る。

今は私が住んでいた頃とは建っている建物が大きく違うため実際にその場所に行つて確認しなければならない。（もつとも私はその頃のことはうる覚えなのでどの道確認しなければならなかったが）昨日の内に確認に行きたかったのだが、マスターを無防備にする訳にもいかなかった為断念していた。

昨日も地図を見たのだが、やはり記憶にうつすらある地図とは大分違っていた。まあ、90年経つて変わらない方がおかしいが。

「お待たせ、アーチャー」

地図を畳んでいると、準備が終わったらしい椛が話しかけてきた。服は時代が違うのだから、センスも私の生前の頃と違うのだろうと思っていたが、それでも無いらしい。オレンジを基調としたコーディネートは華美ではないが、椛によく似合っていた。

「よく似合っているじゃないか椛」

「ありがと、お世辞でも嬉しい」

「む、別にお世辞という訳ではないが」
「くす、じゃあ行こうか」

椀は玄関に向かって歩き出したので、私もそれに付いて行く。何か椀の耳が少し赤い気もするが多分気のせいだろう。何

第二話 主従の交わり（後書き）

次の話は新しいサーヴァントが出てきての戦闘になります。書いてる段階でどうしてこうなった！って思うようなサーヴァントになっちゃってるんで、その英雄好きの人が怒らないかな？って若干びびってます。

あと、出来れば感想とかよろしくお願いします。

第三話 今代の遠坂（前書き）

- ・ 戦闘シーンって難しい……。今書いてるところも戦闘シーンだけど全然進まない。他の作者の人はよくあんなに上手く書けるな・

第三話 今代の遠坂

私と桜は今、新都にある最も高いビルの屋上にいる。かつてよりも都市化が進み、高層ビルが建ち並んでいる中で最も高いここは、昔で言うところの東京タワーより少し高いぐらいか。

桜は私が投影した超高性能双眼鏡（39800円）である一点を凝視していて、私は弓を構えている。ここまで言えば分かると思うが、ここより2？ほど離れた場所にサーヴァント二組が睨み合っている。

人払いの結界でも張っているのか、周りに人影はない。一応そういう配慮はしているようだが、何も真つ昼間から街で戦おうとしてもいいと思うのだが。

睨み合っている両者は、サーヴァントはどちらも男でマスターはどちらも女。片方の赤髪のサーヴァントは長い棒のような物を持っていることからおそらくランサーだろう。

そして、もう一人の方だが・・・これほど真名が分かりやすい英霊はいないんじゃないかと思うほど特徴のある風貌をしている。身長は2メートルを越す大男で、髭が物凄く長く、それでいて艶やか。顔は棗のように赤い。こんな英雄世界を探しても一人しかいないだろう。彼の逸話と残っているクラスから考えれば、ライダーのクラスか。

ライダーの真名が解ったのは大きな収穫だ。だが、それ以上に私の関心を引くのはそのライダーのマスターであろう少女。赤いコートを羽織り、腕を組んでいるあの少女は・・・

「・・・遠坂？」

「えっ、アーチャー遠坂先輩を知ってるの？」

「いや、知りはないが・・・できればその遠坂先輩という人に教えてくれないか」

「う、うん。遠坂命先輩、私の一つ上の学年で、私の親戚筋の人なの。まさか魔術師だったとは思わなかったけど・・・」

どうやら彼女はあの遠坂凜の子孫らしい。やはり冬木のセカンドオーナーとして、今回の聖杯戦争に参加しない訳にはいかなかったのだろうか。

「！浬、どうやら戦いを始めるらしいぞ。よく見ておくんだ」

時間は少し遡る。遠坂命は傍らにライダーを従えて街を探索していた。彼女は聖杯戦争に参加しているマスターを探すためにこのところ毎日、街を練り歩いている。

彼女の容姿はとも彼女の曾祖母である遠坂凜の若かりし頃に似ている。格好もツインテールとニーソのゴールデンコンビで、並べてみればどちらがどちらか判断するのに少なくとも30秒はかかるだろう。ちなみに学校のミスコンで浬の上の一位になったのは何を隠そう彼女である。

そうして街を探索中にばったりと出会ってしまったのがランサー

主従である。いや、出会ったのは好都合だ。なにせ出歩いていた目的なのだから。しかし、ここで予想外の行動に出た者がいた。それは・・・

「お主がランサーか！僕はライダーのサーヴァント！真名は関羽雲長！いざ尋常にしよう、ぶるうああああ！」

ライダーこと関羽の、英雄嫌いの某ワカメやメロン大好き某Vの如き奇声が周辺に響きわたる。その原因は遠坂命が関羽の顎にアッパーカットを放っていたことによるものだった。その角度や腰の入り方は完璧で、今の技をプロが見ていたら必ずスカウトに動くだろうというほど美しかった。

「むう、何をするミコト。髭のセットが崩れかけたではないか」

「あんたは何で真名を自分から言うわけ！？真名を知られないようにするのは聖杯戦争の常識でしょうが！」

「よいではないか。僕は見た目からすぐ真名がばれるのだし・・・」

「それでも！本当は関羽じゃないかもしれないぞ？とか言えば少しは揺さぶれるかもしれないでしょうが！」

「おお、そのような手が有ったか。って、ぶるうああああ！」

「地獄に堕ちろーっっ」

またしても命のアップercutが決まった。しかも今度は鳩尾に蹴りのオマケ付きだ。

そんなショートコントが目の前で繰り広げられている中、ランサーのマスターは非常に困っていた。実はランサーも好戦的な性格で、名乗られた以上自分から真名を漏らしかねない。

ランサーも関羽と同等、もしくはそれ以上に知名度が有る英雄なので、対策を練られれば厄介なことになる。

「・・・ランサー、名乗っちゃ駄目」

「あん？そんな気はねーよ。おれあ別に戦闘に対する矜持なんてねーからな。ただ喧嘩して面白けりやそれでいい」

「・・・そう、ならいい」

ランサーのマスターことティアリス・ウル・オルレアンは普段から非常に口数が少ない。服装も黒一色で統一されていて、かなり暗い雰囲気を感じさせる。身長も18という歳のわりに低いので、顔は美人の分類に属するが目立つことが無い。

そんな彼女にはどうしても成し遂げたいことが有る。だからこの聖杯戦争に参加したのだが、その性格のせいでせっかく呼び出したサーヴァントとの会話は数えるほどだった。そのため、ランサーの性格も完全に掴みきってはいない。

「ったく、めんどくせー。おい！ライダー！そんなことどうでもいいから、さっさと死合おうぜ！」

「う、うむ。それで良いかミコト？」

「・・・いいわよ（本当は良くないけど）ただし、必ず勝ちなさい！いいわね！」

「うむ！心得た！」

今まで命に一人リンチを受けていたライダーも戦闘体制に入る。

彼の武器である大薙刀、青龍円月刀を構えてランサーを見据える様は、先ほどまでとは違い超一級の武人のそれだった。

対するランサーも口元を弧にして、武器の棒を握り直した。彼の棒は宝具であるが、魔術によりその正体がばれないよう細工がしてある。本来ならランサーはその能力を活用して戦闘をするのだが、今回は封印してある。

互いに前へ出る。どちらの武器も長物であるため、リーチの差は

殆ど無い。つまりこの勝負は純粹に押し勝った方が勝者となる。

先ずはランサーが棒を振り下ろす。ライダーはそれを受け止め、振り払う。そして次はライダーから攻める。しかし、横に薙いだ青龍円月刀はランサーに跳躍されることで簡単に避けられてしまう。

次はランサー、その次はライダー、というように互いに攻守を入れ替えながら何合、何十合と武器を重ね合わせる。それを見ていた命とティアリスは、初めて見る人外の戦闘に魅入られていた。本来ならマスターである彼女たちもサポートに回るべきなのだろうが、そんなことは考えられなかった。

「ふん、やるじゃねーかライダー。三国時代の中でも最強の武将に挙げられるだけのことはある」

「お主もな、ランサー。その素早さは獣の如く、その棒術は鬼神の如き腕だ。生前はそうとうな英雄だったと見受けるが、如何かな？」
「まあ、そこそこ有名ならしいな。けどな、そんなことを言われても俺は真名を喋らねーぞ」

そんな会話も神速の如き剣舞の中で行われている。やはりランサーだけあって敏捷さではそちらの方が上だが、筋力ではライダーの方が上であり、どちらが有利とも言えない。ランサーは手数で攻めるが、ライダーは一撃、一撃が強烈だ。

このままでは千日手になるだろう。そう考えたライダーは一旦ランサーを弾き飛ばし、彼の宝具を呼び出すことにした。

「来い！赤兎ーっ！」

そう叫んだ瞬間、どこからともなく全身が炎の如く赤い馬が現れた。この馬こそがライダーである関羽の宝具、赤兎馬。三国志にお

いて呂布や関羽を乗せ、戦場を駆けつけた最高の名馬である。

初戦であるこの戦いにおいて宝具を使うのはあまり得策ではない。この戦いで勝利することはできるかもしれないが、どこか遠くでこの戦いを見ているかもしれない他のサーヴァントやマスターに情報を明け渡すことになるからだ。実際、ここから2？離れた高層ビルにアーチャーと楯がいる。

しかし、既に真名をばらしてしまっているライダーからすれば宝具を隠すことに大した意味は無い。ライダーがそこまで考えているかは分からないが、そう考えた命は何も言わなかった。

「げ、マジかよ・・・」

ランサーが悪態をつく。ランサーに取ってこれは歓迎できることではない。ライダーは宝具を晒して失うものは少ないが、ランサーが宝具を使えばそれだけで真名までばらすことになる。もともと、ランサーが宝具を使ったところでライダーの宝具を止められるか？となれば疑問が残るが。

そうこうしている内にライダーは赤兎馬に跨る。これでもはや真名を解放するだけで赤兎馬はその真価を発揮し、ランサーに襲いかかるだろう。そして、ライダーの宣言が響きわたる。

「往くぞ！！赤き馬王！！！！！！」
フラン・フォース

真名解放した瞬間、赤兎馬の龍のそのような咆哮により大気が震撼した。ティアリスはそれを真正面から受け止め、本能的に自己の死を悟る。こんなものに敵対すればただの小娘如きが生き残れる筈がない
！

ライダーと赤兎馬の突進が始まる。赤兎馬は一日で千里を走った

という駿馬、宝具と化した今は生前の速度を遥かに超える。目と鼻の先にいるランサーとティアリスに迫ることなど、一秒もあればお釣りがくるだろう。

しかし、「赤き馬王」^{フラン・フォース}の宝具としての真価はその速度や単身による突進ではない。三国志において赤兎馬はその時代で最強の者にしか騎乗することを許さなかった。そこから生まれた概念は騎乗した者を最強とすること。つまり、今のライダーのランクは普段より一つ上がっている。

赤兎馬のランクは単体ならばBである。しかし、その能力と関羽のもう一つの宝具である青龍円月刀の組み合わせにより、その突進はA+の威力に相当する。

「ちいつ！おい！ティアリス！正体隠すとか言ってる場合じゃねーぞ！」

ランサーは最初の突進をティアリスを抱えて、かるうじてかわした。しかし、次に避けられるという保証などない。また、この速度ならいくらランサーが全力で逃げようと直ぐに追いつかれてしまうだろう。

「・・・分かった。宝具の開帳を許す」

現在、死の恐怖がティアリスに常に纏わりついている。しかし、ティアリスは自分の願いのために負けるわけにはいかなかった。だからだろう、彼女は怯えながらも己の従者に応える。

ティアリスの許可を得て、ランサーは宝具の偽装を解く。煌びやかな金の装飾がなされたそれは、真に英雄の武器だった。しかし、この武器にはあの突進を防ぐような力はない。だからランサーが狙

うのはライダーのマスターである命。

「ふんっ、さあ来いよ！ライダー！」

「おお！その心意気やよし！儂も全力で参るぞ！」

ランサーはライダーを煽ってライダーも乗るが、ランサーには別に正面衝突で勝とうという気は無い。ランサーに取ってこれは喧嘩で、弱点を攻めるのは常識。武人の誇りなどかけらも無い。だから命を狙うのに躊躇いもさらさら無い。

「ラン・フォース
赤き馬王！！！！！」

再びライダーが真名解放をする。今回はティアリスは安全な場所に置いてきたので、純粋な速さ対決。ライダーがランサーを捉えられるか、ランサーがかわして命に攻撃出来るか。

ライダーの突進がランサーの右脚に掠る。それだけで脚は吹き飛ばが、サーヴァントにとってそれは戦闘不能になるということにはならない。

「はっ！俺の勝ちだぜ、ライダー！」

ランサーから命まで距離は300メートルは離れている。本来なら攻撃出来る距離ではない。しかし、ランサーの宝具にとってこの距離は有って無いもの。故にランサーの勝利はもはや揺るぎない！

「悪いな、嬢ちゃん！恨むなら自分のサーヴァントを恨みな！」
「何っ！？」

ライダーが焦るが、もう遅い。突進の後でランサーの攻撃を止め

る術などライダーに在りはしない。

「ランサー……！」

だが、ランサーの攻撃が行われることは無かった。ランサーは己の主の初めての叫び声に驚き、そして状況を理解する。

ランサーとライダーめがけて何かが飛翔しているのだ。そのランクは少なく見積もってもB以上、直接受ければサーヴァントとてただでは済まない。

ランサーは怪我をしている上に攻撃体制、避けることなど不可能だからティアリスは躊躇いなく、3回しか使えない絶対命令権を使用する。

そうして、ランサーはティアリスの下に転移し、今までの場所を見る。その瞬間、飛来していた何かが爆発した。この爆発はAランク相当の威力。ティアリスが令呪を使うのを躊躇っていれば、ランサーが聖杯戦争の最初の脱落者となっていただろう。

爆発で起こっていた煙が晴れる。そこには誰もいない。ライダーはどうなったのだろうか、マスターの少女が令呪を使っていなければ死んだということなのだろうか。

ライダーが見当たらない以上、ランサーとティアリスにはここに留まる理由はない。怪我の回復をしなければならなし、あの何かを放ってきたサーヴァントの追撃が無いとも限らない。早々にその場を離れた。

「飛び道具ってことは弓兵か？^{アーチャー}やってくれるぜ全く」

ランサーの予測通り、その何かを放ったのはアーチャーだった。
時間はランサーが宝具の封印を解いた時に遡る。

アーチャーの鷹の目には2？先の事だろうと簡単に見て取ることが出来る。だからライダーの宝具の威力も見れたし、ランサーが宝具の封印を解いたのも見えた。そしてぶつかり合いの瞬間を狙って偽・螺旋剣^{カラドボルグ}を放つことも容易だった。

アーチャーに取ってこれはまたと無い好機だった。ランサーもライダーも相当な実力者だ、アーチャーと1対1で戦えば勝敗がどちらに転ぶか分からない。

そんな彼らを一遍に攻撃出来るのだ。これを好機と言わず何と云う。上手くいけば両者を倒せるし、悪くても重傷を負わすか令呪を使わせることが出来るだろう。

そしてアーチャーの思惑通りにことは進んだ。ランサーは令呪で転移し、ライダーは防御の体勢を取っている。アーチャーはニヤリと笑いながら仕上げに入る。

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

偽・螺旋剣^{カラドボルグ}が爆発し、その近辺を火の海に変える。ライダーは直撃の瞬間消えなので、おそらく令呪が行使されたのだろう。サーヴァントを倒せなかったのは残念だが、最低限目的を果たしたのでよしとする。

「・・・ねえ、大丈夫なの？」

椛が不安げにアーチャーを見つめる。その言葉の意味は街の惨状を差しているのか、それとも自分たちの安全を差しているのか。

「おそらくは大丈夫だろう。あの二組が我々を見つけた様子は無かつたし、精々が襲撃の主が弓兵^{アーチャー}だろうと当たりをつけるくらいか」

アーチャーは後者の方だと考えたのだろう。椛も何も言わないことを見ると、間違っていないようだ。

「さて、私たちもここを離れるぞ。あまり長居をすれば見つかるし、当初の目的である買い出しもしなければ」

アーチャー達がライダーとランサーを見つけたのは偶然だった。

買い出しを先にと荷物になるので、ある程度街を回った後に新都の中で一番高いこのビルに登ったのだが、たまたま命とティアリスがアーチャーの目に入り、ずっと戦闘を見ていた。そのため買い出しを終えていなかったのだ。

アーチャーは椛を抱え、ビルから飛び降りる。誰かに見つければ騒動になるが、この時代のビルは完全防音であるし、近辺に誰もいないのは確認している。

「きゃああああーっ！！！！！！」

椛が悲鳴を上げて私に抱きついてくる。一般の女子高生が高層ビルから落ちたら普通こういう反応をするだろう。

・・・遠坂だったら面白がるかもな、とアーチャーが考えていた

のはまた別の話である。

おまけ

「ハイ、ジェニファー」

「なーに、ジャック？」

「君は遠くが見えなくて困ったことは無い？」

「実はあるの！ついこの間、最新版ロボットの発表会に行ったんだけど、混んでて全く見えなかったの！！あの時は悔しかったわ！」

「おー、それは残念だ。だけど大丈夫！そんな時はコレ！超高性能双眼鏡！」

「ジャック、そんなので本当によく見えるの？とってもちっちゃいんだけど・・・」

「ふっふっふ、舐めてもらっちゃ困る。この双眼鏡は最新鋭の技術を搭載していて、調節すれば近場から最大8？先まで、すぐそこにいるかのように見えるんだ！」

「8?も!?それは凄い!」

「それだけじゃない、この双眼鏡には写真機能も搭載しているから、普段は撮れないものも撮れるかも・・・」

「うーん、それは凄いけど、そんなに高性能なら値段も高いんじゃない?」

「大丈夫!高性能双眼鏡に双眼鏡カバーや洗浄機もつけて、たったの税込み39800円!」

「39800円!?安いわね!これだけ高性能なら全然惜しくないわ!」

「さあ、今すぐ電話しよう!」

「ええ!」

「・・・これは」

「あれ、アーチャー何見てるの?」

「ああ、少しテレビで高性能双眼鏡をやっていたのでな・・・」

「双眼鏡?・・・ああ、あのぼったくり双眼鏡の事?高すぎて誰も買わないって聞いたけど」

「・・・(じつとテレビを見つめている)」

「・・・街に行くときに売り場覗いて見る?」

「・・・(コクン)」

第三話 今代の遠坂（後書き）

先ずライダーの宝具のネーミングがヤバい。『せきとば』ってそのままだったら微妙だから英語で考えたけど……。EXTRAで呂布が『ゴッド・フォース』だったし、フォース括りでいつかの他にいい名前を思いついたら変えるかも。

次にランサー、すぐに真名が分かる気がする……。伏線張るのは好きだけど張り方が下手なんだよな。

あとライダーはこれから随分と壊れる予定です。期待しないで見てやってください。

第四話 突然の来訪者（前書き）

桜が散った

彼女は桜は散る時が美しいと喜んだ

彼はまだ散らないで欲しかったと嘆いた

あの人は興味が無いから散ったことにすら気づかない

SAKURA FUJIMURA

第四話 突然の来訪者

ランサーとライダーの戦闘に介入して一日が過ぎ、今日は2月6日曜日。昨日と同じく朝食を作って柗を満足させ、その余韻に浸っていると、インターホンが鳴った。

「あれ、誰かな？今日は誰とも会う予定無いんだけど・・・」

そう言いながら柗は玄関に向かって行く。私も一応霊体化して、後ろに付く。玄関を開けると、そこにいたのは・・・

「おはよう、柗」

「えっ、遠坂先輩！？」

昨日ライダーを従え、ランサー主従と戦っていた遠坂命その人だった。

「何で遠坂先輩が家に・・・？」

「あら、分かり切っていることでしょう？昨日のあれ、貴女のサーヴァントの仕業でしょう？」

「つつ！？」

柗が後ずさるのとは逆に、私は前に出て霊体化を解く。遠坂命は興味深そうに私を眺めた後、やれやれというポーズをとる。

「貴方が柗のサーヴァントね？なかなかいい男じゃない。けど睨むのは止めてくれないかしら、私は別に争いに来たんじゃ無いんだから」

「ふむ、だったら後ろの男を何とかしてくれないか。正直、生きた

心地がしない」

遠坂命の後ろにいる男　つまりライダーだが　は武器を持っていない。しかしその雰囲気醸し出す威圧感だけで戦場を感じさせる。

遠坂命がライダーに一瞥をくると、ライダーは頷いた後霊体化した。

「いいのかね？要求しておいてなんだが、一応此処は敵地だぞ？」

「あら、交渉事に刃は不要よ。それともこの隙に私を殺す？アーチャー」

遠坂命は挑発的に自分を指差す。私がこの場で自分を殺すことなど有り得ないと思っっているのか、それともその気を起こしても構わないという自信が有るのか。

「ふっ、止めておこう。それより、いい加減中に入らないか？何時までも此処で立ち話をするのも何だろう。桜もそれでいいな？」

「えっ、う、うん。遠坂先輩、どうぞ此方です」

蚊帳の外にいた桜に話を振ると、一瞬びくつと反応した後頷き、遠坂命を案内する。いまいち現状が理解出来ないのだろう、目が泳いでいる。

「それにしても、桜が魔術師だったなんてね。全く気付かなかったわ」

居間へと案内中の廊下で、遠坂命が話を切り出す。皆が無言な事に耐えられなかったのだろうか。

「違います、私は魔術師じゃありません」

「・・・は？何よそれ！？どういうこと！？説明しなさい！」

桜の言葉に遠坂命は立ち止まり、いきり立つ。それは仕方ないことだろう。聖杯戦争は魔術師の戦争だ、一般人が紛れ込むなんて誰が考えるのか。

桜は苦笑しながらも、今までの経緯を話した。帰宅中にセイバーに襲われたこと、土蔵で私を召喚したこと、自分に魔術師の才能が有ったらしいこと。

「はあ、一体どうなってるのよ」

遠坂命はそれらを真剣に聴いて、桜の話が終わると盛大なため息をついた。その瞳には桜を案じる色が有る。

桜は昨日「遠坂先輩は親戚筋に当たる」と言っていたし、これまでの会話からそれなりに親交が有ったということが伺える。おそらく今日も本来なら、聖杯戦争から身を退けと言いに来たのだろう。

「それなら何で昨日は私達に攻撃してきたのよ！」

遠坂命は思い出した様に私に詰め寄って来る。確かに、桜には聖杯戦争を勝つ理由が無いのだから、あれは不自然に感じるのかもしれない。

「愚問だな。勝つ理由は無くとも負けられない理由ならある。そのために、障害と成りうるものは排除するべきだろう？」

そう、聖杯戦争のマスターはサーヴァントが死んでも令呪が残っていればまだマスターとしての資格が有る。故にもし私が敗北すれ

は椛の命が危うい。それ以前にセイバーのマスターに狙われている節があるのだ、私がいなくなる訳にもいくまい。

「・・・まあ、いいけど。昨日のこと怒ってるわけじゃないし」

「怒ってないんですか・・・？」

「私だってチャンスが有ったらやってるもの。それに、あの時ちよっとピンチだったしね」

遠坂命は本気でそう思っているのだろう。苦笑しながら椛に語りかける。私もあの選択が間違っていたとは思わない。

止まっていた足を進め、再び無言になる。今回は遠坂命も何も言い出そうとしない。いや、真剣そうな顔をしているところからみると、先ほどの発言を吟味して今後の交渉について考えているのだろうか。

居間に着くと椛は、お茶を淹れてくる。と言ってすぐに出て行った。居間には私と遠坂命、霊体化して見えないライダーだけになる。遠坂命は椛が完全に居なくなったのを見計らって、私に切り出してきた。

「・・・ねえ、アーチャー。貴方は椛がマスターなことに不満は無いの？」

サーヴァントは願いを叶えるために聖杯戦争に参加する。それなのに椛に勝つつもりが無い、それに不満が無い筈が無いと考えているのだろう。

これは椛のことを案じての問いだ。私が椛を裏切れば彼女の命は無いのだから。

「・・・安心したまえ。椀にも言ったが、私には生前叶えられない願いなど無かった。だから遠坂命、君の心配は杞憂だ」

「・・・命でいいわよ。アーチャー貴方は」

「お茶入りましたー、ってどうしんですか遠坂先輩」

お茶を淹れ終えた椀が軽快に居間に入ってくる。遠、いや命が真剣な顔をしていたので、自分が何か粗相をしたのかと思ったのだろう。

「いや何、椀を危険に晒したら許さないと釘を挿されていたのだよ」

命は直接は口に出していないが、まあ間違ってはいないだろう。

「ア、アーチャー？貴方、今何て言ったの？私はそんなこと言った覚えは無いのだけれど？」

命はぶるぶると震えながら否定の言葉を口にする。

ふむ、そういえば遠坂もどこか素直じゃないところがあったな。

この少女は本当に色々と遠坂にそっくりだ。

「おや、聞こえていないのに否定が出来るのかね？それは素晴らしい才能だ。すぐに超能力の施設に行くといい、盛大に歓迎されるだろうよ」

「んなわけあるかー！！」

「命、昨日もライダーに怒鳴り散らしていたようだが、カルシウムは足りているのかね？栄養をきちんと取らなければ成長しにくくなるぞ」

命の身体のある一点を見ながら言う。命は顔を赤らめて、咄嗟に胸を隠した。

「あんたは何処のエロオヤジだ！そりゃ椀に比べればあれだけど、私だって胸くらいあるんだから！」

「別に胸のことを言っただけは無かったのだが？まあ安心したまえ、貧乳派というのもこの世にごまんという」

命の言うとおり椀の胸は大きい方だ、桜より少し小さいくらいか。対する命は、やはり遠坂と同じく小さい。それをコンプレックスに思っているのだろう。

「うむ、僕もどちらかという小さい方が好みだのう・・・」

今まで霊体化していたライダーが現れ、そんなことを言う。・・・先ほどの威圧感は何処に行ってしまったのだろうか。

「そんなこと言うために出てきてんじゃないわよー！！！！」

「待てミコ、ぶるうあああー！！！！」

ライダーにコースクリューが完璧に決まった。昨日も思ったのだが、この少女は魔術師じゃなくて格闘家になればいいんじゃないか？

「よいではないか！義弟の張飛など13の娘を攫って妻にしたのだぞ！それに比べれば遥かにましではないか！」

「比べる対象が間違ってるのよー！！！！」

「ぶるうあああー！！！！」

おお、今度はシャイニング・ウィザードだ。気持ちいい程綺麗に決まるな。

「・・・アーチャー、止めなくていいの？」

「面白いからいいんじゃないか？」
「・・・うん、そうだね」

それから大体10分後、漸く落ち着いた命が息を切らして席に座る。・・・後ろにある血まみれの物体には触れない方がいいのだろうな。

命は椀が淹れたお茶をがぶ飲みして一度私を睨んだ後、椀に向き直り本題に入った。

「・・・椀、聖杯戦争で勝つつもりが無いのは分かった。なら私は貴女とは敵対しない。けど私の邪魔をするのは許さない、それを覚えておきなさい」

それは命令の言葉であり、忠告の言葉。自分が心配だからこそその言葉であり、椀が心配だからこそその言葉。

「はい、分かってます」

椀もそれにきちんと答える。

「なら、もう言うことは無いわ。絶対に死なないようにしなさい」
「はい、遠坂先輩も」

椀と命がお互いに微笑み合う。それはまるで仲のいい姉妹のようで、遠坂と桜を思い出させた。

「それにしても、この家に来て吃驚したわよ。此処って衛宮の家でしょ？」

命の言葉に反応しそうになってしまった。まさかここでその話題

がくるとは思わなかった。

「そうらしいですね。ひいおばあちゃんがよく言っていました。此処は衛宮先輩の家で私は此処をずっと守るんだって」

私のことを先輩と言う？ 藤ねえは一応私の先生だったわけだし、私は藤ねえの生徒だ。だとすれば栞は藤ねえの子孫じゃないのか？

「・・・一体どういうことだ？」

「えっと此処は昔、衛宮士郎っていう人が住んでたらしくて、私のひいおばあちゃん 藤村桜っていうんだけど 先輩で初恋の人だったらしいの。」

けどどこかの国の戦争の原因になったらしくて、処刑されてこの家も抑えられそうになったの、でもひいおばあちゃん達は先輩がそんなことする筈無い！ ってずっとこの家を守ってたみたい」

藤村、桜？ 私の後輩の桜は間桐桜だったよな？

・・・そうだ、思い出した。聖杯戦争が終わった後、間桐の家の間に気づいた私と遠坂は間桐蔵頭を殺して桜を救ったんだ。それで色々あって藤村の家に養子に入ったんだっけ。

あの桜のことだ、自分の苦しみを子ども達に味合わせたくないから魔術について伝授しなかったのだろう。それで魔術師の才能だけが栞に残った。

「そうそう、その衛宮士郎って人ね、魔術師だったらしいわよ」

「そうだったんですか！？」

「そう。衛宮士郎・・・錬鉄の英雄って言って、詳しくは知らないけど、どこからともなく剣を出せて、固有結界ってのも使えたらしいわ」

・・・やはりそれなりに伝承が残っていたようだ。知名度の恩恵があるから私の時のアーチャーよりパラメータ的にはましなのだろうが、真名を知られるというリスクが出来た。投影なども派手に使わないようにしておこう。

「固有、結界？」

「魔術の中でも最も魔法に近いつて言われている大禁呪のこと。まあ特に知る必要は無いわ、本人に会うわけでもないんだし」

・・・本人なら此処にいるがな。やはり命も遠坂の一族、その血に流れるうっかりの呪いは健在なのか。大したうっかりじゃないから遠坂よりはましなのかもしれないが。

「さてと、そろそろ私は行くわ」

世間話などを一時間程して、命が立ち上がった。これから街に繰り出して、サーヴァントやマスターを搜索するのもかもしれない。

「じゃあね、桜。・・・次に会うのは貴女のアーチャーを殺しに来る時かもね」

最後にそんな物騒な言葉を残し、まだ気を失っていたライダーをたたき起こして去って行った。

遠坂命か・・・本当に遠坂そっくりだったな、今思えば桜も桜に雰囲気似ている。

「さて、昼食はどちらが作る？」

意識を切り替えて桜に話しかける。昨日から私と桜のどちらかが作ることにしているので、私が勝手に作るわけにも行かない。

「んーとじゃあ、私に料理を教えてください？アーチャー」

「ふっ、良かるう。椀、私の織り成す料理に着いてこれるか？」

「えっと、ちよつと無理かも・・・」

若干椀が引いているような気がするが、気にしない。私も誰かに料理を教えるのは久しぶりなので、少しばかり気分が高揚しているのだろう。

「これから椀が挑むのは無限のレシピ、料理の極地。恐れずしてかかってこい！」

だからこんな言葉を言ったのも仕方ないことだったのだろう・・・

深夜の2時、俗に丑三つ時というこの時間帯にインターホンが鳴った。

叩き起こされた椀が少し機嫌を悪くしながら出てみると、そこにいたのは・・・

「こんばんは、椀」

「えっ、遠坂先輩！？」

朝方やって来て次に会う時は私を殺す時と言った遠坂命その人だった。

「何で遠坂先輩がまた・・・？」

「あら、そんなこと決まってるじゃない」

「つつ！？」

朝もこんなやり取りしたな、と思いながらも私は霊体化を解き桜の前に出る。朝と違って干将・莫耶を両手に握ってたが。

「あら、そんな物騒なもの仕舞ってくれない？私は争いに来たんじやないんだから」

「ほう、では何をしに来たのかね？」

命はばつが悪そうにして少し息を吸い込んだ後、決心してこう言っ
てのけた。

「桜、私と同盟しましょう？」

第四話 突然の来訪者（後書き）

前書きの詞はひぐらしのなく頃にのベルンカステルの詞をイメージしてみた。

まあ微妙なんだけどね。

第五話 深夜の会談（前書き）

今回ネタバレ要素を削ったんで、ちょっと短めです。

第五話 深夜の会談

「で、どうということだね？」

同盟をしたい、と言う命を取り敢えず屋敷に招き入れ、お茶漬けを出す。

これは京都では「さつさと帰れ！」ということを目指す、というのはそれなりに知れ渡っている。当たり前だろう、こんな夜中に来るわ、私たちは積極的に戦うつもりは無いと言ったのに同盟しようと言いわ、迷惑にもほどがあるというものだ。

しかし、皮肉が通じなかったのか命はお茶漬けを美味しそうに食べた。いや、美味しそうに食べてくれるのは作った側としては嬉しいが、そういう問題ではない。

「・・・食べていないでさつさと概要を言わないか」

「あら、貴方がこれを出したのでしょうか？なら私が食べるのは道理じゃない。それにタダの物を棄てるなんて私の主義に反するわ」

そう言いながらも、命は箸を休めない。遠坂の子孫だけあってやはりがめついようだ。いや、むしろ遠坂よりも確実にがめつい。遠坂家の家訓の『常に優雅たれ』というのは何処に行った。

命はあるうことがかわりまで要求してきたが、流石にそれは断る。少し不満そうだが、姿勢を正して本題に入った。

「・・・私はね、今朝、というか昨日の朝この家を出てからサーヴァントを探していたの。で、二組のサーヴァントに出会ったの」

「まあ大方予想通りと言ったところか。君はそのどちらかに敗れた・・・もしくは相当な脅威を感じた。自分たちだけでは分が悪い、だから私たちの力を借りたい、そうだろう？」

命はコクンと首を縦に振り、肯定の意を示す。

「私たちが後から出会ったサーヴァント、あれはバーサーカーの筈だけど次元が違った。あんなのに単身で勝てるとは思えない・・・」

バーサーカー・・・狂戦士のクラス。狂化することによって力を格段に引き上げる。本来なら大した力を持たない英霊が選ばれるクラスだが、かつて私の妹であり姉でもあったイリヤスフィールが使役したのはギリシャの大英雄ヘラクレス。おそらくはそのバーサーカーも、それに近い存在だったのだろう。

「マスターを狙ってみればいいのではないかね？」

「一応、私が魔術で攻撃したのよ。だけど無駄だった。あのマスターはバーサーカーの力を頼らずに、被ったフードすらめくらず私の魔術を防いだのよ」

命の魔力は遠坂の血を継ぐ者として相応しく多い。楯と較べても、甲乙つけがたいほどの魔力だ。そんな命の魔術を一人で防ぐのだ、相当腕のたつ魔術師なのだろう。

「よく無事だったな？同盟をしようと言うからにはライダーは消えていないのだろう？」

「・・・ええ。ライダーは今それなりの怪我をしてるけど、1日、2日で治る筈よ。何で私が無事かって？それはね・・・」

ライダーでも1日、2日治すのに時間がかかる怪我をしているのだ。命が無事なのはおかしい。どうやって危機を脱したのか、その答えを命が吐き出す。

「バーサーカーのマスターの女が『貴女程度なら生かしていても、関係ないわ。ほら、貴女に用は無いんだからさっさと消えて?』なんて言って、私を逃がしたからよ!」

命は今までの全てのストレスを発散するかのように怒鳴り散らした。この辺りに他に民家が無くて良かった。舟を漕いでいた椈が驚いて飛び跳ねるほどの怒声だ、近所迷惑甚だしかったろう。

「・・・つまり、何か?プライドが傷つけられたから私たちの力を借りてリベンジしたい、そういうことか?」

「まあ、掻い摘んで言うかね」

「断る。そんな私怨に手を貸す理由はない」

椈の意見を聞いていないが構わないだろう。こんなふざけた理由で危険に身を置くことは無い。バーサーカーがいかに強力なサーヴァントだろうと、命達と組む理由にはならない。

「ふーん、断るんだ?」

「無論だ。分かったならさっさと帰れ、明日からはまた学校なのだろう?」

今は深夜の2時半を過ぎたところ、これ以上長引けば明日は寝不足で大変なことになるのは想像にかたくない。遠坂にそっくりな命のことだ、きっと寝起きも酷いのだろう。

「私たちが最初に遭った方のマスター・・・それが椈の兄だった、って言ったらどうする?」

「・・・何?」

椈の兄ということは、その男も桜の血を継いでいるということ。

ならば魔術師の才能が有っても不思議ではない。だとすれば、その話も信憑性があることになる。

「嘘・・・何で兄さんが？」

椛も信じられないようだ。当然か、自身の実の兄がよく分からない殺し合いに参加しているなど信じられる筈がない。

「理由は知らない。でも貴女の兄さん、高島治郎が聖杯戦争に参加しているのは本当よ。女のサーヴァントを連れて私たちに挑んできたんだから」

椛の兄、たかしまじろう・・・何故か名付け親が分かる気がする。椛に辛く当たるのも名前が原因なんじゃないか？絶対小学校とかでからかわれただろう。

女のサーヴァントか、今分かるだけでセイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、そして私のアーチャーのクラスが確認されている。つまり残っているのはキャスターとアサシンになるわけだが・・・

「アサシンもキャスターも真正面から戦うようなクラスではないだろう？」

「私はキャスターを知っているし、キャスターではないわ。だからアサシンの筈なんだけど・・・違う気がするのよね」

「ということはイレギュラークラスか？」

「確証は無いけど、おそらくは」

イレギュラークラスとは7つのクラスのどれにも当てはまらない、文字通り未知のクラス。どんなクラス別能力を持っているかも分からない厄介なクラスだ。

「だけど、そこまで強くなかったから心配する必要はないわ。逃げ足は速かったけど」

命はそう言い切る。しかし、油断というのは戦場においては命取りであり、油断をしていれば死んでも文句は言えない。特に遠坂の家系の命だ、うっかり油断をするということが無い筈がない。

「あの、遠坂先輩？兄さんは大丈夫なんでしょうか？」

今まで顔面を蒼白にして話を聞いていた桜が問いかける。命の話によると兄のサーヴァントは弱いのだ、心配にならない筈はない。

「今のところはね。けど、この先ずっと無事であるって保証はないわ」

「そう、ですよね・・・」

聖杯戦争に参加する以上、命の保証など最初から在りはしない。桜もそれを臆気ながらも理解しているのだろっ、俯いてしまった。

「だからこそその同盟よー！」

そのタイミングを見計らったかのように、命は当初の話を再び持ち出す。

「待て、何故そこで同盟をすることになる」

「私たちが組めば、あんなのとき直ぐに倒せるわ。つまり、私たちで組んで桜の兄さんを脱落させて、聖杯戦争から遠ざけるのよ」

「君は『捕らぬ狸の皮算用』という言葉を知っているかね？」

「知ってるけど何か？」

「・・・もういい」

命の計画には色々と穴がある。本当に椀の兄を倒せるか、という
ものもあるし、例え倒せたとしてもその後の扱いに困る。

昨日の朝の命の話によると、監督役が姿を見せていないらしい。
つまり、私の時のように教会に逃げ込むということが出来ないのだ。

「・・・椀はどう考える？正直あまり上手い話ではないようだが」

私としては断固として拒否したい話だ。確実に目的を達せられる
という訳でもないのにバーサーカーに自分から敵対しようというの
だ。

椀は真剣に考えている。この選択によっては、兄の命を救えるか
もしれないし、自分の命が危険になるかもしれないのだ。

「・・・分かりました。同盟します」

幾ばくか時間をかけて、椀が出した結論はそれだった。予想通り
と言えば予想通りの選択だった。

人間は心に保険を懸けたがる。この選択でもし逆を選び、兄が死
んでしまえばこの選択を悔いるだろう。しかし、ここでこういう選
択をすれば、もし兄を救えなくても心に余裕が持てる。

「交渉成立ね。細かい話は後ですとして・・・うん、まずは部屋
の用意よね」

「えっ、遠坂先輩、家に泊まるんですか？」

「当たり前じゃない、同盟したんだから。バラバラに行動するなん
て本末転倒よ」

私の時も、こんな感じに遠坂が押しかけて来たっけ。本当にそっ

くりだよ、子孫じゃなくてクローンなんじゃないか？

まあ私の時とは違って柊は女だ、倫理的に大した問題はないだろう。そう考えれば、命はまだまともなのかもしれない。

「じゃあ一旦家に帰って色々用意して来るわ」

ある程度の話が纏まると、命はそう言って直ぐに家を出て行った。・・・別に今日のところは泊まるだけ泊まって、明日取りに行けばいいのではないか？今の時間を分かっているのか？明日は絶対に起きれないぞ。

「柊、君だけでも眠った方がいい。命の部屋は私が案内する」

「うっん、私はこの家の主なんだし、待ってない」と

柊は思ったより頑固な性格だったようだ。いくら私が眠れと言っても聞きやしない。柊も明日は寝不足決定だな。

それから一時間ほどして命がライダーをパシリにしてやってきたが、もう殆ど朝に近い。直ぐに寢床に向かって行った。

というかライダー、君は重傷を負ったのではなかったのか？命の予想より回復力が強かったとしても、病み上がりにまでパシリに使われるとは・・・不憫だ。

ちなみに、予想通り寝不足でふらついていた柊と命は学校を揃って休んだということを追記しておく。

第五話 深夜の会談（後書き）

命＞凛 がめつさ

命＜凛 優雅さ

命 凛 うっかり

第六話 治郎の過去（前書き）

あれ？前半超シリアスなのに最後・・・どうしてこうなった。

第六話 治郎の過去

椀の兄、高島治郎は藤村の家で寝泊まりをしている。妹の椀を追い出して得た家、自分が安心して寝られる家。

両親が離婚して父に付いていつてからは地獄だった。毎日のように振るわれる暴力、年齢を偽称してまでしてバイトで手に入れた金を奪われ、せつかく出来た友人も顔の怪我を見て離れていく。

でも我慢した。我慢していれば、いつか母が助けに来てくれる。温かい家庭に戻る。そう信じて1日、1日を懸命に生きてきた。

しかし、助けは来なかった。母は何故助けに来てくれない？その答えを探しに一度、藤村の家に一人で行ってみた。そこで見たのは久しぶりの妹の姿。綺麗な洋服を身に纏い、大きな笑顔を振りまいている。

それはどんなに素晴らしい光景だろう。一枚の絵画のような光景。けれど治郎の心に浮かんだのは深い憎しみだった。

何故アイツハ笑ッテイル？僕ハコンナニ苦シイノニ・・・

しかし治郎は首を横に何度も振った。あれは僕の妹だ、たった一人の可愛い妹。そんな妹を憎むなんて、僕はなんて嫌な奴なんだ。こんな気持ちでは母や妹の前に出られる筈がない。治郎はそう考えて、その日は父の待つ地獄に帰って行った。

家に帰ると父が『何処に行っていた』と聞いてきた。治郎は咄嗟

に『友達の家に行っていた』と言う。母に会いに行っていたなどとは知られば、何をされるか分からないからだ。

だがそれは間違った言い訳だった。治郎に友達なんていない、それを父は知っていた。そして振るわれる暴力。治郎は遂に白状してしまった。

父は烈火の如く怒る。その怒り方は尋常ではない。『何故会に行った!』『俺がそんなに嫌か!』そんな風にいつも以上の暴力が振るわれた。

段々顔が腫れ上がってくる。段々意識が朦朧としてくる。このままでは命も危ういだろう、そんな状態まで殴られ続けた。

ああ、僕は死ぬのかな?そんなことを考えていると、不意に拳が止んだ。閉じていた目を開ける。すると其処には父の死体が在った。頭が爆発したかのような死体、普通なら有り得ない死体。

思考が追いつかない。何故こんなことになっているのだろう。ぼーっとする治郎に一人の老人が話しかけた。

「君は治郎君だね?」

「・・・はい、けどあなたは誰ですか?」

「私かい?そうだね、私は魔法使いとでも言っておこうか」

その老人は心底可笑しそうに、そんなことを言った。治郎は何故かすんなりとそれを受け入れた。父の死に方がそうでもなければ説明がつかなかったからかもしれない。

「治郎君、私に着いてこないかね?」

老人は治郎に誘いかける。治郎にその言葉はとても魅力的に聞こえた。

「君には魔術師としての才能がある。選ばれた者のみが持つことが許される才能がね・・・」

その言葉は治郎にどれだけの救いを与えただろう。今まで耐えてきた、それが遂に報われた気がしたのだ。

「さあ、高島治郎。この手をとるかね？」

治郎はボロボロの体を引きずり、老人の手をとり、意識を手放した。

治郎が意識を取り戻したのはその2日後。最初にしたのは老人を探すこと。どうかあれが夢ではありませんように、と祈った。

老人は直ぐ見つかった。治郎が眠っていた間看病をしていてくれたのだろう、治郎の布団の横で微笑んでいた。

「起きたかい？それは良かった。何か温かいものでも出そう」

そう言つて老人は一度席を離し、次に帰つて来た時はお粥を持ってきた。

本来ならあまり美味くはないだろう不格好なそれは、治郎にとってこの上ないご馳走。涙を流しながら一心不乱にかき込む。

老人はニコニコとしながらそれを見て、お代わりはどうだい？と尋ねる。当然治郎は頷き、老人はまたお粥を作りに行く。

ああ、これほどまでに安心出来たのは何時以来だろう？少なくとも父に付いて来てからは、安心して眠ることも出来なかった。治郎

の涙は止まらない。枯れ尽くしてもまだ止まらない。

魔術師の修行を始めたのは、それから約1ヶ月後のこと。取り敢えず知識を入れて体力の回復を待ち、万全の状態で始めた。

最初は上手くいかなかった。才能があると言ってもそれは一般人から見れば。初歩である修復すらまともに出来ない。しかし、老人の支えもありメキメキと腕を上げていく。

治郎は次第に自分に誇りを持つようになった。今なら母や妹に胸を張って会いに行ける。そう思い、意気揚々と藤村家へ向かった。そこで見たのは友達と無邪気に遊ぶ妹の姿。そこで師である老人が思いもよらぬことを言った。

「ふむ、あの娘凄い才能の持ち主じゃのう」

治郎は急いで自分も確認する。そして分かった、分かってしまった。

治郎の妹、椛は治郎よりも遥かに多くの魔力を持っていた。今まで幾度か見て来た魔術師の中でも群を抜く量。

何故ダ？何故アイツハ僕ヨリ魔術ノ才能ガ有ル？僕ノ唯一ノ誇リスラ奪ツテ行ク？

治郎にはもう、椛を可愛い妹として見る事が出来なかった。ぬくぬくと暮らして、友達も沢山いて、それでいて僕より才能に溢れている・・・そんな奴を愛しく思える筈がない。

老人が肩に手を置く、治郎にはそれを振り払う気力すらない。もうその身に在るのは妹に対しての憎しみだけなのだから。

治郎は結局、その日も藤村家の門をくぐることは無かった。次に来る時は妹に復讐する時だ。そう誓い、老人と住んでいる家に帰った。

それから数年後、治郎は師の老人から聖杯戦争について聞かされた。自分の地元である、冬木で行われるという魔術師の争い。

治郎にそれに参加しない理由など無かった。この戦争で、上手くいけば妹に復讐出来る。

そうして再び冬木に降り立った治郎は、初めて藤村家の門をくぐった。母は久しぶりの我が子を見て抱きしめ、妹の栞は涙を滲ませながら駆け寄って来た。

その姿に決心が揺らぐことは無い。治郎は栞に今までの不満をぶちまけた。栞は泣きながら離れていく。母はごめんなさい、ごめんなさい、とりピートしている。

こんなもので復讐は終わらない、そのまま治郎は藤村家に居座った。治郎と栞が顔をあわせれば険悪な雰囲気場を包む。そうして栞は家から出て行った。

そして聖杯戦争の幕開け。治郎は師がセイバーを呼び出したのを見て、改めて師の実力を知る。

次は治郎の番。呪文を唱える。自分には何のサーヴァントが当たるだろう？できれば三騎士のアーチャーかランサーがいいな。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

……」

呪文を唱え終わり、確かな手応えを感じた。自分は成功したんだ！という満足感の中、サーヴァントが現れる。

「ふーん？あんたがあたしのマスターかい？」

それは女だった。肌は小麦色で、扇情的な服を着こなしている。短く切つてある緑の髪はボーイッシュで快活な性格を思わせた。

「ああそつだ。僕がお前のマスター、高島治郎だ」

治郎は胸を張つて応える。最初の掴みで舐められたら、この先拙いことになるからだ。

女も治郎の態度に好印象だったのだろう、ニンマリと笑っている。

「で、早速だがお前は何のサーヴァントなんだ？アーチャーか？ランサーか？それともライダーか？」

「あたしは弓も槍もそこそこは使えるけど、それ専門じゃないね。乗り物なんか乗るのも面倒くさいし」

「じゃあキヤスターかアサシンか？」

「あたしが暗殺者や魔術師に見えんのかい？あたしはね、戦乙女ヴァルキリーのクラスだよ」

それは聞いたことがないイレギュラーなクラスの名前。治郎は歓喜する、自分はやっぱり特別なんだ！と。

「まあ、とは言っても大したクラスじゃないけどね」

「・・・は？」

喜びが一瞬にして消える。今こいつは何て言った？

「マスターだったらサーヴァントのスキルぐらい見えるだろう？それであたしのスキルを見てみな」

治郎は言われるまでもなく確認していた。

【クラス】ヴァルキリー

【マスター】高島治郎

【真名】？

【性別】女性

【身長・体重】171cm 58kg

【属性】秩序・中庸

【筋力】D 【魔力】C

【耐久】D 【幸運】C

【敏捷】B 【宝具】A

【クラス別能力】

魅惑：D

敵対する相手が男の場合、一定の確率で攻撃の命中率を下げる。
ただし、本人にその気がないためランクが下がっている

【保有スキル】

心眼（真）：C

修行・鍛錬において培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す”戦術理論”。

「・・・何だこれ？かなり微妙じゃないか？」

「だから言つたろう。あたしだって、なりたくなつた訳じゃない」
「・・・マジか」
「大マジだ」

治郎にとって歓迎出来る能力値ではない。宝具がAなのはいいが、他は見劣りする。

先ほど見たセイバーのランクは殆どがA以上だった。実際に戦闘を見てみないと何とも言えないが、正直これで勝てるとは思えない。

「・・・まあしょうがない。これも運命だ。良しとしよう」

「・・・良くないな」

治郎は呟いた。それはそうだろう。現在ライダーとそのマスターの遠坂命と戦闘中なのだが、ヴァルキリーは完全に押されている。

治郎が遠坂命を覚えていたのは、子どもの頃の初恋の相手だったからだ。何でもそつなくこなす、完璧な少女に治郎は憧れた。

別に今は好いている訳ではないから、躊躇いはしても戦うことに不満は無かった。

が、今の状況は非常に拙い。どのくらい拙いかというと、授業中

トイレに行きたいが、あと10分で授業が終わる。けど我慢できそうにないし、やっぱり行くべきかと迷って最終的に後3分で我慢の限界が来た、というぐらい拙い。

『ヴァルキリー、ここは戦略的撤退だ』

『了解だ。けど隙を作らなきゃ逃げられないよ?』

治郎とヴァルキリーは念話で逃走の算段を練る。

『大丈夫だ。僕に任せろ』

治郎は自信を持って言い切る。その姿はとても頼もしく、ヴァルキリーはこの少年が自分のマスターで良かったと思えた。

「おいっ、命!」

「・・・何?」

治郎は命に話しかける。しかし、命は油断しない。臨戦態勢のまだ。

「お前のパンツずれ落ちてるぞ!!!」

その瞬間、命とヴァルキリーが盛大に転けた。治郎は命のうつかりを知っていたので、これで隙が出来ると思ったのだ。

しかし、そんなもので逃げられるほど戦場は甘くない。普通なら(・・・・)。

「何い!どこだ!パンツはどこだ!」

ライダーが戦闘態勢を解いて地面を探す。・・・本当にこいつは

英雄なのか？本物の関羽に謝れ。

「あ・ん・た・はあ、どこまで変態なのよ！！！！」
「ぶるうああああ！！」

そこに命のかかと落としが決まる。ライダー（HENTAI）は悶絶し、命は固め技に入った。

「・・・まあ、計算通り？」
「・・・偶然だろう。今の内にさっさと逃げるよ」

そして出来た隙に治郎とヴァルキリーは逃げて行く。命はそれに気づかない。やはりうっかりが発動しているのだろう。

逃走中、治郎が命を出来る限り敵に回さないようにしようと決めたのは言うまでもないことである。

第六話 治郎の過去（後書き）

マスターってサーヴァントのスキル見れましたよね？手元に原作ないから自信が無い・・・まあ、原作でもし見れなくてもこっちは見れるってことで。

幕間話 哀愁の騎乗兵（前書き）

今回の話は変なところ多いんで、ボツにしようかなと悩んだんですが・・・先の展開に係するし、まあいいかと思って投稿します。

幕間話 哀愁の騎乗兵

「・・・ライダー、君は何をしているのかね？」

命と椀はまだ就寝中だ。一度学校に行くかどうか聞いた時に起きたが、休むということ伝えると二度寝してしまった。

このぶんだと朝食は抜きだろう。余りよろしく無いが、今日ばかりは多目に見よう。

そう考え、昼食の準備をしようと厨房に行こうとしたまではいい。だが厨房に行く途中、ふと庭を見て私は凍りついた。

だって仕方がないだろう？ライダーが逆さ吊りになっていたのだから。髭が顔を隠していて、下手なホラー映画よりも怖い。

「・・・おお、アーチャーか。済まないが降ろしてはくれないか」

ライダーの声も心なしに小さい。一体いつからこの状態だったのだろう。

「で、何が有った？」

「うむ、ミコトが寝ると言うから僕も部屋について行っただが、いきなり裏拳を決められてな。

私の寝てる間はここでじっとしてろ！と逆さ吊りにされたのだ。お主が来てくれて助かったぞ」

・・・これは命の理不尽な懲罰なのか、それともライダーの日頃の行いが悪いのか。

取り敢えずライダーは霊体化すればすぐに抜けれた筈なのだが・・・次の罰のために言わないでおこう。

「・・・まあ、これからは少女の寝ている部屋に入らないようにするのだな」

「何を言うか、僕はまだ入ったことは無いぞ！いつも止められているからな！」

それは威張ることなのだろうか。この男は一体どこに向かって行っているのだろうか。

ライダーを救出した後、当初の予定通り昼食を作り厨房に向かう。昨日の夜は和食だったし今日は洋食にしようかなと献立を考えつつ冷蔵庫を開ける。するとそこには・・・

「なっ！何故食材が無い！？」

一昨日買い溜めしておいた食材が殆ど残っていない。私の記憶では、命が増えたとしても、あと一食分は普通に有った筈だ。

「これは・・・一体？」

食材が勝手に消えるわけは無い。つまり、これは何者かによる犯行。

ふつ、こんなことをされて私が許すとも思っているのかね？犯人は見つけ次第、私の領域テリトリーに入ったことを後悔させてやろう。

「んー、おはよーアーチャー」

私が見敵決殺の意志を固めていると椛が起きてきた。それに「お早う」とおざなりに返して、犯人について考察する。

少なくとも犯人はこの家に泊まっている者だ。私は犯人では無いのだから、必然的に椛、命、ライダーの内の誰かということになる。夜、お茶漬けを作った時には食材は冷蔵庫の中にまだ有った。つまり、犯行はそれから後、そして私の目が厨房に届かない時に行われたことになる。

私は命が再びやって来てすぐ屋根に登ったので、誰にもアリバイはない。

「どうしたの、アーチャー？」

「ん、いや冷蔵庫の中身がね・・・」

私が言葉を濁すと、椛が顔を蒼白にさせた。それはまるで死の宣告をされたかのようにだった。

「食材が・・・無い？なら私のご飯は・・・？」

「買い出しに行かねば作れまい、遅くなるのは間違いないな」

「誰が・・・一体誰がこんなことを・・・！」

・・・おかしいな、どこぞの腹ペコ王を思い出す。椛はこんなにも食い意地が張っていたのか。

まあこれで犯人は絞られた。椛でない以上、犯人は命とライダーしか有り得ない。

「ところで・・・何をコソコソとしているのかね、命」
「つつ！あら、何のことかしら？」

此方を覗き見していた命に話を振るが、白々しいにもほどがある。
同盟を結んですぐこれだと？色々と仕置きが必要なようだな。

「遠坂先輩？貴女が犯人なんですか？」

「椀、貴女ちよつと怖いわよ・・・？」

命よ、それについては私も同感だ。笑顔なのに怖い、椀はここま
で迫力が有っただろうか？

「もう一度聞きます、貴女が犯人なんですか？」

「椀、落ち着いて、ね？」

「質問に答えろ！遠坂命おおお！！！」

「ひっ・・・」

ヤバい、椀のキャラ崩壊が凄まじい。椀にもこういう一面がある
のか、食の恨みは本当に恐ろしい。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

命の土下座と共にごめんなさいのリピート。自業自得なわけだが、
涙を流しながらするそれは同情を禁じ得ない。

「ごめんなさいで済んだら死刑なんて要らないですよ？」

話が飛躍し過ぎだ。そこは普通警察だろう？どれだけ食事が遅れ
るのが嫌なんだ。別に買い出しに行けばいい話だろう？

まあこう考えはするが、口には出さない。だって怖いんだもの。

「私は朝食を抜いてしまって、今お腹がくーくー言ってるんです。どうしてくれましようか？」

「ひっく、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

いつまで続くんだ、この拷問は。せめて理由を聞いてからにすればいいだろうよ。

「椛、取り敢えず理由を聞いてやらないか？」

「そうですね、遠坂先輩のちゃんちゃらおかしい言い訳を先に聞きましょうか」

駄目だ、怖すぎる。今の椛だったらサーヴァントだろうと一瞬で消すことが出来る気がする。

「ひっく、あのね、寝る前に小腹が空いちゃったの。で、悪いとは思ったんだけど、少し冷蔵庫の中を漁ったの・・・」

「少し？全部食べるのが少しですか？」

「違うの、ひっく、私はTKG（卵かけご飯）しか食べなかったんだけど、ひっく、ライダーが自分も何か食べたいって・・・」

つまりライダーが予想以上に食べてしまい、冷蔵庫の中身は消えてしまったということか。助けたのは失敗だったかな、ずっと宙吊りにしておけば良かった。

「そうですね、ライダーさんですか。ありがとうございます遠坂先輩、これで悪を滅せます」

そう言っただけはふらふらと去って行った。・・・私も制裁を加え

ようと思っていたがもういいか。取り敢えずライダー、君の明日は無いだろうな。

「命、泣き止むがいい。君は確かに無断で食材を奪ったかもしれない。しかし、反省をしたならば次に生かせばいいだけの話だ」

命は泣きはらした目で私を見上げてくる。もはや言うことは無いだろう。

「では、私は買い出しに行くでしょうか。君たちはこの家で待っているといい、すぐに帰る」

そう言っ て私は私服を投影し、屋敷を出る。

私が居なくなった途端、命が口元を歪ませたことなどつゆとも考えずに・・・

僕はライダー、真名は関羽雲長。今日は僕の不幸話を聞いて欲しいと思う。

バーサーカーと戦い、それなりの怪我を負った僕は遠坂の屋敷で

治療をしていた。

あのバーサーカーは相当な英雄だと見受けられた。怪我は負ったが、あれほどの猛者と戦えたのだから満足である。

治療に専念していると、アーチャーのところに同盟しに行っていたミコトが帰って来た。見たところ機嫌はいいようだから、同盟は成功したのだろう。

「ライダー、荷物持ちしなさい。あつちに泊まるから」

「むう、僕は今治療に専念した方が・・・」

「うるさい、ごたごた言うな。さっさと持ちなさい」

有無を言わせない笑顔、もう僕に拒否権は無いだろう。しょうがない、まだ回復していないが荷物持ちとやらになってやろう。

藤村椋の屋敷に到着し、ミコトの荷物を運び込むと、アーチャーが憐れみの視線を向けてくる。

そうか、分かってくれるか。何処の英雄か知らぬが僕の中で好感度が急上昇だ。

その後、ミコトが部屋に眠りに行くのについて行くと、いきなり裏拳を決められた。そして庭に引きずられ、逆さ吊りに吊された。僕が何をしたと言うのだろうか？

吊されてから何時間経ったのだろう、頭はかなり血が上っている。

サーヴァントと言えど、辛いものは辛い。

あまりに辛くて色々と現実逃避をしていると、アーチャーが話しかけて来た。

「……ライダー、君は何をしているのかね？」

「……おお、アーチャーか。済まないが降ろしてはくれないか」

アーチャーはすぐさま儂を降ろしてくれた。本当にアーチャーはいい者だ、好感度が更に上昇だな。

それから少し今までの経緯を話すと、アーチャーは微妙な顔をした。きつと私に同情してくれているのだろうな。

アーチャーが昼食を作りに行き、儂は何もすることが無かったので赤兎馬を呼び出し、手入れをしていた。すると、ふらふらとアーチャーのマスターのモミジがやって来た。

「うん？どうした、モミジ」

儂はモミジとあまり関わりが無い筈なのだが、儂に向かってニコニコとしている。

「……はっ、まさか儂に気があるのか！？しかし、これは断らなければいけない。儂らは同盟しているとは言え、敵同士なのだ。それに儂はもう少し胸が小ぶりな方が好きだ。」

「ライダーさん、自分が何したか分かっていますか？」

「……すまない、儂とてそんな気は無かったのだ。そなたの気持ちには応えられない」

いや、儂としてもこのような少女に悲しみを与えるのに抵抗感はい

あるが、それでも駄目なものは駄目だ。ふつ、今日の儂も紳士的だ。

「・・・おっしゃっている意味が解りかねますが、反省はしていないようですね」

「うん、反省？何のことだ？」

ミコトに従い数多の敵と戦い、与えられた任務をこなすサーヴァントの鏡のような儂に反省するようなことが有っただろうか。

「そうですね、あくまで反省する気は無いようですね。じゃあ、もう許しません」

「は？・・・ひっ！」

モミジの纏っているオーラが異様にどす黒い。儂はこんなにも怒らせるような事をしただろうか？いや、していない。

「ま、待て！何故そんなに怒っている！？儂には皆目見当がつかないのだが！？」

「はっ、屑もここまでいくと清々しいですね。貴方のせいで冷蔵庫の中身が無くなって、私の昼食が遅くなるんです。どうしてくれるんですか？」

モミジはこのような性格だっただろうか？昼食が遅れるくらいで何をそんなに・・・

というか、儂には全く身に覚えが無いのだが・・・

「モミジ、それは」

どういうことだ、と聞こうとしてモミジの背後にミコトがいるのが見えた。そしてその目が『余計なことぬかしたらぶっ血KILL』

と言っている。

どうすればいいのだ。何も言わねばモミジに謂われのない罪で詰られ、余計なことを言えばミコトに殴られぶるうああああ！ルート確定だ。

正に前門のモミジ、後門のミコト状態。生前数多の修羅場を越えてきたが、これは越えられそうにない・・・

「ふっ、これも天命か・・・良からう！好きにするがいいわ！！」

それから先のことは話したくない。赤兎馬は怯えてどこかに走り去るわ、モミジは延々と心をえぐってくるわ、ミコトは儂の弁明が気に食わなかったのか飛び膝蹴りをしてくるわ、最後の砦のアーチヤーも冷たい目で見てくるわ、もう散々だ。

今回儂は本当に何か悪いことをしただろうか？何故儂がこんな目にあわなければならない？

この独白を誰かが聞いているのなら、その時儂は壊れているでしょう。意識があるか、ないかの違いはあるでしょうが。

これを聞いたどなたか。どうか真相を暴いてください。それだけが儂の望みです。

関羽雲長

幕間話 哀愁の騎乗兵（後書き）

どうでしたか？なんか物凄く馬鹿馬鹿しい話になったんで自分の
にはあれなんですが・・・取り敢えず今回は、椋の腹ぺコ属性と黒
属性が出したかったです。

第七話 兄妹の邂逅（前書き）

昨日微妙な投稿してしまったんで、早めに投稿します。

第七話 兄妹の邂逅

買い出しに行き、食材を手に入れた私はすぐに調理に取りかかった。迅速に調理を済ませると、出来上がった料理を椀は一心不乱にかき込み、普段のようなオーラに戻った。

いつもならおかわりは三杯の筈なのだが、今日は六杯「おかわり！」失礼、七杯だ。このペースはあの虎を思い出す。血を継いでいなくとも影響を受けたのだろうか。

椀が藤村別宅のエンゲル係数を上昇させている横で、ライダーが何やらぶつぶつ言っている。相当椀に絞られたのだらう、自業自得の筈なのに憐れみの感情を消しきれない。さつき私も冷たい目で見teやったのだが、あの時のライダーは最後の希望に裏切られたようだった。

「・れ・けが・・望・で・」

ヤバイ、椀のキャラ崩壊も相当だったが、ライダーも負けていない。ライダーは馬鹿をやっていた方が輝くのだ。

なんとかライダーを現実の世界に戻した後、命がぱん、と手を叩き、皆の注目を集めた。

「昼食も終わったことだし、バーサーカーとあの女、ついでに治郎を捜しに行くわよ！」

君、さっきの落ち込み具合は何処へ行った？それと治郎はついでののか、私たちの同盟理由はそっちなのだが。まあ言っても無駄なのだろうな。

「・・・でも、先輩。今の時間って普通なら学校に居る時間ですよ？」

「ノープロブレム！学校なんかには私たちを縛らせないわ！」

遠坂も大胆不敵だったが、命はどちらかと言うと唯我独尊という感じだな。遠坂家の家訓『常に優雅たれ』はまさか本当に無くなってしまうのだろうか。

「それじゃ、行くわよ！」

どの道私たちに選択権なんてないんだろう。ふっ、私は生前も死後も遠坂には逆らえないのさ・・・

あれから3時間ほど街を探索したが、どのサーヴァントにも遭遇しなかった。当然だろう、今は夕方で先ほどまでは真っ昼間だったのだ。一昨日はランサーと戦っていたようだが、あれは例外であつて、聖杯戦争は普通夜中に行われるものなのだ。

「・・・遠坂先輩、そろそろお腹が減ってきたんですけど」

「さっきライダーが買ってきた肉まんがあるわ。これ食べてシャキツとしなさい」

今朝の件で、命も桜を空腹にさせるのは拙いと悟ったのだろう。

随分と用意がいい。またライダーをパシリにしたようだ。・・・ライダーはあの姿のまままでコンビニに入ったのだろうか、きっとコンビニはパニックになったに違いない。

「ハムハム、先輩、ギュコリ、これだけじゃ足りません」

「しばし待ちなさい。今ライダーに追加を買いに行かせたわ」

哀れなりライダー、桜が5個の肉まんをすぐに食べ尽くしてしまい、またしてもパシリにされたようだ。サーヴァントは従者という意味だが、パシリにされるのは如何なものか。

それから1分でライダーは赤兎馬に跨り、コンビニで一番大きいであろう袋に肉まんを大量に詰めて帰ってきた。赤兎馬に跨っているのは、きつと命に早く買ってきて来いと言われたのだろう。

「・・・ライダー、君はそれでいいのか・・・？」

「ふっ、この身に拒否権など有るわけがあるまい」

ライダーは目を液体で光らせながら、清々しく答える。もしも私が遠坂に召喚されていれば、こうなっていたかもしれないと思うと切なくなる。

それから更に数時間。とつくに日は沈み、あと少しすれば日付も変わろうかという時間帯。私たちが捜していた人物が現れた。

「兄さんっ!!」

「椛か。よく残ってたな、褒めてやるよ」

高島治郎。椛の兄にして、謎の女サーヴァントのマスター。私たちの目的。

「治郎、悪いけどさっさと倒させて貰うわ。私は貴方に大して用はないもの」

命は心底がっかりしているように見える。本来ならバーサーカーと先に遭遇したかったのだろう、不満がありありと伝わってくる。

高島治郎は凄く嫌そうな顔をしている。おそらくは彼も、命の性格やら何やらを知っているのだろう。まあ、知っていたらあまり戦いたくはないよな。

「命と手を組んだのか。まあ椛一人で勝ち残れるとは思えないもんな」

「兄さん、何でこんな殺し合いなんかに参加してるの？私はこんなはやだよ・・・」

「ふんっ、そんなもの決まっている。お前に復讐するためだよ」

「・・・復讐？私がぬくぬくと暮らしていたから・・・？」

「ああ、そうさ。だけどそれだけじゃ無い。お前は僕の誇りすら奪

つていった！ たった一つの誇りすら・・・！ 分かってるよ、これがただの八つ当たりだって。 だけど僕はお前を許せない！」

高島治郎は椛に自分の腹の内をぶちまける。そしてそれを聞いた椛は、兄の言葉の意味が分からないながらも、肌でその憎しみの度合いを感じたのだろう、今にも泣きそうな顔をしている。

八つ当たりか・・・。私の目的も殆どただの八つ当たりだ、しかしそれを糧にして守護者を続けてきたのも事実。故に彼の気持ちも分かる。それを目的としなければ自分が許容できない、そんな気持ち・・・。

しかし、

「悪いが、その復讐が達せられることは無いだろう。君の言い分も少しは理解できるがね、私のマスターを傷つける者に容赦はしない」
「椛のサーヴァントか、見たところアーチャーかな？ いいよな、才能があるやつは。三騎士を呼び出すのだって簡単だ」

口を開けばすぐに椛への悪態に変わる。それだけ憎しみが強いということか・・・。

「いいよ、出てこいヴァルキリー！」

「あいよ。 ったくライダーだけでも逃げしかなかったのに、アーチャーも加わるとか・・・。ジロウ、あんたって自殺志願者かい？」

高島治郎にヴァルキリーと呼ばれたサーヴァントが現れる。やはりイレギュラーサーヴァントか、しかし霊格はそこまで高く感じない。命の言つとおり、油断しなければ勝てる相手。つまり油断は禁物。

「でも、いいよ。 やってやるよ。 あたしだってサーヴァントの端く

れ、ここで逃げたら女が廃るってもんさ」

ヴァルキリーは戦闘態勢に入る。持っている武器はナイフ、しかし宝具というわけではないようだ。

私も干将莫耶を投影する。勿論、真名がバレないように服から取り出したように見せて、だが。

「ふっ！」

初撃はヴァルキリーから。素早い動きだが、鷹の目を持っている私からすれば容易に捌ける。向こうも大して結果を期待していないのだろう、私に肉迫する程の距離でナイフを何度も振るう。そして私はそれを全て弾いていく。

ナイフが最も力を発揮するのは超至近距離。斬りつけるアクション、返すアクション、それらをほぼノータイムで行える。遠ければリーチが足りない代わりに、超至近距離においてはナイフが最高の武器と言ってもいいだろう。だが・・・

確かにヴァルキリーの動きは素早く、ナイフを振るう速度は人間には届き得ないだろう速度だ。しかし、私が今まで戦ってきたナイフ使いにはもつと素早いものもいた。それに比べればこの程度、苦境とすら言えない！

「そらっ、足下がお留守だぞ」

「なっ、くっ！」

ヴァルキリーに出来た隙を突き、足を掬う。ヴァルキリーは態勢を崩しかけるが、アクロバティックな動きで後ろに跳んでいく。

だがそれも計算の内、ヴァルキリーが着地する場所には・・・

「儂を忘れてもらっては困るぞ！」

「くそっ、ライダーか!？」

そう、ライダーだ。いくら格下だろうとも、私たちは組んでいるのだ。確実に倒すためにも共闘するのは当然だ。

ライダーの青龍円月刀がヴァルキリーに襲いかかる。ヴァルキリーは未だ空中、避けれる筈がない。高島治郎に令呪を使う気配はない。使うのを迷っているのか、使う必要がないと思っているのか。どうあれ、ヴァルキリーに令呪なくてはあれを避けられない。ならばヴァルキリーが倒れ、脱落するのは自明の理。

「ぬっ?ちいつ!」

だが、それを阻む者が現れた。

「悪いが、こやつをまだ消させる訳にはいかんのでな」

3日前、椈を襲ったセイバーである。剣をヴァルキリーとライダーの間に投げつけ、ライダーを阻んだ。

「・・・セイバーか。高島治郎と何故組んでいる？」

「ふむ、我とてマスターと我が居れば、勝利することなど容易いと思っておる。だが、この小僧はマスターの弟子、守るのは当然だろう?。」

弟子、か。セイバーのマスターが高島治郎の師、ということとは、椈を襲ったのもそれが理由か、それとも何か他に別の目的があるのか・・・

「悪い、助かった」

「ふん、構わんさ。それより疾くと構えよ、ここで雑兵を消してお
く」

セイバーとヴァルキリーが揃って此方を向く。これは拙い、ヴァ
ルキリーだけならともかくセイバーがいるとなると勝率が大幅に下
がる。

セイバーは私ではなく、ライダーに向かって突進した。そしてヴ
アルキリーは私を牽制している。セイバーがライダーを倒せば私が
孤立する。私に一对一で勝てないと思っているのならば、この作戦
は当然だろう。

そしてセイバーとライダーが切り結ぶ。どちらも強力なサーヴ
アント、ぶつかり合うだけで周りが破壊されていく。この勝負は簡単
には終わらない、終わる筈がない。

しかし、またもや乱入者により私の考えは否定される。

「

――！！」

命の目的であったバーサーカーのサーヴァントである。その場に
居た誰もが驚愕し、そちらに向く。そしてその霊格の高さに更に驚
愕する。

だが、私が驚愕したのは霊格の高さなどでは無い。視界に入った
バーサーカーは、私がよく知っている者だった。何故、コイツがこ
こに居る？

「バーサーカーのサーヴァント、ヘラクレス・・・！」

かつて私も参加した第五次聖杯戦争において、私の姉であり妹で

あつたイリヤスフィールのサーヴァントだったギリシャの大英雄、ヘラクレス。

「嘘でしょ！？、ヘラクレス！？何でそんなのがバーサーカーのクラスに・・・」

命が信じられない、という声を出す。私だつてそうだ。いや、かつてその脅威を知っている分、私の方が信じたくない。

「ヘラ・・・クレス」

ヴァルキリーが愕然と呟いた。その口調はどちらかと言うと、会う筈が無い知り合いに会ってしまったかのようなだった。もしかしたらヴァルキリーはギリシャ神話でヘラクレスと関わりが有ったのかもしれない。

そして、そのマスターが姿を現す。フードを被っているので顔は分からない、だが脳が懐かしさを訴えかける。そう、私は知っているのだ。バーサーカーのマスターの正体を・・・

「やっと、見つけた・・・！」

その声を聞いて、予感が確信へと変わる。有り得なかった、今の場に居るはずがない。

「会いたかったよ・・・」

バーサーカーのマスターは私の下へとやってきて、そのまま抱きつく。その拍子にフードが外れ、長い銀髪があらわになる。そして私を見上げる顔は正にそれ、最後に見た時と変わらない顔。

「・・・シロウ」

バーサーカーのマスター、イリヤスフィールは私にすら届くかどうか分からないような声で、そう言った・・・

第七話 兄妹の邂逅（後書き）

これであと出てないサーヴァントはキャスターだけ。まあ出てくるには後・・・10話はあるかな・・・？自分的にはアーチャーの次に出したいんだけどなー

第八話 激突の英雄達（前書き）

あー夏休みが終わった・・・作者は17、高三、受験生。ストツクが切れたら更新スピードが大分落ちるかも。

えっ？受験生の癖に何やってんだって？・・・気にしちゃ負けだよ！

第八話 激突の英雄達

目を閉じる。するとそこにあるのは、何も無い闇の世界。

目を開ける。するとそこにあるのは、私の姉であつたイリヤスフ
イルが涙を浮かべて喜んでいる姿。

目を閉じる。するとそこにあるのは、何も無い闇の世界。

目を開ける。するとそこにあるのは、反応が無いことに怒ってい
る私の妹であつたイリヤスフイルの姿。

目を閉じる。するとそこにあるのは、何も無い闇の世界。

目を開ける。するとそこにあるのは、返事が無いことに哀しんで
いる大切な家族であつたイリヤスフイルの姿。

目を閉じる。するとそこにあるのは、何も無い闇の世界。

目を開ける。するとそこにあるのは、私が僅かに反応したことに
安堵する生きている筈の無いイリヤスフイルの姿。

「・・・何故、君がここにいる・・・？」

私は生前、イリヤスフイルが死ぬ時に立ち会つた。だからこの
時代にいるはずが無い。否、いていいはずが無い。

「私にも、よく分からないの・・・。ただ、つつ!」

イリヤスフィールの話の途中で横槍が入る、犯人はセイバー。セイバーはライダーを無視してイリヤスフィールを狙ってきたのだ。まあ、隙だらけだったし、あのバーサーカーと戦うよりはマスターのイリヤスフィールを叩くというのは定石か。セイバーを相手にするのは骨だが、こうなつた以上仕方有るまい。

私はイリヤスフィールを抱え、セイバーの剣戟の嵐を辛うじてかわす。だが、イリヤスフィールを抱えてではまるで詰め将棋のように追い詰められていく。もっとも、イリヤスフィールが居なくても剣でセイバーに勝てる筈も無いが。

「セイバー、君はつくづく少女を襲うのが好きだな？」

「御託はいらん。我にとつて重要なのは、誇りなどではない。目的のためなら、どんな卑怯なこともするさ」

セイバーには挑発が全く効かない。セイバーに選ばれる英霊と言えかなりの英雄の筈だが、誇りではなく目的を重視すると言う。その真名はどのような英雄だと言うのだろうか。

「――！！！」

主の危機にバーサーカーが反応する。その巨体に似合わぬ速さでセイバーに迫り、斧剣を振り下ろした。しかし、セイバーとて最優のサーヴァント。ワンステップでその範囲内から抜け出した。

「ちつ、やはり厄介だな。アベルめ、このような猛者が居るなど聞いておらぬぞ」

セイバーはおそらく自分のマスターであろう、アベルとやらの悪態を吐く。セイバーは避ける事は出来てはいたが、やはり相当な脅

威を感じたようだ。

そしてセイバーは否応なしにバーサーカーとの戦闘に入る。バーサーカーを無視してイリヤスフィールを狙うというのは流石に無謀と言ふことか。

セイバーがバーサーカーと戦闘している間に、セイバーが離れたことによりフリーになっていたライダーが守っている桜と命の所へイリヤスフィールを運ぶ。

ヴァルキリーも此方の隙を窺ってくるようだが、ライダーが戦闘において隙など見せる筈が無い。・・・多分。

「ちょっと！アーチャー、あなたその女と知り合いなの！？どういうことよ！」

命が私に詰め寄ってくる。当然か、過去の英雄であるサーヴァントが今生きているイリヤスフィールと知り合い、それどころか涙を流しながら抱きついてくる関係など普通なら有り得ない。

「・・・私にも現状を掴み切れていなくてね。彼女、イリヤスフィールは私が生きていた時代で確かに死んだ筈なのだが・・・」

私だって混乱している。命たちに説明出来るほど現状を把握していない。

「イリヤスフィール・・・？どこかで聞いたことがあるような・・・」

命が首を捻って考え込む。遠坂の家系の者なのだ、聖杯戦争についでに書物を読んだのかもしれないし、もしかしたら遠坂自身から聞いたということもあるかもしれない。

「ねえ、シロ、・・・アーチャー。その女、昨日戦った時もあったんだけど・・・」

「ああ、おそらくは君の想像通りだ。彼女は遠坂命と言う」

「・・・ふーん、よくここまでそっくりに産まれるものね」

イリヤスフィールは真名が露見することを考慮してクラス名で私を呼んだ。そのことは有り難いが、同時にどこか寂しくもあった。

「ちょっと、どういう意味？」

「別に何でもないわ。私とアーチャーにだけ分かる秘密の話よ、貴女は入ってこないで」

遠坂のことを言えば私の真名が知れるから誤魔化すのはいいが、その言い方は無いだろう。命はイリヤスフィールの発言で既にお怒りモード突入だ。二人の間で火花が飛び散っている。今の状況を分かっているのか？そんなことをしている場合では無いだろうよ。

私たちがそんなことをしている間にも、セイバーとバーサーカーの死闘は続いている。バーサーカーの猛攻をセイバーは凌いでいき、隙さえあれば逆に切りかかっていく。

しかし、セイバーの剣戟は殆ど効いていない。バーサーカーにはBランク以下の攻撃が効くことはない。今セイバーが使用している剣は解析したところによると、名剣ではあるが宝具ではない。セイバーが剣ではない宝具を持つか別の剣を持っているかは分からないが、宝具でない剣にバーサーカーの防御は崩せない。

「――！！！」

「くそつ、何故にこのような男が狂戦士などに成り下がっている！」

バーサーカーのデタラメさに、セイバーにも焦りの色が見える。
しかもセイバーは知らないだろうが、あの防御を崩せたところでヘラクレスであるバーサーカーには宝具十二の試練がある。

十二の試練^{ゴッド・ハンド} ヘラクレスが神々の十二の試練を越えたことにより出来た十二の命のストック。つまりは、バーサーカーは十二回殺さなければ死なない。更に言えば、一度受けた攻撃は二度と効かないと言うチートぶり。

あのバーサーカーを単体で倒せる者は殆どいないだろう。あのセイバーもその枠に洩れず、バーサーカーに敗れはしなくとも勝つことは無い筈だ。

しかし、今こそセイバーを倒す絶好のチャンス。私がこのような好機を逃す筈が無い。弓と赤原獵犬を投影し、弓を引き絞る。

フルンディング
「往け、赤原獵犬」

フルンディング
轟音と共に赤原獵犬が放たれる。それをセイバーが気づかない筈も無い。バーサーカーの攻撃をかくぐりながらも、赤原獵犬を避ける。

フルンディング
「アーチャーか、このような^{もの}矢如きで我を倒せる筈があるま、つつ
！」

フルンディング
セイバーが言葉の途中で大きく仰け反った。赤原獵犬の特性はその追尾性にある。初見で二撃目を避けることが出来たのは、流星はセイバーと言うべきだろう。

フルンディング
セイバーはその追尾性に気づき、三度迫り来る赤原獵犬を叩き落とした。

「これで、・・・何っ！」

だが、フルンディング赤原獵犬はそんなことでは止まらない。フルンディング赤原獵犬は私の意志が有る限り、かわそつが叩き落とそつが追尾する。

「ふんっ、ならば術者の意識を刈り取るまでよ！」
アーチャー

セイバーは少しの時間でその特性に気づき、私に狙いをつける。

「――！！」
「くっ、ままならぬものよなっ！」

しかし、バーサーカーの猛攻により下手に動けない。隙を見せれば斧剣の餌食となるからだ。バーサーカーとフルンディング赤原獵犬、これらを永遠と避けられる筈も無い。セイバーは次第に避けきれなくなっていく。鎧に罅が入り、髪も数本切れている。

「うぐっ、くうっ」

もはやセイバーに余裕などかけらも無い。その身に致命傷を与えないよう、無様に逃げ続けるだけ。このまま押し切れば、セイバーは詰む。

「ふっふっふ、ふっはっはっは！」

しかし、そんな予測など簡単に覆すのが英雄であり、サーヴァント。セイバーは心底おかしそつに笑い声を上げた。

「認めよう！貴公らは強者であると！だが、これをどうする！」

その言葉と同時にセイバーは剣を投擲した。その剣が向かう先に

いるのは、椀たち。

「くっ、ぬおう！」

その剣はライダーによって阻まれる。しかし、そんなことはセイバーだって承知済み。本当の狙いはライダーが剣を防いだことにより、フリーになったヴァルキリーの攻撃

！

「くそっ、間に合え！」

私は邪魔になる赤原獵犬フルンディングの投影を破棄し、急いで椀たちの下へ向かう。これもセイバーの計算の内なのだろう。だが、赤原獵犬フルンディングを投影したままで間に合う筈もない。

「悪いけど、一手僕たちの方が多い」

そんな時、無情に宣告される高島治郎の言葉。

「僕を忘れてもらっちゃ困る。それでも何年も特訓してきたんだよ」

そして放たれる、高島治郎の魔術。それは遠坂のように強力な魔術な訳ではない。しかし、ただの人間であるマスターたちを倒すのに十分な魔術

！

「ふっ！」

私はそれを防ぐのに何とか間に合った。しかし

「やるじゃないか、ジロウ。それでこそあたしのマスターだよ！」

ヴァルキリーがイリヤスフィールを捕らえることを阻止出来なかった。彼らの完全な連携、私たちの完全な油断。

私はイリヤスフィールを守れなかった。私たちの完全な敗北

「ちよつと、貴方こそ私を忘れていない？」

そう言つて不敵に笑うのは、何を隠そう遠坂命その人。彼女が持つ宝石が眩い光を放ち、彼女の号令と共に魔術が放たれる！

「A c h t（八番）・・・！」

その魔術は雷。人がかつて神の化身だと畏れた、天からの裁き。当然、ただの自然現象だが、それでも遥かなる力を秘めている。

彼女の曾祖母である遠坂凜は五大元素使い（アベレージ・ワン）、多くの種類の魔術を会得する超一流の魔術師だった。しかし遠坂命は電撃使い（エレクトリック・ワン）、電撃を使うことに集中した、彼女もまた超一流の魔術師！

「ちよつ、くそ」

ヴァルキリーにとってこれは想定外、反撃が有るとは思つてもまさかサーヴァントに通じる魔術が来るなど夢にも思わない。というより一緒にイリヤスフィールが居るのに、それを無視してそのまま魔術を放つなど普通なら有り得ないだろう。

「別に私、あの女にかける情なんてないもの」

なんという鬼畜ぶり。いや、助かったけども。

「ぐあっーっ！！」

ヴァルキリーに命の魔術が炸裂する。その威力たるや、サーヴァントであるヴァルキリーを悶絶させる程。ヴァルキリーはその場に倒れ、自由になったイリヤスフィールを私が回収する。

「おい、大丈夫か？イリヤスフィール」
「うーん」

どうやら気絶しているだけのようだ。ヴァルキリーに魔術が集中したことによって、イリヤスフィールに掛かる負担が減ったのだろうか。

「ふん、今日のところは我らの負けか」

いつの間にかセイバーがヴァルキリーと高島治郎を双肩に抱え、離れた所に居る。

「だが、我らとてこのままでは居らぬ。次は宝具も開帳し、全力で貴公らを潰しにかかるう」

セイバーはそう言い残し、夜の街を去って行った・・・

第八話 激突の英雄達（後書き）

今回改めて確認したこと、作者は戦闘描写が下手くそだということ。いや、他が上手いってわけでもないんだけど・・・

第九話 誘いの手紙（前書き）

今回クロスオーバー要素あります。まあ元ネタ知らなくても大丈夫だとは思いますが、またなんか阿呆なことやってんなぐらいの気持ちで見てやって下さい。

第九話 誘いの手紙

「知らない天井……って訳じゃないわね」

昨晚、命の魔術により気絶したイリヤスフィール・フォン・アインツベルンはそんなことを言いながら起き出した。彼女が寝ていたのは、かつて寝泊まりしていたことがある衛宮邸、今の藤村家別宅の一室。

イリヤスフィールはまだはつきりとしなない意識の中、自分が寝かせられていた布団の枕元に一枚の手紙が置かれているのを見つけた。自分の枕元に置いてあるのだから自分宛ての手紙に間違いはない。イリヤスフィールは無造作に手紙を読み出した。

「えーっと、何々？」

それは彼女がずっと探していて、昨日漸く見つけた兄であり、弟であるアーチャー、衛宮士郎からの手紙だった。

イリヤスフィール、起きたか？君は昨日命の魔術によって気絶してしまったのだが、覚えているか？まあ、それはどうでも良い。本題に入るぞ。

私は君が起きるまで近くに居ようと思っていたのだが、私のマスターである栞にも命にも学校がある。昨日も休んでしまったことだし、今日休む訳にもゆくまい。栞だけを学校に行かせる訳にもいかなかったし、ライダーが残ると言ったのだが不安だったので断り、起き抜けの君を一人にさせてしまった。それを先ず謝らせて欲しい。

君が何故生きて、この時代に居るかは分からない。しかし二度と

逢える筈がなかったのだ、喜びこそすれ他の感情を感じるのは野暮
と言うものだ。私がそう思っていることは理解してくれ。

私たちは椋の学校が終わり次第、出来る限り早く帰るつもりだ。
その後で、イリヤスフィールが話せるのならば話を聞かせて欲しい。

PS・朝食と昼食を作っておいたので食べておいでくれ
アーチャー

「・・・シロウ」

イリヤスフィールは目を閉じ、手紙を抱き締める。彼女が何を考
えているかは他人には分からない。いや、もしかしたら彼女自身も
自分が何を思っているかを分かっていないのかもしれないかった。

「ねえ、アーチャー。貴方はあの子とどういう関係だったの？」

学校に行く途中の道で椋が私に聞いてきた。椋は念話の感覚が分
からないらしいので、直接声を出している。

『私とイリヤスフィールか？・・・一言で言うなれば兄妹だな』

私は霊体化して彼女に付いて行っている。当然ながら学校に行く途中には他の一般生徒もいるので、椀の声は小さい。

「・・・本当の兄妹じゃないってこと？」

『察しがいいな。そうだ、私の養父がイリヤスフィールの父だったのだ』

「・・・本当の兄妹じゃなくても、仲は良かったんだね」

椀が寂しげに呟いた。私とイリヤスフィールを見て、実の兄妹である自分と高島治郎の関係を嘆いているのだらう。

『そうでもないさ、私たちも最初は敵同士だった』

「えっ？」

『だが、最終的には分かり合えた。・・・君と君の兄だつて必ず分かり合えるさ』

「・・・うん、ありがとアーチャー。私頑張ってみるね」

椀は少し安堵したような表情で私に返事を返した。私の言葉で、彼女が前に進めると言つのなら本望である。

そうして、私の母校でもある穂群原学園に到着する。その外観は面影は有るものの、私が通っていた頃とは全然違った。

先ず圧巻だったのは、校庭をせわしなく動き続けている多くのロボット。椀の話によると、それらは掃除をしたり不審者を捕まえるために置かれているらしい。しかし、これは保護者たちにアピールするためで実際には大したことはしていないようだ。

校舎に入り、椀の教室へ向かう。内装も変わっていて、安全装置だとかいったものが多く設置されていた。

「おーい、椛〜！」

教室に入ると、元気のいい声で椛を呼ぶ人物がいる。その少女は自分の席に椛を手招き、椛も逆らわずにそちらへ向かう。

「おはよう、綾ちゃん」

「おはよーさん、椛はなーんで昨日休んだのかな〜」

椛が言う綾ちゃん（アーチャーは知らないが、零話の弓道部の子）は、人が悪そうな笑みで椛をつついている。椛は少し困った顔をする。戦争の同盟の話で寝不足になったなんて誰が言えるのか。

「え、えつと・・・」

「椛は昨日はサボって命先輩とデートしてたのよね〜」

「なっ、ラムダちゃん!？」

椛が言い訳を言う前に口を挟んだのは、制服にピンクのリボンを沢山付けている金髪の少女。どうでもいいが、制服改造は校則違反じゃないのか？

「私昨日早退したんだけど、椛と命先輩が二人っきりで街を歩いているの見ちゃったのよね〜」。

椛と命先輩、他の学生が授業中に揃って休んで街をぶらつく・・・あれ？これってデートよね!？デートなんですよ!羨ましいわあ、私も学校なんてサボってベルンとあゝんなことや、こゝんなことやってみたいわね。苺のジャムでお互いに洗いっこしたりして・・・
ジュルリ!」

ラムダちゃんとやらはいかにも楽しそうに、早口でまくし立てる。最後の件は明らかに危ない人だ。そのベルンとやらも可哀想に・・・

まあ、そっちもそういう趣味が有るのかもしれないが。

「な、な、な、なーんですってー!？」

椀たちの会話を聞いて割り込んできたのは、長い髪をツインテールにした少女。指を椀に突き出し、わなわなと震えている。

「ちょっと、藤村さん！私のお姉さまとデートしてたって本当なんですよ!？」

「し、白井さん、落ち着いて・・・」

「これが落ち着いていられますか!？いえ、落ち着いてなんていられません!！私のお姉さまの貞操の危機なんですわよ!！」

何でいきなり貞操の危機になる？それにしてもお姉さまか、あのラムダとか言う子といい、この子といい、この学校は女同士というのが流行っているのだろうか。

「てめえら、早く席着け。もうチャイムなってるぞ」

椀の弁解の前にクラスの担任が現れる。ヒートアップしている内に、授業の時間になっていたようだ。

「後でしーっかり説明してもらいますからね!」

そう言って少女は自分の席へ帰って行く。流石に授業を止めてまで問い質すつもりは無いようだ。椀は一つため息を吐いて、席に座る。授業が終わったらまた尋問が始まるのだ、憂鬱にならない筈があるまい。

「さ、もう逃げられませんか？」

午前の授業が終わり昼休み、かの少女が再びやってくる。椛が言い逃れしないように、休み時間が長い昼休みに尋問することを選んだのだろう。

「・・・白井さん、落ち着いて聞いてね？確かに私と遠坂先輩は昨日一緒に街を歩いてたよ」

「やはり、そうでしたのね！！私のお姉さまと学校をサボってイチヤイチャデート・・・許せません！！」

「だから落ち着いて、白井さん。遠坂先輩はね、私を手伝ってくれたの」

「・・・一体、どういうことですか？」

椛は一息おき、昼休みがくるまで授業中ずっと考えていた言い訳を続ける。

「実は私の兄さんが昨日いなくなっちゃって、私が探しに行こうとしたら遠坂先輩に偶然逢って、兄さんを探すのを手伝ってくれたの。遠坂先輩のおかげで兄さんは見つかったけど」

それは嘘のようで本当、本当のようで嘘。

「さ、流石お姉さま！なんと優しい心の持ち主・・・！」

「ちっ、面白くないわねえ。せつかくドロドロの三角関係を期待したのに・・・」

椛の言い訳は彼女たちに通用したようだ。椛は机の下で、見えな

いように拳を握る。そして彼女たちは別の話題に移行していく。「隣のクラスのリオン君格好良くない?」「でもメイド好きって聞いたわよ?」「知ってる?隣の〇〇高校の羽衣さん、近寄ってくる女子を片っ端から食べちゃってるらしいよ」「噓!?!?」「・・・やはりいくらか時代が変わっても、女子が恋バナ好きというのは不文律のようだ。椀と命の話も彼女たちに取って格好のネタだったのだろっ。

そして更に時間が経過し、今は放課後。授業が終わって圧迫感から解放される時間。椀も背を伸ばし、帰宅の準備をする。

そんなリラックスムード漂う教室に、あの少女が現れる。

「椀、いる?」

遠坂命である。

「遠坂先輩?どうしたんですか?」

「どうしたも何も、一緒に帰るんだから迎えに来たに決まってるじゃない」

その瞬間、教室がざわめいた。ちょうど今日彼女たちの疑惑が出来たのである、気にならない筈が無い。

「お、お姉さま・・・？確か私の記憶によると、藤村さんとお姉さまの家は方向が違った気がするのですが・・・？」

「ん？ああ、だって私・・・」

駄目だ、それ以上先を言うな
！

「だって私今、椋の家に泊まってるんだもの」

命による爆弾発言が投下される。いや、本来なら親戚筋の同性の家に泊まるなんていうのはおかしくはない。しかし、今この教室においてはその言葉は別の意味を帯びてしまうのだ
！

「お・・・姉・・・さま？」

「あーら、すっかり椋に騙されちゃったわね？
ねえねえ、悔しい？！せっかく先輩は純潔だと思ったのに、すぐに否定ッてどんな気持ち？！どんな気持ちッ？」

ラムダとやらが実に楽しそうに、白井さんの顔を窺いながら心を決る。断言しよう、この子はドSだ。

「？一体あの子はどうしたの？」

「・・・考えちゃ駄目です。早く帰りましょう」

椋は命の手を握り、早く帰ることを促す。今言い訳をしても逆効果だし、この空気の中に長くいたくないのだろうが、手を握ったりすれば疑いを強めると思うぞ？

「お、お姉さまー！！！」

教室を出た瞬間、絶叫が響き渡る。椀たちの反応は対照的、椀は頭が痛そうにしている、命は不思議そうな顔をしている。明日からの学校は、心底面倒なことになるんじゃないだろうか。

「そういえば、遠坂先輩は何で聖杯戦争に参加したんですか？何か願いがあるんですか？」

帰り道のたわいない会話の途中、椀がふと思い出したように問いかける。そういえば聞いていなかったな、遠坂は願いなんて無かったと思うが彼女はどうかのだろう。

「・・・別に願いは無いわ」

やはり彼女も願いのために聖杯戦争に参加したわけではないようだ。

「・・・椀、貴女は私の両親が死んだの知ってるわよね？」

「はい、確か事故でしたよね？それがどうかしたんですか？」

「・・・違うのよ。私の親はね、殺されたの。・・・魔術師に」

「・・・え？」

「どのくらい前からか分からないけど、魔術師が魔力を抜かれて殺されるって事件が多発してるの。私の両親も同じ状況。世間に言え

るわけないし、事故ってことにしてるけどね」

命は寂しそうに、苦笑しながらそう言う。無理も無い、彼女のよ
うな少女がいきなり一人になったのだ。普通なら絶望に沈むだろう、
それでも気丈に振る舞う彼女は実に強い。

魔術師が魔力を抜かれて殺される、か。やりようによつては、世
界に影響を及ぼす可能性すらある。一体何が目的でそんなことをし
ているのか。

「犯人はまだ尻尾すら見せてない。だけど私はいつか犯人を見つけ
てやる！そう思ってた。そしたら二月前、私の家に手紙が届いたの」
「その手紙には何て・・・？」

「これからこの街で行われる聖杯戦争に参加しろ、勝ち残ったらお
前の両親を殺した犯人を教えてやるって書いてたわ。勿論、差出人
は不明」

・・・一体どういうことだ？何故命を聖杯戦争に出す必要がある
？犯人を知っているということは、確実に危険な存在の筈だ。それ
が基本的には一魔術師でしかない命を聖杯戦争に出す理由が分から
ない。

「だからね、私は勝ち残って犯人の鼻っ柱を折ってやるの・・・
」

そう言う命は決意に満ちた顔をしている。今まで数多の魔術師を
殺してきた犯人なのだ、直接戦うのは危険極まりない。しかし、ど
うしても自分で一発入れなければ収まりがつかないのだろう。

命の事もそうだが、生きている筈の無いイリヤスフィールが存在
しているし、今回の聖杯戦争には怪しい気配が多い。特に怪しいの

はセイバーに権を襲わせ、サーヴァントとして私を召喚させたアベルとやらだが。

何故かは分からないが、とてつもない胸騒ぎがする。この聖杯戦争は悪意に満ちた誰かに仕組まれたものなのではないか？

第九話 誘いの手紙（後書き）

今回こんなことした経緯

「学校生活入れよう」「だったら友達いるよね」「一発キャラだし、クロスしたくね?」「じゃあ、うみねこから出そう!エリカとかドラノールとか出したいな」「それならラムダの、ねえねえ、悔しい?!せつかく領主になれたのに、いきなり剥奪ツてどんな気持ち?!どんな気持ちツ?のセリフ入れようぜ!」「でも、うみねこだけってあれじゃね?」「だったら黒子だろ」「うみねこキャラの中に黒子だけって浮き過ぎ、エリカとか消そう」「あれ?ゲストキャラ二人だけってなんか・・・よし、他から出そう」「百合と言えば羽衣狐様だろJK」「ああ、百合ばっかもあれだ、じゃあ高校生ぐらいの男・・・リオンか」

という脳内会議が行われて、こんなことになりました。多分これから先、彼女たちは出てこないんで気にしないでいいです。

番外編 未知の食材（前書き）

なんとなくノリと勢いだけでちゃちゃっと作ってしまった。反省もしているし、後悔もしている。だけどせつかく作っただし、一応出しとくかみたいな。まあ、本編には一切関係ないんで見なくても一向に構いません！

番外編 未知の食材

どうも皆さん、戦闘において足手まといにしかない役立たずこと藤村椋です。え？何で自虐ネタから入るかって？そんなの決まっています。戦闘シーンが基本メインな小説において足手まといは要らない子扱いになるんで、キャラ立てしてゐるんです。

ほら、チ○ノのパーフェクトさんすう教室で言ってるじゃないですか。山落ち、意味などなくても、キャラクター立てばいいって。勝った（キャラ立ちした）者が正義です。

前置きが長くなりました、本題に入ります。今回は番外編、本編の時間軸を無視した、なんとなくカオスな空間です。キャラ壊れは当たり前、パロディはほどほどに、私、藤村椋の視点でお送りしたいと思います。

今回は、アーチャーがあゝの食材を使って料理を作る話。作者が一度は食べてみたいあゝの食材、皆さんは食べたことありますか・・・？

私とアーチャーは今、巨大スーパーに來ています。イリヤちゃんが家に來たので、また食材が足りなくなっただけです。別に買物嫌いではないですし、アーチャーからいい食材の見分け方を教えて

もらえるから結構楽しんでいます。

夕飯の献立を考えながら食材を探していると、急にアーチャーが立ち止まりました。あ、あとアーチャーは今実体化して私服を着ています。買った食材を私一人に持たせないようにするための配慮らしいですけど、結局はアーチャーが一人で持つちゃうんです。

「どうしたの？何かいい食材があった？」

「・・・あれが いい 食材 なのは 分 からない が、使 っ て み た い 食 材 は あ っ た」

そう言っ て アーチャー は その 鷹 の よう な 眼 で、水 槽 の 中 の ある 生 き 物 を 見 て い ま す。その 生 き 物 と は、その 可 愛 さ か ら 昔 ブー ム に な り、ブー ム が 去 っ た 後 は 食 用 に 移 行 し た と 言 う 希 有 な 存 在。だ け ど 今 で は そ ん な に 珍 し く も 無 い か ら、何 故 アーチャー が 使 っ て み た い の か は 分 か り ま せ ん。

「じゃあ、今日の夕飯はあれで決定？」

「・・・使ったことは無いから 旨く調理出来るかは分からないが、私の料理人としての魂があれば 使えと 叫んでいる・・・！」

貴方は料理人じゃなくて英雄であり、サーヴァントでしょうが。・
・まあ、いいです。あのアーチャーがこれを調理したことが無い
というのは意外でしたが、アーチャーのことです、きっと美味しく
作ってくれるでしょう。

私は売り場に行き、それを購入します。人数がいますし、私のお
代わり用ってことで20匹ほど購入です。他の食材も買って、あと
は家に帰って料理するだけです。

家に帰って早速、アーチャーは準備に取りかかります。まずは食材を捌くところからです。しかし流石はかつてブームになった生物、つぶらな瞳で此方を見てきて、捌くのがためられます。しかし、アーチャーは・・・

「ふつ、私は1を捨て9を救う者。可愛いからといって私から逃れられると思うな！」

何故か異様に高いテンションで次々と捌いていきます。頭を落とし、腹を開いて内臓を取り出し、背骨を剥がす。一連の作業中、頭や内臓が無くても動くのは軽くホラーでした。

「ねえ、これをどう調理するの？」

私は普段これを食べる時は唐揚げにして食べます。しかし、アーチャーがただ揚げるだけで満足する筈がありません。

「そうだな、これ尽くしにするとして・・・スープに天ぷら、カルパッチョ、あとは蒲焼きにしてみようか」

うわー、料理名を聞いただけで唾が出てきます。一体どんな味になるかは想像出来ません。しかし、私の食欲を促進させて、お代わ

りを何杯もさせるのに間違いはないでしょう。お米をいつもより更に二合足しておきましょう。

そして料理の完成。アーチャーが作ったそれは、正に料理の極み。これに勝てる料理を作る人間なんて、きつと世界に数名いるかいな。いか。だって料理が光を放ってるように見えるんですよ？普通の人間には無理です。

「初めての食材だからな、少し気合いが入り過ぎた」

気合いが入り過ぎただけで料理に光を放たせれるのは、貴方だけだよ。

「うーん、いい匂い。今日は何を作ったの？」

そう言って厨房に入ってきたのはイリヤちゃん。アーチャーが作った料理の匂いに誘われて来たみたいです。

「あれ？何これ？」

「見て分らないか？これはな、ウーパールーパーだ」

ウーパールーパー、別名アホートル。その愛くるしい姿

から一時期ブームになるほどの生き物だったが、盛者必衰、次第にブームは去っていった。そして最後には食用になり、2095年現在では家庭でも一般に食べられるようになっていく。

因みに、アーティストのUVERworldはウーパーではなくてウーバーです。作者がUVERworldを紹介したら、確実にウーパーワールドって読むやつがいるんですよ。間違えないように！

あれ？今何か電波が流れたような・・・まあいいです。イリヤちゃんにはちよつと吃驚した顔をしています。どうしたのでしょうか？

「え？ウーパールーパーって食べられるの？」

どうやらイリヤちゃんはウーパールーパーが食べられることを知らなかったようです。イリヤちゃんは昔の時代の人らしいですから、無理もないのかもしれません。

「ああ、食べられる。私が生きていた頃は余り普及していなかったから、使ったことは無いのだが・・・取り敢えず一つ食べてみるかね？」

アーチャーがウーパールーパーの天ぷらを掴み、イリヤちゃんに突き出します。イリヤちゃんは恐る恐るそれを受け取り、ゆっくりと口に運びました。

「つつ！これは・・・！」

イリヤちゃんは天ぷらを一口食べた瞬間、漫画だったら後ろに雷

のエフェクトが出るような反応をしました。それだけ美味しかったということでしょう、私も早く食べたいです。

「・・・初めに口にした瞬間、サクサクの衣が私を歓迎した。しかし、それはただの序章。私の歯が更に進むと、そこに現れるのはふわふわの身！トロトロのコラーゲン！正に食感の三層構造・・・！」

イリヤちゃんはどのコメンテーターだ、という感じのコメントをします。あつるえゝ？イリヤちゃんはこんなキャラじゃ無かったような・・・？

「イリヤ、君はまだ甘い」

「なん・・・だと？」

「気づかないかね？君はそれを何もつけず食べた・・・この抹茶塩をつければ更に味に深みが増す・・・！」

イリヤちゃんに力説するアーチャー、こつちを漫画で表すと劇画調といったところでしょうか。抹茶塩を持ち上げるその姿は、まるで弟子を試す鬼師匠の如き迫力です。

「その、抹茶塩を・・・！」

「駄目だ」

「何故!？」

「これは夕食の時にな」

まあ、当たり前ですよ。イリヤちゃんはつまみ食いだけで、どれだけ食べるつもりだったのでしょうか。

そして時間は過ぎ夕食時。テーブルにはすでにウーパールーパーフルコースが並べられています。大変豪華なその姿は圧巻の一言につきます。

「へえ、今日はウーパールーパー尽くしのね」

唯一今日の献立を知らなかった遠坂先輩が、部屋に入ってくるなりすぐに反応します。確か遠坂先輩はウーパールーパーの唐揚げが好きだったので、今回の食事は嬉しいんじゃないでしょうか。

そして、いただきますの号令の後、遠坂先輩がまずウーパールーパーのカルパッチョを口にしました。

「こ、これは!？」

イリヤちゃんの時と同じく遠坂先輩も、いつもとは違ったオーバーなリアクションを取りました。・・・何で今日はみんなはっちゃけてるんでしょう？

「私が今まで食べてきたウーパールーパーとは何だったのか・・・！まるでフグとスッポンを合わせたかのような味に、鶏肉のような身の食感！確実に今後ウーパールーパーについての評価が変わる・・・！」

遠坂先輩もコメンテーターですか。いつからこの家はグルメ番組の現場になったんでしょうか？

「ふん、ミコトは表現が乏しいわね」

「・・・何ですって？」

イリヤちゃんが遠坂先輩を鼻で笑いました。この子って意外と黒いんですね。えっ？私も十分黒い？何ですかこのふざけた電波は。

「だって、一つの食材を他の食材で例えるなんて・・・それだったら別にウーパールーパーを食べなくてもフグやスッポンを食べればいいじゃない」

「うぐっ！他の食材で例えるコメンテーター全員を敵に回すわよ？」

「それがどうしたの？私には全く関係ないわ」

イリヤちゃんが遠坂先輩を押します。でもね、別にコメント求められてるわけでは無いんだから、ただ美味しいと思えばいいと思うんだ。

そしてイリヤちゃんと遠坂先輩は凄いスピードでウーパールーパーを食べていきます。私は出遅れてしまいました、こうしてはいられません。私も食事に参戦を

ピンポン

・・・こんな時に誰でしょう。

「私が出ます。けど、絶対に残しといてくださいね」

このペースだと私の分を残しといてくれない気がしたので、釘を刺しておきます。遠坂先輩もイリヤちゃんもちゃんと頷いたのを確

認して、私は玄関に向かいます。

しかし、私は気づいていませんでした。これがフラグだったということに……

玄関に来ていたのは知り合いのおばさんでした。なんでも私が一人で此処に住んでいるというのを、母からついさっき聞いて心配で来たらしいです。そういえば、母に遠坂先輩が家に泊まってるって言うてませんでした。私はおばさんに大丈夫と伝えて、最近の話をします。

おばさんは最初は心配していたようでしたが、遠坂先輩が泊まっていると聞くと安心したようで、いつでも頼るようにと伝えて帰って行きました。

私はそれを見送ると、急いで部屋に戻ります。大分話していたみたいで、おそらく30分は話していたんじゃないでしょうか。おあずけをずっとされていて私のお腹はすでに限界です。

しかし、現実は無情でした。私の分の食事が綺麗さっぱり残っていません。さあ、犯人は誰でしょう？すぐに昇天させてあげますよ？

「遠坂、先輩？イリヤちゃん？」

「「ひっ！」」

どうしたんでしょうか？二人が抱き合ってます。

「えっとね、そう！ライダーが僕も食べたいなんて言って、私たち

が止めたのに食べちゃったのよ！ね、イリヤスフィール？」

「そうよ！ライダーったら節操が無いんだから。全く、マスターのミコトがちゃんと躓ないからいけないのよね」

二人は揃ってライダーさんが犯人だと言います。そういえば、いつの間にかライダーさんが実体化してますね。

「ちょっと待てーい！！儂はそん、ぶるうああああ！！！」

ライダーさんが何か話す前に遠坂先輩が正拳突きを放ち、ライダーさんは飛んで行きます。

「・・・アーチャー？結局真実はどうなの？」

この場で唯一信用できると言ってもいいアーチャーに、私ができる限りの笑顔で問いかけます。アーチャーの顔が引きつって見えるのは、きつと気のせいですね。

「その、だな。・・・ライダーが食べてしまった」

「何！？アーチャーお前もか！？」

ライダーさんがブルータスお前もか、みたいなノリで叫んでいます。

「・・・そう。ライダーさん、覚悟はいいですか？」

「ひいーっ！！」

ライダーさんは悲鳴をあげながら外に逃げようとしてました。何でそんなに怖がつてるんでしょうかね？私は正当な報復をしようとしているだけなのに。

まあ、私がライダーさんを逃がすことなんてあり得ません。私の

食事を奪った罪、その身で味わってくださいね・・・？

「アーチャー、ライダーさんを捕まえて」

「・・・我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

「お？・・・何だこれは！？」

「・・・フィツシュ」

アーチャーがどこから取り出した布によって、ライダーさんは簀巻きになりました。アーチャーの話によると、この布は男性なら逃れることが出来ない魔法の布らしいです。なんて便利な布なんでしょう！後でアーチャーに貰うことにします。

「待て、落ち着けモミジ！話せば分かる！」

「・・・言い訳するとか、なんて往生際の悪い男なんでしょう。貴方は本当に英雄なんですか？」

あれ？何ででしょう、部屋に居るみんなの顔が真っ青です。冬ですからね、風邪を引いたのかもしれませんが。

「さあ、始めましょうか」

ふう、すつきりしました。ライダーさんはすっかり動かなくなり
ましたけど、自業自得ですよ。以前、自分がしたことを反省しな
いのが悪いんです。

「・・・椀、予備のもので作ってきた。これを食べておけ」

アーチャーが厨房から色々な料理を運んできました。でも、これ
はウーパールーパーじゃ無いんですよ。

「・・・今度また作ってやるから、今日のところは我慢してくれ」

まあ、アーチャーがそう言うなら今日は我慢しましょう。ウーパ
ールーパーで無いとは言え、アーチャーの料理は絶品ですから。

「じゃあ、いただきます」

その後、彼女たちの中で絶対に桜から食事を奪わないという暗黙の誓いが生まれたことは言うまでもない。

番外編 未知の食材（後書き）

今回はジャンプNEXTの松井先生の『ウーパールーパーを食べる企画』を見てなんか物凄くやってみたくなり、やっちゃいました。なのでそれを大いに参考にしています。

というか実際に食ったこと無いのに何やってんだオレ・・・

あとUVERworldのニューシングル「クオリア」が2010年9月15日発売です！（宣伝）

第十話 今後の指針（前書き）

サブタイトルが全然決まらない。・・・やっぱり○○の○○縛り
なんて辞めるべきだったか・・・

第十話 今後の指針

「アーチャー！」

藤村家別宅に帰宅すると、イリヤスフィールが走って私に飛びついてきた。私はそれを受け止め、やはりこの子は変わらないと実感する。

「一応言っておくがね、レディの振る舞いとしては相応しくないと
思うのだが？」

「あら、せっかく再開できたのよ？こういう時にそういうことを言うのは野暮ってものじゃない？」

私を書いておいた手紙の文面を使って揚げ足を取ってくる。まあ、確かに再開できたことを喜ぶのに、そんなことを言っではいけないな。

「・・・ちよつと？貴方たちが義理でも兄妹だつたつてのは聞いたけど、玄関先でいちゃつくのは止めてくれない？」

私の後ろにいた命が呆れたようにそう言う。別にいちゃついていたわけでは無いのだが・・・命にはそう見えたのだろうか。

「イリヤスフィール、そういうことだ。すまないが降りてくれないか？」

「そうね、前みたいにイリヤって呼ぶならいいわよ？」

「・・・分かった。イリヤ降りてくれないか」

私がイリヤと呼んだことに満足したのか、イリヤはすぐに私から

降りた。そして取り敢えず屋敷に入ってから話をする事になり、全員で屋敷に入る。

柊や命が制服から普段着に着替えるために自分の部屋に行くと、私はイリヤ向き直る。

「一応確認するが、君は本当にイリヤスフィール・フォン・アインツベルンで間違いないな？」

「むっ、シロウは信じて無かったの？」

「いや、そうではない。私は君の死に目に立ち会ったからな、少し実感が湧かないだけだ」

私だって、イリヤが本物のイリヤスフィールだということを疑っているわけではない。ただ彼女が生きている理由が分からないから、確信を持ちただけだ。

「・・・そう。やっぱり私って死んだんだね」

イリヤは少し表情を暗くし、だが納得のいつているような声でそう言う。

「君は自分が死んだ時の記憶が無いのか？」

「・・・うん。私の記憶があるのは、シロウが正義の味方になるために出て行ってから数ヶ月だけ・・・だからどうして私がこの時代に居るのかも分からないの」

つまり、イリヤは昨日寝たと思ったたらいきなりこの時代にいた、ということなのだろう。それは一体どんな気分なのだろうか、私たちサーヴァントとは違い聖杯からの情報バックアップも無く知り合いの誰もいない未来に飛ばされるなんて。

「ただはつきりしていることは、今回の聖杯の器も私ってことね」
「何・・・？何故、この時代の聖杯の器が君なのだ！？」
「それは分からないわ。ただ私が聖杯の器だって理解できるだけだもの」

全く訳が分からないが、拙いことになった。このまま聖杯戦争が続けばイリヤが聖杯として完成し、イリヤは確実に死ぬ。これでも、この聖杯戦争の真相を調べる必要が出来た。

「・・・この事は桜たちには言わない方がいいだろう」
「そうね、シロウの真名がバレちゃうかもしれないしね」

イリヤはそう言うが、本当に大切な理由はそれでは無い。重要なのは、聖杯の器が彼女の心臓だということだ。彼女はそれを軽視しているようだが、命はともかく桜は耐えられないだろう。

「ん？そう言えばよく私が衛宮士郎だと分かったな？」

先ほどイリヤは、私が正義の味方になるために出て行ってから数ヶ月しか記憶が無いと言った。その頃の私の姿は、まだ未熟者の衛宮士郎の姿だった。なのに何故分かったのだろうか。

「私がシロウを分からないわけじゃないじゃない」

イリヤはいたずらっぽく笑いながら、当たり前のようにそう言う。

「まあ、本当はあの時アーチャーの能力を見たから、シロウがあのアーチャーなんじゃないかって当たりをつけてただけだね」

なんだそういうことか。第五次聖杯戦争において、あのアーチャーはバーサーカーから私や遠坂を逃がすために一人で立ち向かった。その時にあいつは、バーサーカーを5回も殺すという快挙を成し遂げている。あのバーサーカーをそれだけ殺したのだ、私が出る全力でバーサーカーに挑戦したのだろう。

「それに・・・」

「入るわよ」

イリヤが何かを言おうとした時に、着替えを済ませた命と楳が部屋に入ってくる。イリヤは少し嫌そうな顔をしたが、どうしたのだろうか。

「あら、お邪魔だったかしら」

「ええ、とつても」

イリヤと命の間に火花が散る、この2人はとことん仲が悪いな。イリヤは遠坂とも犬猿の仲だったから、似ている命にもそうなってしまうのだろうか。

「・・・まあいいわ。貴女たちも話を聞きなさい」

先に折れたのはイリヤの方。イリヤは肩を竦めるような振りをすると、開いている席へ促す。命と楳もそれには逆らわず、素直に着席する。

「私が何でこの時代にいるかは分からないって言ったわよね？」

「ああ、気が付いたらこの時代にいたのだろう？」

「そう、私はこの街の郊外の森にある城・・・そこで何かの機械に繋がれてたの」

郊外の城と言えばあのアインツベルンの城か。それにしても何かの機械に繋がれていた、か。

「命はどう思う？」

柊は魔術師の世界を知らないし、多少は知識が有るはずの命に問いかける。

「そうね・・・死んだ筈の違う時代の人間がこの時代に現れる理由として考えられるとしたら、何らかの方法で平行世界を渡る、私たちが知る由も無い方法で蘇生させる、それと・・・クローンか何かと同じ人間の記憶を入れるってくらいかしらね」

・・・その中で今の現状から言うと、一番可能性が有るのは最後の説か。イリヤもその考えに行き着いたのだろう、少し顔が青い。当然か、自分が偽物だと言われたも同然なのだから。

「イリヤ、別に悲観することは無い。もし仮に君がそうであったとしても、君が私の大切な家族であるということに何の支障も無い」
「シ、アーチャー・・・」

イリヤは涙で顔を歪ませながら、私を見上げる。ああ、そうだ。私は彼女のことを大切な家族だと思っている。なのに何故、かつての私は彼女を救えなかったのか。彼女を見捨てて、くだらない理想を求めなどしたのか。

「・・・ちよつと待って。この考えだとすると、確実に誰かが何かの目的で暗躍してるってことよね？」

命が急に思いついたようにそう言う。確かにそうだ、偶然でそんなことになる筈がない。

「・・・そうでしょうね。言ってなかったけど、私が起きた時に一枚の手紙が置いてあったわ」

「その手紙には何と？」

「・・・これから冬木で聖杯戦争が始まる、それに参加しろ。その場には・・・アーチャーがいるって」

何だと？どういうことだ？イリヤが起きた頃にはまだ私は召喚されていない筈だ。なのに何故、私が聖杯戦争にいることなどを確約出来るのか。まさか、私が召喚されることすら計算の内だというのか。

「・・・手紙って言ったわね。その手紙に何か特徴は無かった？」

「そうね・・・確か、何かの宗教のマークみたいなのがついてたわ」

「つつ！その手紙は何処に！？」

「私が起きた城にそのまま置いてるけど・・・」

「じゃあ、その城に行くわよ！」

命が焦ったように立ち上がる。だが私たちは、命が何をそんなに慌てているのか分からない。

「待て、先ずは我々に説明しろ」

「さっき言ったでしょ、私にも手紙が来てたって。それにもね、宗教的なマークがついてたのよ！」

つまりは命を聖杯戦争に参加させた人間も、イリヤをそうさせた人間も同一人物だという可能性が高い。それを確認するため、そして新たな情報を得るために手紙が見たいということだろう。

「・・・確かにそれは注目すべき点だ。しかし、城はここからかなり距離があるし、森では長い間歩かなければならない。今から向かうのは得策ではない」

「・・・そうね。じゃあ明日、早い内に向かいましょう」

私が諭すと、命もそれを承諾する。今からアインツベルンの城に行くとなると、随分時間がかかるので拙いと悟ったのだろう。

「て、ことは明日も学校休むんですね・・・また噂に・・・」

「あら、椈が来たくないなら別にいいわよ」

「いえ、行きます。気になりますし」

椈も明日、城に行くことが決定した。私としても見ておきたいので、そうしてくれるのはありがたい。

「じゃあ、足が必要ね。ライダー！」

「うむ、やっと儂の出番か。忘れられたのではないかと思ったぞ」

命の命令により、今まで霊体化して一言も喋っていなかったライダーが実体化する。

「いい、明日までに全員が乗って行ける乗り物を調達してきなさい」

「了解した。ミコトが泣いて喜ぶ物を用意してみせよう！」

「・・・別に普通のでいいわよ」

ライダーは不適な笑みを浮かべながら、屋敷を飛び出して行く。何故だろうか、不安しか出てこない。ライダーが用意する乗り物とは何になるのだろうか。

第十話 今後の指針（後書き）

うーん、何か物足りない気が・・・何かおかしな点とか有ったりしますかね？「設定間違えてんだよ！原作見直して来い！」とか「この話しないのはおかしいでしょ」とか「イリヤスフィールは俺の妹っ！」とか、言いたいことが有ったらどんどん言ってください。

第十一話 椛の夢（前書き）

やっぱりシリアスの方が書きやすいな、と。書いてて楽なのはシリアスな話で、書いてて楽しいのはエグい話。

エグいと言えば、うみねこのゲロンカステル郷。一回書いてみた
いな、エリカとセットで。

第十一話 椛の夢

ここはどこだろう？

藤村椛は今ではあまり見ることが出来ない荒れ果てた家が建ち並び、少なくとも現代の日本では有り得ない街にいる。

ああ、これは夢なんだ。

椛はこの空間は自分が見ている夢なのだと考える。昨夜は普通に別宅で就寝したし、何か自分がこの空間において浮いているという感覚がする。

でも、ここは一体？

椛はこのような場所に行ったことは無い。もしかしたらテレビでちらっと見たのかもしれないが、そんなことを覚えている筈も無い。

まあこれは夢なんだし、特に気にすることも無い。普段は見れない光景なのだから、観光気分で見物してみようということで、椛は荒れ果てた街を探索する。

街にいるのは色々な人種の人々。黒人や白人、東洋系の顔立ちの人々もちらほらいる。その全員に共通することと言えば、彼ら全員がぼろぼろの服を着て、貧しい身なりをしているというくらいか。

椛はその中で一人だけ見知った顔を見つけた。最近椛の従者となった彼、アーチャーは、椛が知っている姿とは少し違っていた。特徴的な白髪は赤が混じっていて、肌の色も薄い。年齢も椛の知る彼

は30代に届くか届かないかと言ったところだが、今眼前にいる彼は20代前半ぐらいだろうか。

「アーチャー！」

柁は声を出して彼を呼ぶ。しかし、これは夢。夢の中の住人であるアーチャーに声が届くことは無い。アーチャーはそのまま真っ直ぐと街を進んで行く。

柁は取り敢えずそれについて行く。そしてたどり着いたのは、何かバリケードのような物に囲まれた家。アーチャーは迷わずそれを壊し、中に踏み入って行った。

家の中に居たのはみすばらしいベッドに寝込んでいる中年の女の人と、その傍でうつらうつらとしている十歳頃の子ども。

子どもはアーチャーの侵入に気づき、身構える。だが所詮は子ども、アーチャーは子どもを捕まえると家の外に彼を投げ捨てた。

子どもを追い出した後、アーチャーは辛そうな顔をしながら、何処からか剣を取り出す。そしてそれを臥せている女性に突き刺した。

柁がアーチャーの突然の凶行に驚いている間にアーチャーは女性の死を確認し、黙祷を捧げながら剣を発火させた。そしてその火が収まる頃、外にいた子どもがよろよと中に入ってくる。

その子どもの目にはどう映ったのだろう。自分の母が少し目を離しただけで黒こげになっているなんて・・・冗談にしか感じられない。

子どもが呆然としている間にアーチャーは出て行こうとする。しかし子どもはその事で正気に戻り、アーチャーに詰め寄る。

それは日本語では無いので何を言っているのかは、翻訳機械が発達したおかげで外国語を勉強していない樫には分からない。だが、母を殺した犯人に詰め寄る言葉など決まっている。おそらくは、何故母を殺した！などと言っているのだろう。

アーチャーはそれを冷たい目で見つめる。樫にはこれが、本当にあのアーチャーと同一人物なのかが分からなくなった。アーチャーは皮肉を言ったりすることはあるが、優しい男であることは分かる。少なくともこんなことをする人間では・・・ない。

樫が混乱している間に周りは暗転し、次に見えたのは先ほどまでとは違う、薄暗い森だった。樫が周りを見渡すと、そこに何かに追われるよう走って来る少女がいた。

彼女は樫がいるところまで来ると、派手に転ける。すると彼女の後を追うように異形の群が現れた。少女は必死に逃げようとする。だが、足を挫いてしまったのだろう、彼女は立ち上がることが出来ない。

そんな彼女に死が近づく。異形の群は一斉に彼女に襲いかかった。彼女は目を瞑り、死の痛みに備える。

しかし、彼女に凶刃が振るわれることは無かった。先ほど無情の刃を振るったアーチャーが、今度は彼女を救ったのである。そのアーチャーの姿はボロボロだった。髪は汗と血にまみれ、あの赤い外套は所々破れている。

アーチャーは鬼神の如き強さで、次々と異形の者を切り捨てていく。か弱い少女を一人で救うその姿は、表現するとすれば・・・正義の味方。樫はまたも混乱する。先ほどの冷酷なアーチャーとこのアーチャー、彼は一体どちらが本当の姿なのだろう？

やがてアーチャーは最後の異形の者を切り捨てる。そうするとこの場に生き残っているのは、アーチャーと少女のみ。アーチャーは少女の方を振り返る。

アーチャーはおそらく、大丈夫か？とでも聞いたのだろう、少女に柔らかい笑みで何かを言う。しかし、彼女の返した反応は・・・恐怖。

返り血や自分の血で、アーチャーの姿は赤を通り越してどす黒い。彼女の反応は無理からぬ反応。それを理解しているアーチャーは、不快感を味わうことは無い。しかし、彼が寂しそうな顔をしたのも、また事実だった・・・

更に場面は変容して行く。その先には必ずアーチャーがいて、彼は必ず人助けをしているか無情の刃を振り下ろしている。

椋には理解が出来ない。これはアーチャーの過去なのだろうか、それならば彼は一体何がしたいのだろう？

そしてまた場面が転換し、今度は何処かの丘にいる。この場面だけは、他とは大きく違っていた。他の場面では所々にノイズが混じっていたり、色を失っていたりしたが、ここは常に黄金色の朝日が辺りを照らしている。

その丘にはアーチャーはいない、しかし二人の男女がいた。男の方は椋と同じくらいの少年で、髪は珍しい赤色をしている。女の方は金髪の、この世のものとは思えないほど綺麗な外国人。

二人は向き合って何かを話している。しかし、その言葉は聞こえはするが理解出来ない。単語の意味は分かる筈なのに、それが上手く噛み合わない。そんな中、ようやく理解できる言葉が発せられる。

「最後に一つだけ、伝えないと」

「ああ、どんな？」

「・・・あなたを愛している」

その言葉の後、彼女はまるで最初からいなかったかのようにその場から消えうせた。

「ああ、本当にお前らしい」

残された男は、そう言って清々しい笑顔で空を見上げていた・・・

桜はそこで目を覚ます。夢の影響で興奮していたのだろうか、寝汗が酷いし髪も寝癖がついてしまっている。

「桜、起きているか？」

それを直していると、ドアをノックする音と共に、出てこない桜を起こしに来たアーチャーの声が聞こえる。

「えっ？・・・うん。起きてるよ！」

先ほどまでアーチャーの夢を見ていた樫は、普段通り振る舞おうとするが逆におかしな反応をしてしまう。

「……どうかしたのか、樫」

そんな反応をすれば、何処か鈍感なところがあるアーチャーだつて簡単に異常に気づく。

「……うん。ちょっと話さない？」

こうなつた以上、樫は正直に先ほどの夢についてアーチャーに尋ねることにする。色々と気になるし、アーチャーの話を聞いてみるのも手かと思つたのだ。

「……なるほどな、確かにそれは私の過去だろう。マスターはサーヴァントの記憶が流れ込むことが有るからな……」

アーチャーは樫の夢の話聞き、その夢は自分の過去であることを肯定する。

「……じゃあ、貴方は何がしたかつたの……？」

樫は夢の中で何度も思つた疑問をアーチャーに問いかける。アーチャーは目を閉じて考え込み、やがて重い口を開く。

「・・・私はかつて、正義の味方になりたかった」

正義の味方・・・柊も夢の中で彼をそう感じる事が何度かあった。しかし、最初に見た記憶などから考えると、どうしても否定してしまう。

「正義の味方とは、多くの者を救う者のことだ。・・・だから私はいずれこぼれ落ちる1を切り捨てることで、残りの9を救うことを選んだ」

「・・・切り捨てるって？」

「感染する正体不明の病を抱える女性を殺すことで他の者にその病が蔓延するのを防いだり、治療すれば助かる見込みのある老人を他を救うために見捨てたり・・・まあ、そういうことだ」

アーチャーは何でもないようにそう言う。しかし、夢で見た彼は1を切り捨てる時、いつも悲しそうな顔をしていたのを柊は知っている。

「正義の味方・・・実にくだらないう夢だ。全てを救うことなど、できる筈もないのにな・・・」

アーチャーは感傷的になったのだろうか、そうぽつりと零す。

「・・・アーチャー」

「・・・話は終わりだ。早く着替えて来い、イリヤたちが待っている」

柊が何か言う前にアーチャーは部屋を出て行く。アーチャーは先ほど、正義の味方になりたかった（・・・）と言った。つまりは、

今はそんな夢を持っていないということだ。

・・・それは夢を諦めたということ。彼は記憶を見た限り、自分を犠牲にして多くの者を救っていた。そんな彼が、今や正義の味方をくぐらないと切り捨てる。

柊は今まで将来の夢というものを持つたことが無い。学校の作文でも毎回適当なことを書いていたほどだ。そんな柊には、アーチャーの苦悩を完全に分かることなど出来ない。しかしそれでも、彼は何か間違っていると感じた・・・

第十一話 枕の夢（後書き）

未来だっ たら翻訳機械のお陰で外国語習わなくていいってのが、
書いててとてつもなく羨ましく感じた。英語さえなければなあ・・・

そんなこんなで、次からは話が大きく動く予定。やっとここまで
来たかゝと思っただけ、まだ1ヶ月も経って無いんだな・・・

第十二話 森の城

「・・・遅いわね」

現在早朝 8 時。朝食を食べ終わった後、アインツベルン城に向かうための足を確保させていたライダーを、皆で玄関先で待っている。

「用意出来なかったのではないか？」

「一応あれは自分の仕事はこなす男よ。だからその心配はしてないんだけど・・・」

そう言っている内に、遠くの方から車が走ってくるのが見えた。

私以外は見えない距離なので、命たちにライダーが来たことを伝えようとして、その外観に私は凍りついてしまった。

「な、何だ、あれは・・・」

「ちょっと、どうしたのよ!？」

「ラ、ライダーが此方に向かっていているのだが・・・」

私がこの先を言うのを躊躇っている内に、かの車は命たちの肉眼で見ることの出来る距離まで来ていた。

「何よ、別に普通のく、は!？何よあれ!！」

命も気づいたか・・・そうだ、分かるだろう？何故あんなのを選んだのがさっぱり分からない。ライダーは一体何処であれを見つけたんだ？

それは所謂・・・痛車。車の表面に所狭しと描かれている女性キ

ヤラ（見たところ全キャラが少女）、まっピンクの車体、それでいて外から中にいる人間が分かる作りになっている。あんなのに乗らなければならないなど、そういう趣味でなければまるで拷問だ。

そして車が到着し、ライダーが運転席から顔を出す。ライダーは何故かサングラスをかけていて、得意気に此方を見ている。

「・・・ライダー、これは何？」

「ふっ、驚いたか？これぞ至高の車。車体に描かれるは選りすぐりの美少女たち、先ずは出始めに彼女たちが我々を癒やしてくれる」

ライダーは気づいていないのだろうか？命のオーラは尋常じゃないくらいどす黒い。自慢なんてしている場合じゃないだろう・・・

「だがそれだけでは無いぞ？シートはメイド仕様！車内に入ったら先ず彼女たちが『お座り下さいご主人様』と迎えてくれる！更に、クラクションは鳴らすたびに『ちよつと邪魔よアンタ！・・・私の彼が迷惑してるじゃない』などとツンデレ仕様！極めつけはアクセル！踏んだ途端、『そんなに強く踏んじゃ、あっ』と色っぽい声でスピードの出し過ぎを抑えてくれる・・・！」

ライダーが物凄く力説しているが、全く頭に入らない。その原因は、隣で絶対零度のオーラを纏っている命。確実にこれから制裁を行うつもりだろう。

「・・・・・・・・（ザッ）」

「待て命、気持ちは分かるが落ち着け。ここで騎乗スキルを持つライダーを再起不能にすれば、運転出来る者がいなくなるぞ」

そうして制裁をするために動き出した命を必死に止める。いや、

実は私だつて車の運転ぐらいやろつと思えばできる。しかし、あんなのを運転したくない。だから、もつともらしい言い訳をしておく。

「・・・分かったわ。向こうに着いたら、ね？」

「・・・止めはしない」

ライダー、君がこの車を本当に素晴らしい車だと思っているのは分かる。しかし、それに乗らされる人間としては溜まったものじゃない。霊体化出来る私と違って、桜たちは羞恥プレイを強いられることになるのだ。だから私は君を擁護することは決してない。

私がそんなことを考えている内にライダーはドアを開け、我々を招き入れる。

「さあ、乗りな！」

『お座り下さいご主人様』

そんな感じで命とイリヤがしぶしぶ車に乗り込む。だが桜は乗ろうとしない。

「どうした、桜？」

「・・・えっ、いや、何でもないよ！」

「・・・そうか」

桜はどこか上の空なようだったが、私が声をかけると慌てて車内に入って行く。・・・おそらく、今朝見たという私の過去について考えていたのだろう。まともな人間からすれば、あんな馬鹿げた行動をする意味が分からないだろうからな・・・

「おい！貴様！何をちんたら走っているか！さっさと進まんか！」
『ちよつと邪魔よアンタ！・・・私の彼が迷惑してるじゃない』

道路を走っていると、前方に速度の遅い車がいたのだろう、ライダーが野次を飛ばす。やはりライダーだけあって、乗り物に乗っている時はテンションが高いのだろうか。それとも、この車だからか。

ライダーのあまりにあれなことに恐れをなしたのか、前方の車が脇によける。そしてライダーは機嫌をよくして、アクセルを踏み込む。

『そんなに強く踏んじゃ、あつ』

「うおおー！逆にもつと踏み込みたくなるではないかー！」

『そ、そ、そん、そんなに強く踏んじゃ、あつ』

ライダーは確実におかしなテンションでアクセルを目一杯踏み込む。そして車の速度は明らかに制限速度を50？以上オーバーしている。断言しよう、君は必ず地獄を見るぞ。

「・・・うう、視線が痛い」

枕や命は恥ずかしいのだろう、顔を隠して縮こまっている。対してイリヤは堂々としたものだ。自分には関係ないと思っているのか

もしれない。まあ私は霊体化しているから、別に視線は気にならないので構わないが。

アインツベルン城がある森に到着する。ここからは車では向かえないので、歩きになる。私の生前より森が茂っているようだ、イリヤも私も勝手知ったる道なので特に支障は無いだろう。

「待てミコト、何が不満だと言うの、ぶるうああああ！」

後ろの方で予想通りライダーが処刑されているが気にしない。今回は完全にあの男の自業自得だ。

「ぶる、ぶる、ぶるうああああああ！！！」

いつもより多めにぶるうあつてまーす、と言うような感じにライダーが奇声を発し続ける。その原因である命は、今までの鬱憤を全て吐き出しているのだろう、清々しい笑顔でアップパー、ストレート、キックetc...これまでで一番の技のキレだ。

「・・・凄いわね」

「そつえば、イリヤは見るのは初めてだったか。・・・まあ、気にするだけ無駄だ」

イリヤは命のあまりの暴力に若干引き気味だ。いや、いつもはもう少し抑えているぞ？

「ねえ、アーチャー」

イリヤと話していると楳が周りを見渡しながら私に尋ねてくる。

「この森見通し悪いけど、誰かに奇襲されるってことは無いの？」

「ああ、それなら心配ないわ」

「イリヤちゃん？」

「この森の結界と私はリンクしているから、誰かがこの森に侵入したらすぐ分かるの。ちなみに今は誰もいないわ」

それを聞くと楳は安心したようで、ほっと一息つく。しかし、確かにこの森は奇襲がし易い構造だ。楳は身を守る手段が無いので、念のために一振りの剣を投影しておく。

「・・・楳、一応これを持っておけ」

「これは？」

「これは青コウ（せいこう）の剣と呼ばれる剣を軽量化した物だ。三国志において趙雲は青コウの剣を持ち、長坂の苦境を生き抜いた。それを持っていれば多少は幸運上昇が見込める」

普通の状態の剣は楳には重すぎるので、持ち運びし易いよう小型軽量化してある。あまり効果は期待できないが、何もしないよりは遙かにましだろう。

「うん、ありがとうアーチャー」

椛は笑顔でその剣を受け取り、服にある収納にそれを入れた。

「ハア、ハア、それじゃあ行きましようか」

そのやり取りの間にライダーへの制裁を終えた命が、ライダーを引きずりながら此方にやって来る。ライダーよくあれで生きているな、明らかにオーバーキルの重傷だ。これでもし戦闘になったらどうするのだろうか。

「大丈夫よ、何のためにいつも鍛えてやってると思ってるの？」

断言しよう、君はそんなことを考えていない。

そうして皆で数刻歩き、アインツベルン城に到着した。

「こんな所にこんな城が有ったなんて・・・」

椛は城を見上げ、感嘆の息を漏らす。流石にかつてより幾分くたびれているようだが、それでも威厳を失っていない。こんな城が自分の街の近くにあるなんて誰も想像出来まい。

「行きましよう、城の中は私が案内するわ」

そう言ってイリヤは先を歩き出す。それに私たちもついて行き、玄関から城に入城する。

「ふむ、西洋の城か。儼ら中国の城とは全然違うな」

城の内装をしげしげと眺めていたライダーがそう零す。君はいつ復活した？まさか本当に命のおかげで回復力が増加したとも言うのだろうか。

「ここって何の城だったっけ、前聞いたのに忘れちゃった」

「やっぱり魔術師関係の城なんですか？」

「多分そうだったけど・・・駄目、思い出せない」

命と榎も城を見渡しながらそんなことを言っている。やはりアインツベルンの城のことを命は知っていたようだが、記憶にないようだ。

「・・・着いたわ、ここよ」

幾ばくか城の中を歩き、城のある一室に辿り着く。そしてイリヤは扉を開き、中へ入って行く。

私たちもそれに続く。だがその時、玄関の方で何かの気配がしたような気がした。

「・・・今何か気配がしなかったか？」

「うむ、アーチャーも気づいたか。微弱だが確かに儼も感じた」

ライダーも同じことを感じたらしい。これではば確実に何かがいるということになる。

「私は何も感じていないんだけど・・・」

「・・・取り敢えずライダー、あなたが確認に行きなさい。何か有ったらずくに連絡すること」

「よし、心得た！」

そうしてライダーは気配の方向に向かって行く。勘違いなら構わないし、何か有ってもすぐに対応できる距離だ。

「あつちはライダーに任せるとして、早速手紙を見せて頂戴」

「分かったわ。えっと・・・あつた、これね」

おそらくはここで生活していたのだろう、部屋には色々と物が散乱していた。イリヤは少しそんな部屋の中を探すと、一つの封筒を掴む。

「つつ！やっぱり！私の所に来た手紙と同じマークよ！」

命は手紙を見るなり、興奮したようにそう言う。私もそれを確認するため、手紙を覗き込む。

「・・・どこかで見たマークだな」

それは確実に私が見たことのあるマークだった。これを見たのは一体いつの事だったか。少なくとも生前の筈だが・・・

場面は移り、アインツベルン城の玄関。そこにライダーは一人で佇んでいる。

「……………」

周りに他の気配は無い。それならばもはやライダーにはここには無い筈なのだが……

「……出てこい、誰かは知らぬがいるのは分かっている」

ライダーはある一点を見つめ、そう言う。そこには何も無い。だがライダーは一向に揺るがない。

「ふむ、やはり分かるか」

そうしてその場に現れたのはセイバー。そして……

「ふんっ」

「ぐうあっ！」

ヴァルキリーだ。彼女は現れた瞬間にライダーを狙って攻撃を仕掛けたが、これでヴァルキリーとライダーが戦うのは三度目。ライダーはそれを見切り、逆に一撃を入れた。

ヴァルキリーはすぐにライダーの下を離れるが、それは致命傷とは行かずともそれなりのダメージ。ヴァルキリーは戦線離脱となる。

「この程度か？はつきり言ってヴァルキリーでは役不足だ。セイバーよ、貴様が来るが良い」

ライダーはいつものような馬鹿な振る舞いはせず、セイバーに堂々と一騎打ちを申し入れる。

「ふっ、よい。貴公ほどの相手ならば、我が宝具を使うに値しよう」

ライダーの申し出を受けたセイバーは、今まで見せたことの無い剣を取り出す。

「それが貴様の宝具か・・・ならば儂も全力で相手しよう。赤兎！」

セイバーが宝具を出してきたことにより、ライダーも自分の宝具である赤兎馬を呼ぶ。

「さあ、参ろうぞ！赤き馬王！！！！！！」
フラン・フォース

ライダーはその真名を解放し、セイバーに突進する。対するセイバーは僅かに笑みを見せ、宝具の真名を解放した・・・

ライダーがサーヴァントと戦闘に入ったであろうことはすぐに分

かった。私たちは増援に向かうため、急いで玄関に向かう。

「結界には反応しなかったのに、何で・・・」

「考えても仕方ないことだ。それより今は早く走れ」

訝しがるイリヤを促し、走り続ける。するとすぐに玄関に辿り着いた。そこにあった光景は・・・

「何・・・だと・・・？」

「ふむ、遅かったな」

堂々と佇むセイバーと、既に死んでいるライダーの姿だった・・・

第十二話 森の城（後書き）

はい。ということで、ライダーさん退場でーす。作者はどんな良キャラや人気キャラでも、殺す時は殺します。

・・・君がいけないんだよ。はっちゃける前のプロットの段階で死んじゃうから・・・

まあ、ライダーは作者のノリ次第で番外編とかに出すかも？

あ、あと一つ質問したいんですけど、アインツベルンの城がある森ってどのくらいの距離でしたっけ？ちょっと思い出せなくて・・・誰か教えて下さい！

第十三話 彼の誓い（前書き）

やっぱり原作が無いと書きづらいな。セリフや設定が合ってるかどうか自信がない。今度、中古で有ったら買って来ようかな？

第十三話 彼の誓い

アーチャーたちはこの場の状況に啞然としていた。当たり前だ。ライダーの真名はあの関羽、その名に恥じない実力を持っていた。それが倒された、しかも彼らが救援に来るほんの僅かの間に、だ。

「嘘・・・でしょ・・・」

特に命の驚きは尋常ではない。命は彼の馬鹿さを嫌悪していても、実力は認めていた。それが自分の判断で死んでしまったのだ、驚きもあるが信じることができないのだろう。

「・・・・・・・・・・」

アーチャーは周りの状況を確認する。セイバーとすでに消えたライダーの死体の延長線上には地面を抉ったような爪跡があり、おそらく宝具のぶつかり合いがあったと想像できる。

次にアーチャーが注目したのはその他の城の内装だ。多少のひび割れなどはあるが、基本的には最初に通った時と変わらない。

「・・・なるほどな」

それらを踏まえて、アーチャーは一つの結論を叩き出した。

「ほう、何か分かったかアーチャー？」

「ああ、君の真名が分かった」

その瞬間、一瞬だけ空気がどよめいた。だがアーチャーはそれを全く気にせず、話を続ける。

「まず始めに、ライダーの宝具はランクで言えばA+に匹敵する威力だった。それを一撃で倒すとしたら、EXランクの宝具が必要となる。しかし、それにしても荒れかたが優しい。そこから判断すると、君の宝具はライダーに相性が良かったということだ」

「なるほど。して次は？」

「君の気配を先ほどまで私たちは気づけなかった、結界とリンクしているイリヤですら。ここから出る答えは、君が何らかの気配を消す手段を持っていたということだ」

アーチャーは自分の考えを次々と言っていく。それを聞いているセイバーも感心したような顔をしているので、その考えは間違っていないのだろう。

「加えて、今までの目的のために卑怯なこととすると言う発言。それらに該当する英雄は、私が知る限りただ一人……」

アーチャーは確信を持ってそう言う。対してセイバーはしたり顔で頷くが、何も答えない。誰もが状況を固唾を飲んで見守るその時、その場に新たな人物が現れる。

「流石と言うべきか。おそらくはセイバーの真名は、お前の想像通りだよアーチャー」

全員が声のした方向に向く。そこに居たのは高島治郎と、見たことのない老人。現状から考えれば、彼はセイバーのマスターであるアベルというものである。

「皆さんはじめまして、いやお一方にはお久しぶり。セイバーのマスター、アベル・リシュレイです。どうぞよろしく」

アベルは紳士的に、恭しく礼をする。だがその眼光はあまりに鋭く、サーヴァントをしても怖気をもたらすような狂気を匂わせていた。

「バーサーカー!!」

「—————!!」

それにいち早く反応したイリヤスフィールは、バーサーカーを呼び出し、彼に突撃させる。高島治郎は焦っているようだが、アベルとセイバーは微動だにしない。

「やれやれ、まともに挨拶もさせてくれんのか？」

アベルは呆れた口調と仕草で、そう言う。バーサーカーが目の前に迫っているにも関わらず。

「天の鎖よ・・・」

アベルがそう言って手を翳すと、どこからともなく鎖が現れ、バーサーカーを雁字搦めにしていく。バーサーカーもそれから逃れようとしますが、その呪縛から逃れることは不可能だった。

「何っ?!何故、あんなものを人間が使える!?!」

アーチャーがそれを見て、驚愕の声を上げる。その鎖は誰がどう見ても宝具だ。確かに人間の中にも宝具を代々受け継いでいる一族があるが、それでも限られている。

しかもアーチャーは知らないが、かの鎖は第四次聖杯戦争においてのアーチャー、ギルガメッシュの所持していたものだ。人間が所

持しているなど有り得ない。

「————!!!」

「バーサーカー！」

バーサーカーが鎖から逃れようとする咆哮と、イリヤの悲痛な叫びが響き渡る。しかし、この鎖は神性を持つ者には絶大な威力を誇る。最高クラスの神性を持つバーサーカー、ヘラクレスには逃れられない。

アベルはそれを楽しそうに一瞥すると、バーサーカーの下へゆつくりと歩く。その手には新たに、歪な形をした短剣が握られていた。

「さあ、楽しいショータイムの始まりと言ったところか？」

アベルはまるでミュージカルの舞台に立つ役者のように手を広げ、アーチャーたちに語りかける。それに対する返事を待たず、アベルはバーサーカーに短剣を突き立てる。

「————!!!」

「……えっ！？ 契約が切れた?!」

そうすると少しの間の後、イリヤスフィールのそんな声がする。

これまたアーチャーは知らないが、この短剣は第五次聖杯戦争においてキャスターのサーヴァント、メディアが使用した宝具『破壊すべき全ての符』ルールブレイカーその効力は、魔術的な呪いや契約といったものを無に帰するということ。その効果により、バーサーカーはイリヤスフィールとの契約を切られたのだ。

「……馬鹿な、何故そんな物まで……」

アーチャーのそんな疑問に答える者はいない。それに答えられるアベルは、バーサーカーに対して呪文を唱える。

「 我に従え、ならばこの命運、汝が剣に預けよう。・・・さあバーサーカー、私に従うがいい」

「 ー！！！」

それは・・・契約の呪文。これに応えれば、バーサーカーはアベルと再契約することになる。バーサーカーは魔力を大量に消費とするクラス、現界するためにはすぐにでも新たなマスターを得て魔力供給をする必要がある。

しかし、バーサーカーはそれを受けるのを必死に拒む。彼は狂化しているとは言え、多少の自我が残っている。

彼はかつての第五次聖杯戦争のことを覚えているわけではない。しかし、召喚した時のあまりに嬉しそうなイリヤスフィールの顔を見て、この少女を守ろうと誓った。その誓いのためにバーサーカーは必死に・・・耐える。

「やるではないか、バーサーカー。だがしかし、それもここまでだ」

アベルが再び呪文を唱える。それは明らかに先ほどとは違い、強制的な効力を持っていた。それにはさしものバーサーカーと言えど・・・耐えられない。

「 ー！！！！！！！」

バーサーカーは最後の咆哮と共に・・・堕ちた。

「・・・嘘、バーサーカー・・・？」

イリヤスフィールはその現実を受け入れられない。バーサーカーの方を向いて、目を見開いている。アーチャーはバーサーカーとアベルの下へ行こうとするが、セイバーが邪魔して先に進めない。

アベルはまたもや実に楽しそうに、いやとてつもない快感を得たようにアーチャーたちを見据える。そして彼の腕にある令呪が光り出す。

「バーサーカー、私の命令に従え」

「—————！！」

アベルの令呪が一つ消費され、バーサーカーに戒めが科せられる。しかし、バーサーカーは大英雄ヘラクレス。簡単には従わない。

「一つでは無理か・・・では繰り返す、私に従えバーサーカー」

それを知るとアベルは、簡単に二つ目の令呪を使用する。それにより、バーサーカーの最後の砦が崩された。今までイリヤスフィールを守ってきた騎士は、今度は彼女の敵となったのだ。

「ちょっと、これはハンパなくヤバイわよ・・・」

命は冷や汗を流しながら、現状ただ一人の戦力と言っているアーチャーに語りかける。

アーチャーとてこの状況を打破する算段は無い。ライダーが消え、バーサーカーとセイバーが敵にいる今、アーチャーだけで生き残ることなど絶対に不可能。

「せめて街に戻れば、考えが無いことも無いんだけど・・・」

命は悔しそうにそう言う。彼女の考えはアーチャーらには分からないが、それでもこの状況を切り抜けなければその考えは泡と消える。

「・・・遠坂先輩、街に逃げ切れれば何とかなるんですね？」

今まで静かに現状を眺めていた椋が、命にそう問う。

「ええ。确实とは言えないけど、少なくとも今よりは大分生存率は高くなるわ」

「・・・そうですか」

そして椋はゆっくりと、アーチャーに視線を向ける。彼らは数秒アイコンタクトをすると、アーチャーが椋たちに屈強な背を向け、バーサーカーとセイバーの前に立ちふさがる。

「先に行け、ここは私が引き受けよう」

アーチャーは一切振り返らず、手に夫婦剣を作り出し、命たちに行けと言う。

「馬鹿言ってんじゃないわよ！あんたが消えても私の考えは破綻する！それじゃ意味ないのよ！」

「・・・遠坂先輩、大丈夫です」

「・・・椋・・・？」

「アーチャーは、死んだりなんかしません。足止めをしたら、ちゃんと戻ってきてくれます」

椛はどこか確信を持ってそう言う。そんな風に言われれば、命もこれ以上何も言えない。少し逡巡した後、アーチャーを見つめる。

「・・・そうだ、椛。一つ確認していいかな？」

アーチャーは尚振り返らないが、彼女たちに言葉を投げかける。

「何？」

「ああ、足止めをするのは構わんが・・・別に、あれらを倒してしまっても構わんのだろう？」

アーチャーの顔は椛たちには見えない。だがそれでも椛たちには、この状況でさえ彼は笑っていると感じてきた。

そんな中、イリヤスフィールだけはその言葉に不安を抱かずにはいられない。その言葉は・・・あのアーチャーの、遠坂凜たちへの最後の言葉。

「シロっ・・・!？」

イリヤスフィールはアーチャーにやめて、と言おうとした。しかしその言葉は、アーチャーが手で制したことで止められる。

「・・・イリヤスフィール、私は生前君を守れなかった。君は知らないだろうが、くだらない理想のために君を蔑ろにした。だから今度は・・・私に君を守らせてくれ。それが、兄の勤めだ」

「・・・私の方が、お姉ちゃんだよ・・・？」

「おっと、それは済まない。君はそんな風に見えないからな」

アーチャーは普段と変わらない様子で、イリヤスフィールと話す。対するイリヤスフィールは、それで決心がついたのか顔を引き締める。

「・・・行きましょう」

命たちはアーチャーをおいて走り出した。アーチャーが彼女たちを振り返らないのと同じく、彼女たちもアーチャーを振り返らない。それだけ、アーチャーを信頼しているのだ。

「ふつ、やけに格好いいではないか。正義の味方でも気取るつもりか？」

アベルはどこか不満げな様子で、アーチャーに問う。

「やめてもらおうか、私は正義の味方だと言うものが嫌いだ。私はただ、サーヴァントとしての役目を果たすだけ・・・」

アベルはその答えに目を更に鋭くする。それはアーチャーの返答に不満があるのか、それとも・・・

「・・・いいだろう。セイバー、バーサーカー、しばらく遊んでやれ」

アベルの号令と共に、二人のサーヴァントがアーチャーの前に立ちはだかる。アーチャーは皮肉気に口を歪めた後、彼らに対抗べく駆け出した・・・

第十三話 彼の誓い（後書き）

アベルさんの能力は、この話の肝であり、鬼門でもあります。ちよつと都合主義が過ぎるかなーとも思ふけど、気にしない。敵役にとても能力はつきものさ！

そしてこの話で、ついにストックが切れた！よくぞここまでもったと思いたい。まあ明日、明後日は暇なんで、書ききれたらいつも通りのペースで投稿します。

第十四話 森の邂逅（前書き）

先ずは初めに謝罪を・・・

前話のルールブレイカーでの契約切り、バーサーカーには効かないですね・・・忘れてました。変更が効かないんで、ご都合主義ということで勘弁して下さい。すいませんっ！

第十四話 森の邂逅

桜たちがアインツベルンの城を出てから数十分後。城での戦闘は、殆ど勝負になっていなかった。アーチャーは傷だらけで、既に壊れた干将・莫耶は二十に及ぶ。

だが、これは当然の結果。サーヴァント最優のセイバーとサーヴァント最凶のバーサーカー二人相手に、アーチャーは一人でよくここまで戦った。

アーチャーが戦えている理由としては、バーサーカーとセイバーのコンビネーションの悪さが挙げられる。しかしそれを抜きにしても、己の主たちを逃がすため、彼はよく戦っていた。

だが、結局はよく戦った止まり。アーチャーがいくら善戦しようとも、バーサーカーたちの勝利は揺るぎない。

「くそつ、投影、トレース・オン開始！」

アーチャーは尚諦めずに、新たな剣を投影する。今のアーチャーの目的は足止め。だから、負けると分かっているても、足掻き続ける。

アーチャーは新たに投影した剣で、セイバーの振り下ろした大剣を防ぐ。今のセイバーの剣は彼の本来の宝具。既にアーチャーに真名は知られているので、隠す必要がなくなったのだ。

「弓兵の身で我の剣を防ぐとは、流石と言ったところか。しかし、貴公の本分はそれではないだろう？」

確かに、バーサーカーとセイバーの猛攻により、アーチャーは精

一杯の状態だ。だが、アーチャーは弓兵。本来剣で戦う者ではない。

「君が、それを言うか？それをさせないのが君たちだろうに」

アーチャーはセイバーの剣から逃れて、皮肉気に口を歪ませる。
アーチャーの得意とするのは、後方からの遠距離攻撃。だが、バーサーカーとセイバーが接近戦を仕掛けてきている今、下がることなど出来はしない。

それ故アーチャーの戦法としては、接近戦に乗ることしか有り得ない。しかしそれでは、次第に追い詰められていくのは必定。

「・・・まあ、あのアベルとやらが参入しないだけ、ましと言った所か」

アベルは戦闘に参加せず、ずっとアーチャーを見据えている。二つも宝具を持っていたのだ、もつと多くの宝具を持っていても何の不思議もない。彼が戦線に加われば、アーチャーはここまでもっていないだろう。

「・・・セイバー」

そのアベルが、ため息を吐きながら、セイバーを呼ぶ。セイバーは剣を止め、アベルの方に向き直る。

「何だ？アベル」

「もうよい。大きな口を叩くから、もう少し粘るかと思ったが・・・
ここはバーサーカーに任せ、お前は逃げたマスターたちを追え」

アベルは冷酷にそう言い放つ。セイバーは少し考えた後、剣を納

めた。

「了解した。直ちに向かおう」

「ああ、但し殺しはするな。必ずここに連れて来い」

アベルの言葉に頷くと、セイバーは城から出て行こうとする。だが、それをアーチャーが認める訳にはいかない。セイバーに立ちふさがろうとする。

「

—————!!」

「くそっ、邪魔だバーサーカー！」

だが、バーサーカーはそれを許さない。バーサーカーを無視して、セイバーの下へ向かうことは出来ない。

そうしてセイバーは、悠々と城を出て行く。こうなってしまえば、アーチャーにできるのはバーサーカーの足止めだけ。アーチャーはバーサーカーと戦いながら、樫たちの無事を祈るばかりだった・・・

城から出たセイバーは、人には出せない速度で森を駆ける。樫たちの向かって行った方向は大体分かるので、そちらに向かって行く。

「・・・いやはやつくづく、我は少女ばかりを狙っているな」

セイバーは走りながら、苦笑を零す。最初は柵を追ってアーチャーを召喚させ、次はバーサーカーに脅威を感じてイリヤスフィールを襲い、そして今回は自らを守る手段の無い彼女たちを追っている。アーチャーに言われた通り、騎士としてはあるまじき行為だ。

「だが、それもアベルの、ッ！」

セイバーが独り言を零している時に、横から何かが迫っていた。セイバーはすぐに気づくと、それを叩き落とす。

「・・・貴公は」

「よう、あんたがセイバーだな？喧嘩しに来たぜ」

その襲撃者は、命とライダーの主従と街で激闘を繰り広げた、ランサーとティアリスの主従。ランサーは楽しそうに棒をくるくると回していて、ティアリスはどこか不満げにブスツとしていた。

「邪魔だ、我は今忙しいのだ」

「つれないね、俺との勝負より娘っ子の尻追いかける方がいいってか」

「・・・貴公、あの娘たちに協力しているのか」

セイバーが目を鋭くして、ランサーを射抜く。ランサーはどこ吹く風と言った具合に、耳をほじくっている。

「・・・なんで、こんなことに」

ティアリスはそんな彼らを見て、ボソツと呟く。彼女にとって、

この状況は想定外だった。

ティアリスはランサーとセイバーが話している間、何故こうなったかを思い出す。そう、あれは今から数分前のことだった……

椀たちは必死に森を走っていた。城でアーチャーが頑張っている今、彼女たちがすべき事は一秒でも早く街に帰ること。

「ハア、ハア、ハア……あっ！」

そんな中、イリヤスフィールが木の根に引っかかり転ける。彼女は元より運動ができるようにできていない。だから、少し走るだけで転んでしまうのも仕方ない。

そんなイリヤスフィールを見かねたのか、ライダーに対する格闘技でも分かるように、運動能力が高く、今もさほど疲労していない命が、イリヤスフィールの下へ戻ってくる。

そしてイリヤスフィールの状態を少し見て、無言でその場にしゃがみ、イリヤスフィールに背を向ける。

「乗りなさい、その方が早いから」

命はぶっきらぼうにそう言う。イリヤスフィールはしばし啞然とした後、迷わずにその背に乗る。自分がこれ以上足手まといになる

訳にはいかない。しかし、イリヤスフィールが一人で走れば更に足手まといになる。だから、アーチャーのためにも、イリヤスフィールは迷わない。

そして彼女たちは再び走り出す。イリヤスフィールを背負っている命のペースは、先ほどより大分落ちている。しかし、その速さは椀と同じペースで、速さ的には先ほどと変わらない。

そんな中、命に背負われているイリヤスフィールが新たなサーヴァントの接近に気づく。

「止まって！サーヴァントよ！」

イリヤスフィールの叫び声に、走っていた命と椀は立ち止まる。彼女たちに緊張が走る中、サーヴァントが姿を現す。

「嬢ちゃんか、久しぶり……って訳でもねえーな」

そのサーヴァントはランサー。まるで長年来の友人に話しかけるように、命に話しかける。そして何かに気づいたように、周りを見渡す。

「そっちの嬢ちゃんたちもマスターなんだろ？サーヴァントはどうした？」

命たちは答えない。いや、答えることが出来ない。この状況で真実を言えば、彼女たちは無抵抗で殺されるだろう。まあ、言わずとも殺されるだろうが。

「答えないってところを見ると、何かあったな？話せよ、別に殺しや

しねえ」

「・・・命を狙われた相手にそんなこと言われても、信じられないわ」

「あん？あん時は喧嘩の真っ最中だぜ？弱点狙うのは当然だろうが。今はサーヴァントがいねえんだ、戦えねえマスターに興味はねえーよ」

命は少し考え込み、楳とイリヤスフィールをちらりと見る。二人はそれに頷き、命はランサーに全てを話す。ライダーが消えたこと、バーサーカーの契約が切られてあちらに堕ちたこと、アーチャーが残って足止めをしていること。

「へえ、なかなか面白そうじゃねえーの」

「・・・ランサー」

「いいじゃねえか、そういうシチュエーション？の方が燃えるだろう？それに、ここで貸しても作るときゃ、後々便利だぜ？」

ティアリスは不満の声を上げるが、ランサーは既に乗気だ。しかし、はつきり言って、楳はともかく、既にサーヴァントがいらない命とイリヤスフィールに協力する意味は殆ど無い。

「・・・私は、勝ち残らないと」

勝ち残りたいティアリスとしては、強力なサーヴァントが二人、或いは三人と敵対する場所になど行きたくは無い。ここは一度引いて、作戦を練っておきたい所だ。

「願いのため、つか？あんな願いを叶えたい理由が、俺にはよく分かんねえ」

「・・・おばあちゃんとの、約束」

「約束・・・ねえ？」

ティアリスの願いを、ランサーは初めに聞いてある。その願いは、普通の人間ならば一笑にふす願い。ティアリスが純粹故に、抱き続ける願い。

「確かに今行きやリスクは高めだろうよ。けどな、別に俺は負けねえぞ？いくら強い相手だろうと、お前に勝利をくれてやる」

「・・・・・・・・」

「俺は楽しい喧嘩がしたくて、これに参加してんだ。止めたきゃ令呪でも使いな」

ランサーはティアリスに軽く忠告を入れる。そう言われれば、ティアリスとしても認めざるを得ない。

「よし。ティアリスも認めたし、嬢ちゃんたちはさっさと行きな」
「は？本気で言ってるの？」

今まで蚊帳の外だった命たちに、突然話が振られる。命としても、ランサーの申し出はありがたいが、話がうますぎて信じられない。

「何だよ、今嘘ついて何になるんだ。俺の気が変わらねえ内に早く行きな」

「・・・分かったわ、この借りはいつか必ず」

命たちはランサーとティアリスに一言礼を言つと、すぐにまた走り出す。ランサーはそれを見送ると、城の方へ歩き出した。

「・・・・・・・・」

ティアリスも無言でランサーについていく。これから一体どうなるのか、と考えながら・・・

おまけ

ランサーとティアリスは朝早くから、サーヴァント探しをしていた。

彼らは命たちと戦った後、一度も敵と遭遇していない。ランサーは喧嘩がしたくてうずうずしていたし、ティアリスは願いのために、早く勝利したいと焦っていたことが、そうさせた原因だろう。

「まったく、他のヤツらはどこにいるんだよ。さっさと喧嘩させろってんだ」

「・・・・・・・・」

「ん？どうした？ティアリス」

ランサーが愚痴を零していると、ティアリスの様子がおかしいことに気づく。どこか驚いていて、信じられないと目を見開いているようだった。

「一体、何・・・が・・・」

ランサーがティアリスの視線の先を追うと、確かにそこには信じられないものがあつた。

「ふっはっはっは！飛ばすぞーっ！」

『そ、そんなに強く踏んじゃ、あっ』

数日前、ランサーと死闘を繰り広げたライダーが、見ていて恥ずかしくなる車を運転しているのだ。サングラスで無駄にきめていて、その長い髭が風に靡いていた。

「おいおい、マジかよ・・・」

ついでに言えば、ライダーのマスターの少女と、他に数名が同乗している。その姿はとても恥ずかしそうで、自分から乗った訳ではないことがよく分かった。

「・・・すごい」

「は？」

ティアリスは何故かキラキラとした目で、車を見つめている。

「・・・あれは最新型痛車、萌ックス2095・・・！」

「え？何そのダサい名前？というか、お前ってそういう趣味あつたのか？」

驚愕の新事実発覚、ティアリスは隠れオタクだった。いや、別に大したことは無いけれど。

「・・・とりあえず、あれサーヴァントだから追おうぜ」

「・・・(コケン)」

ランサーは、まだ目がキラキラとしているティアリスを現実引き戻し、車の向かって行った方向へ歩いて行く。

自分のマスターが意外な趣味を持っていたことに驚く、意外に常識人なランサーの1コマ。

第十四話 森の邂逅（後書き）

ティアリスにオタク設定なんてなかったのに・・・話の流れで付けてしまった。これから先この設定を使うことがあるのか？！

次は多分、タイガー道場になると思います。数名をゲストに、色々となあれなタイガー道場をお送りします。

番外編 混沌の虎道場（前書き）

タイガー道場、出来たはいいが・・・どこか違和感がある・・・
テンションが低いのだろうか？タイガの口調が違うのだろうか？

取りあえず、色々突破記念タイガー道場擬きを見てやって下さい。
微妙にネタバレあーんど重大？発表あるんで・・・

番外編 混沌の虎道場

タイガ「皆さんこんにちはーっ！お待ちかね、タイガー道場のお時間です！えっ、待ってない？馬鹿を言うなっ！私はここでしか出番がないのだっ！面白くなかろうと、出番は欲しいっ！・・・ということで、司会はお馴染み私、藤村大河と！」

イリヤ「みんなの妹！ロリブルマこと、イリヤでお送りしまーす！」

タイガ「取りあえず弟子一号！」

イリヤ「押忍！何ですか、師しょー！」

タイガ「貴様は正座一時間っ！！！今回のタイガー道場に出る必要なしっ！！！！」

イリヤ「それはおかしいと思われまーす！品行方正、キュートでポップな私が、何故そんな目にあわなければならないのでしょーかつ！」

タイガ「この道場はっ！本編に出ることが無い、私ほか原作キャラ救済のための場所っ！本編に出演中の貴様は出てくるなっ！！！！」

イリヤ「あら、何を言ってるの？原作だって、タイガは殆ど本編に関わらないじゃない」

タイガ「うぐっ！そこを突かれると・・・何も言えない」

イリヤ「大体、もしタイガが本編に出たら百才越えよ？タイガはよ

ぼよばのおばあちゃんとして描かれないの？」

タイガ「いやー、それはちょっと・・・よし！弟子一号の出演を許可しようっ！！！」

イリヤ「押忍！当然でありまーす！」

タイガ「・・・何か釈然としないがつ！取りあえずPV10万越え、ユニーク1万越え、お気に入り登録100件越え記念！タイガー道場、別名裏話暴露大会始まるよ！」

リン「・・・その程度で記念と言っな」

イリヤ「あつ、先輩、ちーっす！」

タイガ「遠坂さん、何も言わないでくれ。ここまで行っただけマシだと思おう！」

イリヤ「思おう！」

タイガ「それはそれとして、今回はゲストを呼んでいる」

イリヤ「ぶっちゃけ、作者的に扱いが難しいこの人っ！原作で一番黒いと噂の、今作では間桐改め藤村の藤村桜さんでーすっ！！！」

サクラ「・・・どうも」

タイガ「ぎゃーっ！なんでもう黒桜ちゃん化してるの？！」

サクラ「ふふっ、当たり前じゃないですか。これが黒化せずには

れますか？」

タイガ「えーっ？本編では桜ちゃんの祖先という、ちょっとはおいしい位置にいると思うんだけど？」

サクラ「・・・ふっ」

イリヤ「なに？この馬鹿にされた感じ？」

サクラ「別に子孫がどうしようと、私には関係ないですよね？」

タイガ「いや、でも・・・」

サクラ「大体、どうして私が先輩じゃなくて別の人と子ども作ってるんですか？」

イリヤ「しょうがないじゃない、ここはセイバールートの未来の世界なんだから」

サクラ「セイバーさんはいないんだから、その後くっ付いたって設定でいいじゃないですか。それに、私が子どもを作った裏設定知ってますか？」

タイガ「うーん、知らないけど・・・何かあったの？」

サクラ「作者が考えた設定として・・・某ホモ疑惑のあの人と、お酒の席で先輩の愚痴を言つて、その勢いで・・・とか言う馬鹿げた設定です」

タイガ「え？マジで？」

サクラ「マジです」

イリヤ「それは流石に・・・」

サクラ「そもそも、私が先輩以外と子どもを作ろうとする筈が無いじゃないですか」

タイガ「むっ！この展開は・・・弟子一号っ！チャカの手意だ！」

イリヤ「押忍！了解でありますっ！」

サクラ「私の『バキューン』は先輩だけの物なんです。先輩が望むんだったら私の『バキューン』で『バキューン』して『バキューン』させてあげるのに・・・。ちょっと恥ずかしいですけど、先輩だったら『バキューン』とか『バキューン』な『バキューン』だって。さらに言うところにはライダーがいるんだから、『バキューン』で『バキューン』して『バキューン』。あ、あと『バキューン』『バキューン』『バキューン』・・・ふふふ」

イリヤ「ふー、いい仕事したぜ」

タイガ「よくやった、弟子一号。このままだったら、この小説が18禁指定になる所だった」

イリヤ「作者がまだ17なのにそうになったら、更新すらできなかったかもね」

サクラ「ふう、言いたいことは言いました。じゃあ私は帰りますね、色々と準備することがあるんで・・・」

タイガ「え？ちよつとサクラちゃん！？まだ収録時間終わって・・・あーっ、行っちゃった。しょうがない、弟子一号っ！誰でもいいから、ゲストを連れて来なさい！」

イリヤ「押忍！えつと、先輩は・・・いないっ！他に誰を・・・あつ、あの人だっ！」

タイガ「えーつと。イリヤちゃんがゲストを呼んでくる間、何をしていますか？」

リン「裏話を暴露しろ」

タイガ「ちよつと遠坂さん！いるならいるで言つてよ！イリヤちゃんが、新しいゲスト呼びに行っちゃったじゃない！」

リン「大丈夫だ。私はすぐに出て行く」

タイガ「えーつ・・・まあいいや！じゃ、裏話を暴露するよ！先ずは何から行こうか」

リン「オーソドックスに、この作品を作る経緯からだ」

タイガ「了解っ！この作品を作る経緯？それは・・・作者がキャスターの英雄を聖杯戦争に出したかったからっ！」

リン「士郎ではないのか？」

タイガ「ぶつちやけた話、最初は完全オリジナルサーヴァントだけで構想練ってたけど・・・やっぱアーチャーはエミヤだろ、ってな

「つたらしいわ」

リン「主役が後から決まるとは……」

タイガ「その辺作者は適当ね。基本大雑把だから」

リン「次だ、それぞれのサーヴァントを選ぶ経緯」

タイガ「えっと、アーチャーとキャスターはさっき言った通りで。バーサーカーはイリヤちゃんが出ると決まったからセットで決定」

リン「セイバーとランサーは？」

タイガ「セイバーは名前を知ってる英雄を片っ端から探してたら、wiki見てこれだろってなったみたい。ランサーは……槍の宝具でいいのが無かったから、長物の武器持つてるこの人だろうと」

リン「次」

タイガ「ライダーは最初呂布で考えてたんだけど、EXTRAのキヤラ見た時に、まんま呂布だろってキヤラがいたから、赤兔馬繋がりで関羽らしいわ。まあ、呂布より設定が楽になったらしいけど」

リン「最後、ヴァルキリー」

タイガ「ああ、彼女はね……作者も全く知らない英雄？よ。女サーヴァントが欲しくて色々と探してたら、wikiで発見したの」

リン「wikiばかりだな」

タイガ「これもぶっちゃけると、彼女の真名はある意味では知られていて、ある意味ではほとんど知られていないわ」

リン「どういう意味だ？」

タイガ「それは本編で語られる事になるので、期待せずに待ってましょう」

リン「ではそろそろブルマが帰ってくるから、私は帰る。じゃあな」

タイガ「あっ！遠坂さんっ！・・・素早いわね」

イリヤ「押忍！師しょー！ゲストを連れて来たでありますっ！」

タイガ「おお、よくやった弟子一号！早速紹介してくれ」

イリヤ「押忍！さあ、入ってきて下さい！」

ベルン「・・・初めまして、奇跡の魔女ベルンカステルよ」

タイガ「って、何でこの人なのよっ！この人、うみねこのなく頃にのキャラよ？！Fateのキャラから呼びなさいっ！」

イリヤ「だって、今まで散々うみねこ好きを公言してたのよ？ちょっといいじゃない」

タイガ「うーっ、もういいっ！来てしまったものは、しょうがない！彼女をゲストとして認めようっ！」

イリヤ「これからは、うみねこのなく頃にと、うみねこのなく頃に

散のネタバレを含むので、嫌な人は読むのを止めてね！」

ベルン「……もういいかしら？」

タイガ「オーケーよ！さあ、ばんばんトークしましょうか！」

ベルン「その前に……一つ言うことがあるわ」

タイガ「ん？何？遠慮なく言っちゃって」

ベルン「実は作者は……今、リリカルなのはとうみねこのなく頃にのクロスオーバー『魔法少女リリカルなのはVS残酷魔女ゲロカスべるん（仮）』を構想中よ」

タイガ「……え？」

イリヤ「……は？」

タイガ「……えー、ぱーどん？」

ベルン「だから、リリカルなのはとうみねこのクロスオーバーを構想中だつて言ってるの」

タイガ「えーっと……なんじゃそりやあああああああ！！！」

イリヤ「作者は馬鹿なの？！受験生の癖に、作品二つも出来る訳ないじゃない！」

ベルン「どうしても我慢できなかったらしいわ。既に一話は書き終

わってるし」

タイガ「……一応聞いておこう、どういつストーリー？」

ベルン「それを話すのは、私の駒にやらせるわ。来なさい、エリカ、ドラノール」

エリカ「はいっ！我が主！皆さん初めましてこんにちは！私は探偵古戸エリカ、大ベルンカステル郷の分身にして駒です！」

ドラノール「初めまして、ドラノール・A・ノックスと申します」

イリヤ「このドラノールって子、何てキャラの数……！チビに無愛想に際どい服装に語尾がカタカナ……初見でこれだけキャラが分かるなんて、実際はどれだけあるのか……」

ドラノール「……別にキャラを作っている訳デハ……というより、字面だけでは服装や身長は分かりませんが」

エリカ「そんなことは置いといてっ！ストーリーの説明ですっ！」

イリヤ「……やけにハイテンションね」

ベルン「原作であの子は、私に見捨てられて死んだもの。二次創作とは言え、もう一度チャンスがあるってのは嬉しいんじゃない？」

タイガ「完璧なネタバレ……ん？じゃあ、どうして今生きてあなたに仕えてるの？」

ベルン「それは本編一話で書いてあるわ……くすくすくすくすく

すくす」

タイガ「怖っ！ベルンカステルさん、その顔は止めた方がいいわよ！？」

ベルン「構わないわ、どうせ顔は見えないんだし・・・原作であれだけ顔芸やっというて、今更何も思わないわ」

タイガ「うーん、まあいいや！細かいことは気にしない！エリカちゃん、説明よろしく！」

エリカ「ええ、勿論です。先ずこの作品は、我が主が退屈によって、リリカルの世界に訪れる所から始まります！」

ベルン「退屈は私を唯一殺す毒だからね・・・」

エリカ「補足ありますがとうございますっ、我が主！そしてその世界においての未来を見て、ハッピーエンドをぶっ壊したいと考えます！」

ドラノール「ベルンカステル郷のような魔女は、物語には残酷な結末を求メル。故に、それを壊したいと考えたのデシヨウ」

タイガ「基本的に最近の物語は、ハッピーエンドの方が多いと思うんだけどなー」

エリカ「そのために我が主自らが出向く訳がありません！私、古戸エリカとこのドラノールが、リリカルの世界に派遣されます！」

イリヤ「未来を知ってるんなら、すぐに終わると思うけど？」

エリカ「そんな退屈なワンサイドゲームを、我が主は好みません。ちゃんと向こうに勝てる要素をつけます」

タイガ「うーん、展開をどうするかさっぱり分からない」

ドラノール「作者もよく分からないらしいデス。取りあえず、どうエグい言葉責めをするか考えているだけと聞きマシタ」

イリヤ「・・・絶対、更新止まるでしょう」

ベルン「大丈夫よ。受験生の癖に、あだ名が暇人なんだから」

タイガ「それより問題は、うみねこはミステリーでリリカルはファンタジー。ジャンル違うのに、どうすんのよ」

エリカ「その辺りはご都合主義！多少の設定改変は仕方ありません！」

イリヤ「開き直ってる・・・」

タイガ「うーん・・・まあ、何とかなるのかな？」

イリヤ「何とかなるの・・・？」

ベルン「そういうことで、宣伝も終わったし、私たちは帰るわ。第二話の収録もあるし・・・じゃあね」

イリヤ「はやっ！」

タイガ「ちょっと、ちょっと、それはいくらなんでも・・・あ、三

人とも消えちゃった」

イリヤ「言うだけ言ってすぐに帰ったわね」

タイガ「もしかして、宣伝のためだけに来たの？」

イリヤ「近頃のバラエティー番組のゲストって、そういうものじゃない？」

タイガ「この道場はバラエティー番組じゃなーいつ！」

イリヤ「それで？これから何か話す？」

タイガ「うーん、もう収録時間終わりだし、今日はここまでっ！」

イリヤ「・・・まともな話があり無かった気がするわ。それに、本家タイガー道場と違和感があるような・・・」

タイガ「言っなっ！弟子一号っ！作者だって気にしてる！」

イリヤ「押忍！そこは気にしちゃいけない、大人の事情なんですわ！」

タイガ「そういうことっ！この教訓を生かして、明日へ進むのだ！」

イリヤ「師しょー、汚い大人の世界の明日には進みたくないでありますっ！」

タイガ「黙るがいい、弟子一号！皆、いつか大人になるんだ・・・」

イリヤ「押忍！」

タイガ「はいっ！そういうことで、今回のタイガー道場は終了です！次回があれば、また会おう！」

イリヤ「また会おうっ！」

とある、世界から外れた空間

「……何故、私は呼ばれなかったのでしょうか」

「……君は、今後出演予定があるからだよ」

「……？……本当ですか」

「作者が考えている展開通りなら、な」

「いいのでしょうか、ネタバレと言うものになるのでは？」

「いいんだ。飽きられない内に、食いつく要素を入れておくだけだ。・・・それに、出るとしても大分先だしな（ボソッ）」

「・・・期待せずに待っておきます」

番外編 混沌の虎道場（後書き）

・・・さて、どうしようか。リリカルとうみねこクロス、やろう
かやるまいか。一話を作ってみたはいいが・・・色々と問題があっ
たりなかったり。

因みに最後に出てきた人、分かりますよね？彼女は出しますよ、
形はどうあれ。アーチャー、というかエミヤのヒロインはやっぱり
彼女でしょう！

第十五話 槍の正体（前書き）

今回の話は、ランサーVSセイバー。作ったキャラの中で、作者がいまいちキャラを掴めていない二人が激突します。

今回はさつき出来たばかりなので、見直し少ないから変な所あるかも。

第十五話 槍の正体

椀たちが走り去った後の森で、セイバーとランサーが激突している。本来、セイバーはランサーを無視して、椀たちを追っても良かったのだが、そうしなかった。

それはランサーが容易に振り切れない相手、というのもある。だが、セイバーに少女ばかりを狙わず、強者と戦いたいという気持ちが少なからずあったことも、大きな要因と言えるだろう。

「はっ！あらよっ、と！」

「ちいっ！猪口才な！」

ランサーはセイバーを間合いに入れず、一定の距離からの突きを主体に戦っている。更に、俊敏な身のこなしからのアクロバティックな動きで、セイバーは思うように戦えないでいた。

セイバーはそれに業を煮やしたのか、無理にでも間合いに入ろうとする。その身にランサーの突きが幾度か掠るが、気にせず前に進む。

だが、最速のサーヴァントであるランサーの突きをかわしきり、懐に入ることなど、いくらサーヴァント最優のセイバーと言えど困難である。ランサーはセイバーがある程度の距離まで近づくと、すぐにその場を離れて、また一定の距離を保つ。

「おいおい、最優のサーヴァントってのは、この程度なのか？」

「ふん、なめるな……！」

ランサーは剣戟の最中にも、セイバーを挑発する。そして、セイバーは更に剣を振るうスピードを速めていく。

ランサーとて、セイバーが弱いなどとは微塵にも思っていない。むしろ、セイバーとまともに戦えば負けると思っている。だから、少しでも勝率を上げるために、様々な手を尽くすのだ。

この考えは、アーチャー・・・エミヤ、にも共通する。彼らは格上と戦う時、利用できるものは、いくらでも利用する。

ただ、彼らに共通するのは、その戦闘に対する意識だけ。エミヤは勝利のために、勝率を上げようとするが、ランサーは違う。彼は、喧嘩をより楽しむために、そうする。格上の相手に、自分がどうやったら勝てるかを考えるのが楽しいのだ。

「いつまでも・・・通用すると思うな！！！」

しかし結局、セイバーの方が武技では上だ。その強さの誤差は僅かだが、強者の戦いでは、その僅かが命運を分ける。

セイバーはランサーの僅かな隙から、一瞬で懐に潜り込む。そしてそのまま、ランサーに剣を横薙した。

「・・・・・・・・・・どういうことだ」

セイバーは振りぬいた剣の体制そのままに、訝しげに呟く。今のタイミングは完璧だった。にもかかわらず、セイバーの剣は空を斬った。いや、それだけではない。ランサーの姿が、消えたのだ。

「・・・我のように、姿や気配を消す宝具・・・いや、気配はかすかにする。だとすれば・・・」

セイバーがランサーについて考察する間に、そのランサーはマスターのティアリスの下に現れる。

「いやー、焦った。マジでやられるかと思ったぜ」

「・・・・・・負けないんじゃないかったの」

「まだ、負けてねーだろうが。まあ、このままじゃちよいヤバい。これからは、正体晒す覚悟で行くぜ？」

「・・・・許可する」

ティアリスの許可を得て、ランサーは真の戦闘スタイルへと移行する。セイバーを見据え、棒を握り直す。

「さて、セイバー。驚くな？」

ランサーはセイバーに対して、ニヤリと笑いながら忠告する。セイバーは、ランサーの発言を訝しげにしながら、先の展開を待つ。

「なっ」

そしてランサーが何か呪文を唱えた途端、ランサーの忠告通り、セイバーは驚愕の声を上げた。

「・・・・だから、驚くなっって言っただろう？」

それも無理もない。何故なら、ランサーが5人、いやもっと多くに分身していたのだから。

「分身の術・・・・日本の忍者の類か？それとも・・・・」

セイバーは少し驚いたものの、すぐに正気に戻る。ランサーの分身は確かに驚愕に値するが、そういう術を使う英雄は世界に多くいる。だとすれば、驚くよりそこから正体を探る方が、よっぽど効率

的だ。

「くくくくぐだぐだ考えてねえで、さつさと戦うぜ！！！」「くくくく」
「ちっ、うるさいわ！一人で喋れ！！！」

そうして、数人のランサーとセイバーは再び戦闘に戻る。ランサーは分身したことで、一人一人の力は弱まっているようだが、それでも、セイバーを先ほど以上に苦しめる。

一人のランサーがセイバーを突きかかると、セイバーはそれを弾き、逆に切りかかる。しかし、別のランサーの棒によって、それを完遂することが出来ない。

そして逆に、また別のランサーがセイバーに襲いかかる。一つ一つを捌くのは容易だが、数が増えれば難しくなるのは必然だ。

「ちいっ……！我が押されると？！」

そんな果てしなく不利な状況でも、セイバーは自分が押されていることを不快に思う。彼は生前は、無敵を誇った。油断して命を刈られたが、敗北などしなかった。

ヘラクレスのような大英雄に一对一で敗北したり、策によって包囲されるのはまだ許せる。それが自分の実力なのだから。しかし、ランサーのように物量だけで攻めてくる者に負けるのは、我慢ならない。例えそれが、その者の能力だとしても。

そうしてセイバーは、次第に冷静さを失う。誇りより目的を取ると言う彼も、蓋を開ければやはりプライド高いのだ。

そしてそれは、ランサーの計算通り。本来、セイバーはただ耐えていればいい。ランサーの能力とは言え、分身なんてものが長い間出来る筈がない。

だが、セイバーの安っぽいプライドが、それをさせない。ムキになって、さっさとランサーを倒そうとする。・・・そこに、セイバーと言えど、隙が生じない筈がない。

「おらあっ！！」

「ふんっ！」

一人のランサーの渾身の殴打。それをセイバーは大振りで弾き、ランサーを切り捨てる。このセイバーの行動、字面を見る限りは愚かな行為だが、ちゃんと他のランサーの間合いから外れていることを計算している。その程度の冷静さは残っているのだ。

「だから」

「駄目なんだよ」

「もう少しさ」

「冷静にならなきゃな」

「俺に間合いなんて」

「ねえーんだから」

しかし、その冷静さというのはこの場において、冷静と言えるレベルではない。なぜなら、英霊というものは多種多様な能力を持っている。間合いが空いているからと言って、大振りなんて論外だ。

セイバーにできた決定的な隙、そこにランサーは自らの宝具を全力で叩き込む
！

「くらいな、俺の如意金箍棒」

遠く離れた場所にいたランサーが、高速で宝具『如意金箍棒』を

前に突き出す。突き出された如意金箍棒は、段々長く太く変容していき、セイバーの腹をぶち抜こうとする。

「くそっ、ぐっ、ふんぬうああああ!!」

セイバーはそれをすんでのところでガードしたが、如意金箍棒の勢いを殺すことができない。踏ん張っていた足は宙に浮き、森の木を倒しながら後方へ飛ばされる。

セイバーの姿が見えなくなり、ランサーは分身を一旦解く。これは、ランサーが油断しているからではない。分身を長く保つのは非常に困難だからだ。

「・・・ちゃんと、とどめを」

「わーってるよ。正体、完全にバレただろうからな。そんなやつを見逃すほど馬鹿じゃねえ」

ランサーは如意金箍棒を一度空中に投げた後、構え直し、セイバーが飛んでいった方向に、ティアリスを抱えて走る。いくら宝具が直撃したからと言って、あれだけで倒せたとは思わない。真名が知られた今、確実に倒しておきたかった。

「・・・この辺りの筈なんだが」

セイバーが飛ばされたと思われる辺りまで、ランサーとティアリスがすぐに辿り着く。薙ぎ倒された木がここで途切れていて、セイバーがここにいた筈だということがわかる。

しかし、セイバーの姿は無い。死んで体がエーテルに戻ったのだろうか？有り得ない。あの程度で死ぬような英雄が、セイバーに選ばれる筈がない。

「・・・そこか！」

「ちっ、効かぬか。もつとも美猴王ともなれば、当然であるか」

ランサーが如意金箍棒を右に向けて放つと、消えていたセイバーが現れる。その姿は、先ほどとは打って変わっていた。

髪は乱れ、至る所に泥がついており、元来の美しさは見える影が無い。しかし、それ以上に目を引くのが、彼の身を包む鎧だ。腹の辺りは無惨に砕け散っていて、如意金箍棒の威力が凄まじいことが見て取れた。

「それにしても・・・まさか貴公のような者が、あんな戦い方をするとはな。我が知る限り、礼儀はあれどもっと粗暴な性格だった筈だが？それに、確か貴公は最後に仏となっただろう？何故このような戦に赴いたのだ？」

如意金箍棒とは、日本においては如意棒の名で知られている。先ほどランサーが消えたように見えたのは、彼の術により体を縮めたため。

つまり、分身や体の大きさを変える術を使用でき、如意棒を持つ彼の真名は、西遊記の登場人物として有名な、あの孫悟空。

そしてセイバーの言うとおり、ランサーの性格は知られている孫悟空とは違う。更に、旅の末に仏となった孫悟空が、聖杯戦争に出るなど信じられない。

「ああ、俺はな、仏なんて面白くねえから辞めたんだ」

「・・・辞めた、だと？」

「やっぱな、もっと好き勝手やりたいわけよ。仏やってみて、ちょっとは考え方が変わったかな？」

孫悟空と言えば、三蔵法師と旅をする前は散々好き勝手やっていった。仏になった後は、それができなかつた。だから、自分から仏であることを捨てて、この戦いに参戦することを選んだ。

「今の俺は、ただの一人のサーヴァント。仏辞めたせいで力が大分落ちちまつたが、喧嘩するのに力なんてかんげえねえ。どれだけ楽しめるか、だ」

ランサーはニヤリと笑みを零すと、如意金箍棒をセイバーに向ける。それは彼の本心であり、戦闘を楽しもうとしていないセイバーを奮起させようとする言葉だったのだろう。

その言葉を聞いたセイバーは、しばし沈黙を保った後、剣を握り直す。彼も、ランサーに全力でぶつかることを決めたのだ。

「よかるう。我も、全力で行く」

セイバーの持つ剣が光を放ち始め、彼が真名解放しようとしているのが分かる。ランサーがティアリスに一瞥をくると、ティアリスはできるだけ安全な場所に避難する。

「往くぞ、バ」

「セイバー、何をしている？もうマスター達を追う必要は無い。さっさと戻ってこい」

「ちっ、アベルか。・・・仕方ない、ここはお預けだランサー」

セイバーは舌打ちをし、剣をしまう。ランサーはきよとした顔をした後、慌ててセイバーに抗議する。

「って、おいおいっ！ここまでノラしといて、そりゃねえだろ！！」
「我とて、貴公と決着をつけたかった。だが、マスターに呼ばれたのだ、仕方なかるう」

「・・・行かせるとでも？」

「我が呼ばれた今、向こうの戦闘は終わったということだ。だとすれば、我がマスターがバーサーカーを連れてくるやもしれぬ。そうなれば、貴公に勝ち目はあるまい」

セイバーの言うことは正論だ。ランサーが、ここは引くべきだということとは明白。マスターであるティアリスも、それに同意している。

「知るか！バーサーカーもてめえも！纏めて倒してやる！」

ランサーは駄々っ子のように叫ぶ。彼も二人纏めて来られれば、自分は負けるだろうと考える。しかし、先ほどティアリスに啖呵を切ったし、自分としても負け戦を全力で楽しみたい。だから、引くわけにはいかない。

「貴公が倒れれば、私の楽しみが無くなる。ここは生きる。そしてまた我と戦い、我に倒される」

セイバーのその言葉は、事実上のライバル宣言。それでランサーは、反論をする気が失せてしまった。

「さらばだ、ランサー。今度は、最後まで戦おうぞ」

セイバーはそう言い残し、アインツベルンの城まで引き返して行く。ランサーはそれを見送ると、ティアリスの下に戻る。

「・・・いいの？」

「あん？何だよ、お前はの方がいいんじゃないのか？」

「・・・そうだけど」

「いいさ、次は必ず楽しめるんだ。今回は諦めてやんよ」

そうしてランサーとティアリスは、セイバーが向かった方向とは逆方向に帰って行く。こうなった以上、長居は無用だ。

（・・・それにしても、セイバーの野郎、如意金箍棒をまともに受けたってのに、やけにピンピンしてやがったな）

しばらくした後、セイバーはアインツベルンの城へと帰還する。アインツベルン城は、セイバーが出て行った時と比べ、大分崩れさっていた。天井に穴が開き、床には抉れた痕があったり、瓦礫の山

が出来ていたりする。

「帰ったか、セイバー」

「ああ。しかし、随分と派手にやったな？」

セイバーの帰還に気づいたアベルが、セイバーに呼びかける。セイバーは周りを見渡しながら、気軽に返す。

「仕方あるまい、あれは制御が難しいのだ」

そう言ってアベルは、バーサーカーを見やる。バーサーカーの体には無数の傷がついており、アーチャーの攻撃が如何に強力だったかを感じさせる。

「・・・それで？アーチャーはどうしたのだ？」

「ああ、あの男が」

この場に、既にアーチャーはいない。いや、いたならセイバーが呼び戻されることは無かっただろうが。

セイバーの問いに、アベルは少し楽しそうな顔をしながら、もったいぶって答える。

「あの男ならな、消えたよ」

第十五話 槍の正体（後書き）

ランサーの真名が判明。プラス、セイバーの真名が知ってる人なら分かったんじゃないかと。

孫悟空はこんなじゃ無いって思う方、自分もです。いまいちわかんないキャラ設定にし過ぎたかな〜と思いつつ、まあ、こんなものでいっか！という大雑把な自分に呆れています。

さて、次話はアーチャーVSバーサーカー！アニメを参考にしつつ書きたいと思っていますが・・・いつ出来上がるかが全くの未定。一週間以内にできたらいいな〜

第十六話 城の戦い（前書き）

思ったより早く出来たんで投稿します。何気に今までで一番長いのだろうか。

第十六話 城の戦い

時間は遡り、セイバーがいなくなった城では、アーチャーとバーサーカーが戦っていた。セイバーがいなくなり、アーチャーの負担が減りはしたが、それでもバーサーカーの力は圧倒的だった。

「……………!!」

「くっ！」

アーチャーの振るう干将・莫耶はバーサーカーの肉体を傷つけることがなく、逆にバーサーカーの振るう斧剣は、当たらずとも余波だけでアーチャーの体に傷を刻んだ。

「まったく、デタラメな強さだな」

アーチャーは冷や汗を流しながら、そう苦言を漏らす。それでもしなければ、やってられないのかもしれない。

「……だが、私は負けるわけにはいかない。精々手を抜け、バーサーカー……!」

アーチャーは目をかつ、と見開き、バーサーカーに突っ込む。ここでアーチャーが奮起する理由は、樫たちが逃げる時間稼ぎだけではない。

かつて、アーチャーがまだ未熟な衛宮士郎だった頃、似たような状況であるアーチャーは、バーサーカーを五回も殺した。

自分はあるアーチャーよりも、能力が上昇している。ならば、自分があの男よりも無様に負ける訳にはいかないのだ。アーチャーはそう考えている。

アーチャーは勢いをつけて飛び上がると、バーサーカーに向かつて干将・莫耶を振り下ろす。隙さえあればそれらを、壊れた幻想により爆破し、バーサーカーにダメージを与える、ないしは目くらましをするつもりなのだ。

「――！！！」

「ちっ、そう上手くはいかないか」

だが、バーサーカーがそんな隙を作る筈もない。アーチャーとてそれは承知の上だ。僅かな勝機を掴まねば、この化け物じみた男に食い下がれないのだ。

アーチャーの剣を防いだバーサーカーは、逆にアーチャーに襲いかかる。少々不意をつかれたアーチャーは、避けたりいなすことが出来ず、真正面からバーサーカーの斧剣を防ぐしなくなる。

「ぐっ、ぬうあああ！！！」

その重い攻撃は、アーチャーが耐えられるものではない。しばし拮抗したが、アーチャーは弾き飛ばされ、城の壁に激突する。

「かはっ、っあ」

「ふん、弱いな・・・もう少しは足掻きを楽しませろ」

アーチャーがそれに悶絶していると、アベルが見下した目で罵る。アーチャーはそれに何も返さない。何を言っても意味はないし、アベルの言葉は事実であるからだ。

アーチャーはよろよろと座り込み、頭からは多量の血が流れている。それは、今のダメージが強烈であることを示していた。

「・・・ふっ、味方となれば心強いが、敵となると本当に厄介だな」
「・・・笑って・・・る？」

アーチャーが僅かに笑みを零したことに、その場にいた高島治郎が驚く。バーサーカーの化け物じみた強さに、今まで活路さえ見えていないのだ、普通は笑みなど見せる筈がないだろう。

「はっ」

アーチャーは体勢を立て直し、二階のテラスに飛び乗る。彼の顔は、更に引き締まったように見えた。

「体は剣で出来ている。(I am the born of my sword.)」

アーチャーが呪文を唱えると、彼の手に弓と捻れた剣が現れる。アーチャーがそれをつがえて構えるとほぼ同時に、バーサーカーがアーチャーに飛びかかった。

「—————!!!!!!」

「ふっ!!」

ドゴオオオオオオオ!!

バーサーカーがアーチャーを捉える前に、アーチャーが矢を放つ。それはバーサーカーに被弾すると同時に爆発し、その波動で城の天井が吹き抜けになった。

「・・・あいつは、一体何者なんだ・・・？」

治郎にはアーチャーが分からない。通常、宝具は英霊一人につき一つ。例外もあるが、多くても一桁の範疇だろう。壊れれば修復することは難しいし、自分から壊すなんて失笑ものだ。

しかしアーチャーは、まるで宝具を使い捨てにするかの如く戦う。夫婦剣だけならば、治郎が知らないだけでそういう宝具があるのかもしれない。だが、アーチャーは数多くの種類の宝具を使い捨てにする。普通なら有り得ないことだ。

「そんな英霊・・・」

「いや、いるさ」

いるわけない、と治郎が言う前に、アベルが静かに断言する。治郎はアベルに向き直り、彼に教えを請う。

「師匠、一体あいつは・・・？」

「あれはな、やつの宝具じゃない。やつは、宝具を投影しているのだよ」

「宝具を、投影・・・？そんな馬鹿な・・・そんなことが、本当に出来るんですか！？」

アベルの答えに治郎は食ってかかる。それは当然だ。通常の投影はいたって使い勝手が悪く、何かの儀式に使うぐらいしか使われない。長時間存在を保つわけではないし、ましてや宝具を複製出来るわけでもない。

「私だって、宝具を自由に扱えるのだぞ？有り得ないと決めつけるなど、愚の骨頂だろう」

「うっ、すいません・・・でも、そんな投影を扱える英霊が・・・」
「いるのだよ、一人だけ・・・」

アベルはそれ以上先を言わず、アーチャーを見つめる。その表情は先ほどとは打って変わって、実に楽しそうだった。

「並のサーヴァントなら即死だが・・・」

そのアーチャーはテラスの上から、バーサーカーを見下ろす。バーサーカーは咄嗟に腕で己を防御し、死から逃れていた。普通のサーヴァントなら、それでも大ダメージだろう。しかし流石バーサーカー、殆どダメージは見受けられなかった。

そのことを確認すると、アーチャーは吹き抜けとなった城を跳躍して上がっていく。やはり彼もサーヴァントであり、その姿はすぐにアベル達から見えなくなった。

「・・・追え、バーサーカー」

「—————!!!」

アベルがバーサーカーに命令すると、バーサーカーはすぐにアーチャーを追って上に登っていく。それを見ていた治郎は、己の従者に問いかける。

「・・・ヴァルキリー、そろそろ回復したか？」

「・・・もう少し、かかりそうだ」

「・・・あいつらに、勝てると思うか？」

「・・・よくて、一割ってところかな」

ヴァルキリーの言葉を聞いて、治郎はため息をつく。ヴァルキリーと彼らの間には、決定的な差がある。今のところ何も成し遂げていない彼らは、自分たちのこの戦いに参戦している意味を、疑問視

せずにはいらなかった。

城の最上部にたどり着いたアーチャーは、森を見つめていた。樫を追ったセイバーが、彼女たちの下に行けばとても拙いからだ。

「あれは・・・ランサーか。どういふことは分からないが、有り難いことだ」

アーチャーがセイバーを見つけると、セイバーはランサーと戦っているところだった。これで、アーチャーは心置きなくバーサーカの足止めに専念出来る。

アーチャーはセイバーたちから目を逸らし、静かに集中する。その場には、吹き付ける風によりアーチャーの外套がたなびく音しかなかった。

「・・・来たか」

アーチャーが後ろをちらりと見ると、バーサーカーが斧剣を振り下ろそうとしているところだった。アーチャーはすぐにその場を離れ、バーサーカーの一撃をかわす。

「ふん、巨体の割によく動く」

アーチャーが零す間に、バーサーカーは追撃を放とうとする。しかし、度重なるダメージで城が脆くなっていたのだろうか？バーサーカーの足下が崩れ、バーサーカーは地面に嵌ってしまふ。

そんな隙を見逃すアーチャーではない。アーチャーは再び干将・莫耶を投影し、バーサーカーに向かって放つ。放たれた夫婦剣は、バーサーカーの周りを飛び交う。

「—————！！」

バーサーカーがそれを鬱陶しそうにするが、アーチャーは更に夫婦剣を投影し放つ。合計二組の干将・莫耶がバーサーカーの周りを飛び、アーチャーの号令と共に全て爆破する。

「—————！！！！」

それはダメージを与えずも、バーサーカーを怯ませる。そこにすかさずアーチャーは新たな夫婦剣を投影し、背中にクロスさせながらバーサーカーへと走る。

「心技泰山二至リちから（やまをぬき）、心技黄河ヲ渡ルこころわざ（みずをわかつ）！！！！」

アーチャーが高く跳躍する。その手に握られている干将・莫耶はまるで羽のように変化しており、傍目からでもその力の大きさがよく分かった。

「うおおおおおおおお、ぬんっ！！」

アーチャーがバーサーカーにそれを振り下ろす。それはバーサーカーを簡単に切り裂き、バーサーカーに確実な死を与えた。

アーチャーは更に夫婦剣を爆破し、その場を離れる。かつてのアーチャーはここで腕が使い物にならなくなったが、今のアーチャーの腕は、軋みはしているが使えないことはない。ここに、ステータスの差が見て取れる。

「これで・・・一つ。いや、二つか・・・？」

しかし、バーサーカーには『十二の試練^{トウェンティハント}』により、十二の命のストックがある。これだけで、倒せたわけではない。

アーチャーがそんなことを考えている内に、バーサーカーはゆらりと幽鬼のように立ち上がる。その体に傷は無く、既に回復しきっていた。

「なるほど・・・やはり、最強のサーヴァントだな」

アーチャーがそんなことを言っている間にも、バーサーカーは勢いをつけてアーチャーに迫り、アーチャーに一撃を与える。アーチャーは耐えることが出来ず、また壁へと叩きつけられた。

「ぐうつ、ぐつ・・・は」

アーチャーはしばし激痛に耐えていたが、すぐに息を整えてバーサーカーに立ち直る。バーサーカーはそんなアーチャーに容赦をしないで、新たな一撃を放つ。

その一撃により床が完全に崩壊し、アーチャーは頭から落ちていった。落ちたアーチャーが辿り着くのは、アベル達がいる城の入り口。

「・・・まだ、死んだ訳ではないよな？」

アベルは落ちて来てから動かないアーチャーに、確信をもって問いかける。アーチャーは返答こそしないが、偽ることをせずにすぐ立ち上がった。

「・・・まったく、少しは手加減して欲しいものだな」

立ち上がったアーチャーは、バーサーカーと再び対峙する。バーサーカーは微動だにせず、王者の貫禄というものを感じさせた。

「・・・バーサーカー、ここで私は君を倒せんだろう。しかし、あと二つは貰うぞ！」

アーチャーがそう宣言するのと同時に、バーサーカーの周りに剣群が出現する。その数は二十七に及び、それぞれが破格の力を秘めていた。

「
—————！！！」

その剣群は、バーサーカーとて完全に避けきれるものではない。殆どの剣は捌いたが、幾つかは彼の体に突き刺さる。

トレス・オン
「投影、開始」

そしてアーチャーは更に手元に新たな剣を投影し、バーサーカーに切りかかる。その剣もAランクを超えており、バーサーカーの鎧を越えるに十分な力を秘めている。

「・・・なっ！」

「—————！！！」

その剣は確かにバーサーカーを捉えた。しかしバーサーカーはそれを受けつつも、アーチャーに攻撃した。俗に言う、肉を斬らせて骨を断つというやつだ。

「ぐあつ、あがつ・・・ぐつ」

アーチャーはそれを受けても、まだ生きていた。しかし、殆ど虫の息だ。片腕は千切れ、脚も辛うじて繋がっている状態。あと一撃でも食らえば、必ず死ぬだろう。

「・・・悪いが、私は・・・まだ死ねない」

死に体のアーチャーだが、まだそんなことを言う。

「・・・あんな状態で、何を」

治郎は当然、アーチャーがここで死ぬと考える。こんな状態で、生き残れと言う方が無茶だ。

「—————！！！」

そんなアーチャーに、バーサーカーがとどめを刺そうと斧剣を持ち上げる。そしてそのまま、真っ直ぐとアーチャーに振り下ろした。

「・・・助かったぞ、椛」

「助かった、じゃないでしょう！どうしてこんなになるまで合図しなかったの？！」

バーサーカーのとどめを受ける筈だったアーチャーは、マスターの椛の下にいた。しかし、アーチャーの怪我は、すぐに治療をしなければならぬレベル。椛が怒るのも無理はない。

「最後の最後に、しくじつてな・・・」

「・・・遠坂先輩、どうすればいいでしょう？」

「・・・これ飲ませなさい、治癒力を上げる薬だから」

命は服の中からカプセルのような物を出すと、椛に渡す。椛がそれをアーチャーに飲ませ、飲んだアーチャーはすぐに霊体化する。実体化したままでは、余計な労力を使うからだ。

「・・・で、椛？言うことがあるんじゃない？」

「えっと、・・・ごめんなさい」

「まったく、令呪使うなら使うで先に言いなさいよ。怒鳴った私が馬鹿みたいじゃない・・・」

そう、アーチャーが無事だったのは、椛が令呪で呼び寄せたからだ。以前にアーチャーから令呪で瞬間移動が可能だと聞いていた椛は、今回それを実践したのだ。

「あの時は・・・言える状態じゃなかったですし」

「それは分かってるけど・・・」

確かに、あの時はそんなことを言える状況ではなかった。しかし命は、それでも納得できない。

「大体、どうやって連絡とったのよ？ 桜は念話できないんでしょ？」
「ああ、それはですね。ちょっと前にアーチャーと、もしも離れた時の連絡手段を決めてたんです」

アーチャーと桜は、念話で会話することができない。だから、基本的には離れないようにすると決めていた。

しかし、今回のように離れなければならない時がくるかもしれないなかった。桜からはそのまま令呪で呼び出すことが出来るが、アーチャーには連絡手段がない。

その時の連絡手段としてアーチャーが提案したのが、投影した剣を破棄することで何かを伝えるということだ。偵察などをする必要がある、剣を桜に渡し、そうすると決めていた。

今回で言えば、森で彼女に渡した『青コウの剣』がそれにあたる。本来はそれが目的で渡したのではないが、ちょうど良かったので今回はそれを使った。

「・・・どっちかがそれ気づいてなかったら、どうするつもりだったのよ」

命の言う通り、これはアーチャーと桜の意思疎通が出来ていなければ、不可能な作戦だった。随分とリスクな賭けに思える。

「信じてましたから」

「・・・そう、ならいいわ」

満面の笑顔で言う椛に、命はもう何も言うことが無い。断言して
もいい、椛は将来大物になる。

「・・・それより、早く森を出しましょう。奴らが追ってこないとも
限らないし」

実は、まだ彼女たちは森を抜けていない。もう少しで森を抜ける
ところだったのだが、走り通して体が限界に来ていて、小休止をし
ているところだったのだ。

「・・・ところで、イリヤちゃんの姿が見えないんですけど」

「えっ?・・・何やってんのよあの子は!？」

命が周りを見渡すが、確かにイリヤスフィールはいない。という
より、アーチャーを呼び出した時からいなかった気がする。

このままイリヤスフィールを見捨てる訳にはいかないし、かとい
って捜しに行くのも拙い。嫌な空気が漂っていると、何かエンジン
音のような音が聞こえてきた。命たちが其方を見ると、あの痛車が
此方に向かって来ていた。

「貴女たち、乗りなさい。・・・アーチャーもね」

「イリヤスフィール、貴女運転出来たの?っていうか、なんでサン
グラスつけてるの・・・」

その痛車は、イリヤスフィールが運転していた。ライダーがつけ
ていたサングラスをつけて、窓から命たちに呼びかける。

「ライダーが運転しているのを見てたもの。足がつけば、運転ぐらい誰でも出来るわ。サングラスは・・・ノリよ」

イリヤスフィールの身長では、普通の車の運転は出来ない。アクセルやブレーキに、足が届かないからだ。しかし、この痛車は何故かギリギリ届くので、イリヤスフィールでも運転できた。ライダーがこの車を選んで、初めて得となったと言えるだろう。

「何にせよナイスよ。これで街まで飛ばしましょう」

「行くわよ？ イエアツッ！」

『そ、そ、そんなに強く踏んじゃ、あつ』

皆が乗ったことを確認すると、イリヤスフィールはアクセルを思いつき踏み込む。何気にイリヤスフィールはスピード狂なようだった。

街までたどり着き、命の指示で遠坂邸に向かう。街の人間の視線が集まっているが、今回は誰も気にしない。そんなことを気にしている場合ではないからだ。

「・・・ついたわね」

そんなこんなで遠坂邸に辿り着く。アーチャーやイリヤスフィールの記憶とは少し変わっていたが、確かにそこは遠坂邸だった。

「・・・遠坂先輩、考えて何なんですか？」

「入れば分かるわ」

そう言っただけで、そのまま遠坂邸の内部に入っていく。そして他の者もそれに追従する。

「・・・いいわよ、出てきて頂戴！」

そうして全員が邸の中に入ったことを確認し、命が誰かに呼びかける。皆が疑問に思っていると、誰かの声が聞こえてきた。

「・・・大変だったようですね、ミコト」

姿を表したのは、二十歳前後ぐらいの男。そして彼がサーヴァントであることに、皆がすぐに気づく。彼こそが、未だ姿を見せていなかったキャスターであろう。

「・・・ミコト、これはどういう・・・」

「彼は、キャスター・・・私のサーヴァントよ」

その言葉に、命とキャスター以外の全員が驚く。どういうことだろう？ 命のサーヴァントはライダーだったのではなかったのだろうか？

命の紹介を受けたキャスターは、涼しい笑みを浮かべながら柵たちに近づく。そして一つ礼をした後、自分でも自己紹介をする。

「初めまして。私はキャスターのサーヴァント、真名は諸葛亮孔明

です」

第十六話 城の戦い（後書き）

やっとだよ、やっと出てきたぜキャスターさん。

作者は諸葛亮孔明を、えらくリスペクトしてます。だからキャスターさんは、大分出張ることになると思います。・・・まあ、次話からはっちゃけるでしょうけど。

第十七話 魔術師の策謀（前書き）

なんか前の投稿の時に、ユニークがちょうど1000人でびびった。やっぱ無双好きとしては、1000人ちょうどってなんか気持ちいいんだよね。

第十七話 魔術師の策謀

「初めまして。私はキャスターのサーヴァント、真名は諸葛亮孔明です」

諸葛亮孔明 中国の三国時代において、後の蜀漢皇帝劉備に三顧の礼をもつて迎えられた忠義の士。

三国志演義においては、人間技ではない奇跡を起こしたり、神算鬼謀をもつて自軍を勝利に導く名軍師。

まさか、こんな大物がキャスターに選ばれているとはな。日本に限れば、その知名度はヘラクレスさえも抜かすのではないだろうか。当然、知名度による恩恵も高い筈だ。

しかし、分からない。どうして彼が命のサーヴァントなのだ？ 命はライダーのマスターではなく、キャスターのマスターだったということなのだろうか。

「・・・アーチャー、実体化してくれませんか？ 怪我の具合を見てみたいので」

霊体化している私にキャスターは近づき、やんわりと言う。彼が命のサーヴァントである以上、断る理由は無いので実体化する。

実体化した私の怪我をキャスターはじっくりと眺め、時折ふむふむと頷いている。そして診断結果がでたのか、キャスターは口を開く。

「なるほど、大体分かりました。色々と手を尽くしても、回復するまでに2日程度はかかりますね」

その診断結果に、私は疑問を抱かずにはいられない。自分の体のことは、自分が一番分かる。この怪我で、たった2日で回復すると言うのか？

「あなたは先ほど、ミコトから薬を買ったでしょう？あれは、私が作った薬ですから」

「・・・君が作ったからと言って、そこまで効果があるとは思えないが」

「私をなめてもらっては困りますね。これはキャスターのサーヴァントにある道具作成スキルに加え、私自身がもつ発明スキルをフルに使い、魔術と科学のコラボレーションで作った薬です。そんなじよそこの薬とは、比べないでいただきたい」

確かに、諸葛孔明には発明家という側面があった。饅頭を作ったのも彼だし、妻のために知恵の輪を作ったなんて逸話もある。その他にも多種多様な方面の発明をしており、そんなスキルがあってもおかしくはない。

そして、現代の医療はかつてと比べて飛躍的に進歩している。このことから考えると、おそらくキャスターの言う通りなのだろう。

「それはすまなかった。何分、疑い深い口でな」

私が謝罪すると、キャスターはいえいえと首を振る。彼としても、そこまで気にすることではなかったのだろう。

「・・・ところで、どうということなのか説明してくれないか？」

一段落がついたところで、私は話を切り出す。キャスターと命も聞かれると分かっていたのだろう、静かに此方を見ている。

「おそらくは、あなたの考えている通りですよ。ライダー、関羽殿は私のサージェントでした」

「・・・ルールを破ったのか」

「前例があつて、それが認められていたのなら、ルール違反などではありませんよ」

キャスターは私の糾弾に、涼しげに対応する。彼に取って、私の詰問は想定範囲内のだろう。

「前例だと？」

「ええ。第五次聖杯戦争のキャスターは、彼女自身がアサシンを召喚しました。私はそれを真似たに過ぎません」

その言葉に、私はうる覚えなかつての聖杯戦争を思い出す。確かにそう言われれば、納得できるものがある。

アサシンは柳洞寺を守っていたし、あそこはキャスターの根城だった。ただ単に組んでいるだけだと思っていたが、キャスターの言う通りなのだろう。アサシンが佐々木小次郎だと言うのも、それによる弊害か。

「・・・そうだとしても、おかしいだろう。何故君がそれを真似れる？それに私の記憶では、かつてのアサシンは正規の英霊ではなかった。しかし、あのライダーはきちんとした英霊だったろう？」

私の問いに、キャスターはうんうんと頷く。そしてどこからか取り出した羽扇を一度くるりと回し、地面の方にその羽扇を向ける。

「この遠坂家の三代前、遠坂凜という人物は、かつて聖杯戦争に参加していました。その聖杯戦争が終わった後、纏めた資料を作り上

げていたのですよ」

「・・・キャスターのことについて、その者が知っているとは思えないが」

「本来は知らなかったのでしょうがね。その遠坂凜という人物は、魔法に手をかける所までできていたと言った所です」

つまりは、遠坂は並行世界を覗き、聖杯戦争について調べたということだろうか。私を知る限りはまだそこまで達していなかったが、もしそうだとしたら喜ばしいことだ。

「そして、関羽殿が正規の英霊だと言うことですが・・・私は彼の触媒を持っていましたし、資料から問題点を見つけましたからね。そこを改良すれば、きちんとした英霊を呼び出せるのは自明の理です」

私は詳しくないので断言できないが、確かにそれならば可能なのかも知れない。キャスターのサーヴァントは、最弱のサーヴァントと揶揄されるほど聖杯戦争に不利なクラス。使えるものは使うと言った所か。

「・・・だが、よく命が許したな？」

キャスターのサーヴァントは、とても優れた魔術師のクラス。私
が彼のマスターだったとすれば、彼が自由に扱える駒を呼び出すことなど許しはしない。

「・・・それは、えーっと」

私の疑問に対して、命は何故か口ごもる。どうしたのだろう、何かやましいこともあるのだろうか？

「それは、私とミコトの利害が一致したからですよ」
「利害？」

聖杯戦争に勝ち残るということ一つで考えれば、確かに命も許可をするのかもしれない。しかし、先ほどのどもり方を見ると違うのだろう。

「つまりは、こうです」

アーチャーが椀に召喚される二週間ほど前、キャスターは命に召喚された。触媒を用意し忘れるというすっかりをしてしまったが、命はなんとかキャスターを呼び出した。・・・諸葛凖の血筋ということは、諸葛亮が呼び出されたことにおそらく何も関係ないだろう。

召喚した翌朝。命は召喚の疲れから体が重かったが、なんとか起き出して自らのサーヴァントを探した。昨晩は召喚してすぐに寝てしまったので、あまり情報交換が出来ていなかったのだ。

「・・・いるとしたら、ここよね」

家の中を一通り探してみたが、キャスターの姿はない。あと残っ

ている場所といえば、魔術的な資料を保管している地下の一室だ。

「キャスター、いる？・・・って何してんのよ」

命が部屋の扉を開けると、キャスターが確かにいた。電子化された資料を、凄いスピードで読みながら。

「見れば分かるでしょう？資料を見ているのです」

いや、それは分かる。しかし、命が言いたいことはそうではない。何故この男、キャスターがそんなにハイテク機械を使えるのか、ということだ。

命は機械オンチの魔術師らしく、ここの資料は書物しか目を通していない。というよりも、電子化したのは、何故か機械好きだった命の母親が、データにした方が便利だからと一人でしたからに過ぎない。当然、機械オンチの命や父親は使えなかったのだ。

にもかかわらず、このキャスターはいとも簡単に機械を操る。サーヴァントは過去の英霊　この男は諸葛孔明　であり、今の技術を使えるわけがない。なのに何故この男は、昔から使っているかのように使用しているのだろうか。

「私ですから」

「・・・ああ、そう」

命の疑問に、キャスターは身も蓋もない返答をする。まああの諸葛亮なら、出来てもおかしくはないのだろうか？

「で？何を調べているの？」

「かつての聖杯戦争について、少し知りたいと思ひまして」

そう言いながらも、キャスターはキーボードをずっと叩き続けている。ブラインドタッチまでして、完全に現代人のようなだ。

「・・・これですね」

「これって・・・」

少しして、キャスターは目的の情報を見つける。その情報は、第五次聖杯戦争のキャスターの情報。

「まさか・・・これと同じことしようっての・・・？」

「ええ、その通りです。若干改良する予定ですが」

「ふざけないで！！私がそんなこと許すわけじゃない！！！」

当然である。自分より優れた魔術師に、自分で自由に扱える駒を渡せるわけがない。しかも、この男はあの諸葛亮孔明だ。どんな策謀を巡らせるか、分かったものではない。

「しかし、私の力だけで勝利を得ることは出来ません。ならば、これは必要なこと・・・そうは思いませんか？」

「・・・そりゃあ、そうだけど・・・でも、認められない」

命だって、キャスターだけで聖杯戦争に勝つことが難しいのはよく分かっていて。しかし、ここで折れるわけにはいかない。命の確固たる意思を見て諦めたのか、キャスターはやれやれと首を振っていた。

「それならば仕方ありません。次の策を考えましょう」

「・・・やけに、あっさり退くわね？」

キャスターの諦めの言葉に、命は拍子抜けしてしまう。この男ならば、食い下がって自分に認めさせると考えていたのだ。

「私はサーヴァントです。マスターが拒否するならば、是非もなしですよ」

そう言いながらも、キャスターはほとほと残念そうにしている。
・納得していないのが簡単に見て取れた。

「いやはや、本当に残念です。せつかく、関羽殿を呼び出そうと思っていたのですが」

「・・・ちよつと待ちなさい。貴方、今関羽つて言っただ？」

「ええ、そうですが？私は諸葛亮ですからね。当然、彼とも面識がありますから」

命の心は、少しぐらついた。だってあの関羽だぞ？忠義の塊、武人の中の武人。強さだけでなく、自分にちゃんと仕えてくれそうな関羽は、命に取って大分魅力的だった。

「・・・でも、関羽をきちんと呼び出せるって言うの？」

「大丈夫です。私は、彼の髭を一本持っていますから」

「なんでそんな物持つてんのよ!？」

「我々の国では、関羽殿の髭を持つていれば幸運上昇と言われているんですよ」

そんな事実初耳である。しかし関羽の触媒がある以上、呼び出すことは可能なわけである。命は判断を迫られていた。

「いや、でも・・・」

「いやー、本当に残念ですよ。関羽殿は財神ですからね、資金に困

ることは無いと思ったのですが」

キャスターは最後に棒読みながらも、爆弾発言を投下する。遠坂家の命に取って、その言葉は禁断の甘い果実なのだ！

「よし！ちゃっちゃんと関羽を召喚しましょう！」

命は先ほどまでは、意見を180度変える。しょうがないじゃないか、お金はとても大切なんだよ！

命の意見変わりに、キャスターは黒い笑みを浮かべる。資料を漁って遠坂家のがめつさを知っていたキャスターは、今回の説得を最初から考えていたのだ。

命としては何か騙された感が否めないが、関羽を召喚することを承諾する。・・・もし命が関羽の馬鹿さ加減を知っていたら、未来は変わっていたかもしれないが。

「とまあ、そんな感じですね」

キャスターの話が終わると、皆が一斉に命を見つめる。その視線を受けた命は、余所を向いて口笛を吹いていた。

「遠坂先輩、お金のために・・・」

「ミコトは、必ず儲かるからって言われて騙されるタイプよね」

「うるさいわね！別にいいじゃない、キャスターは裏切ってないんだし！」

椀とイリヤの可哀想なものを見る目に、命は顔を真っ赤にしながら怒鳴る。まあ結果論で言えば、命の言うことにも一理あるのだが。

「で？ライダーの恩恵は受けれたのか？」

「ええ、それは勿論」

キャスターはそう言いながら、近くを浮いていた機械を呼び寄せる。この機械は自動操縦の飛行ユニットで、そこからインターネットにアクセスすることができるらしい。そしてそれを少し弄った後、私にモニターを見せてきた。

「・・・これは何だ？」

「これまでに私がインターネットを使って、株やら何やらで稼いだ金額です」

私がそれを見ると、凄い数の桁数が見えた。数えて見ると、一、十、百、千、万・・・おかしいな、数え間違いか？よし、もう一度・・・一、十、百、千、万・・・

「馬鹿な・・・これは小さな国の国家予算なら余裕で凌ぐぞ・・・」
「・・・えっ！嘘でしょう?!」

私の言葉に、三人娘が驚愕の声を上げる。・・・待て、何故命まで驚いているんだ？君がやらせたんだろ？

「ちょっとキャスター！そんな話聞いてないわよ？！」

「言ってますんからね」

「言いなさいよー！！！！」

命の叫び声が、遠坂邸に木霊する。あの虎には及ばないが、それでも凄い声量だ。

「しかし、ライダーの恩恵だけでここまでなる筈は・・・」

「関羽殿だけでは無理ですよ。しかし、私には天眼というスキルがあります。これは場の状況から、簡単な未来予知や読心術が使えるのです」

つまり、ライダーの財神効果で幸運を引き寄せ、キャスターの天眼でそれを全てものにすると言った所か。・・・それでも凄すぎるだろうよ。確実に、一個人が持っていていい金額ではない。

「まあ関羽殿が消えた今となつては、それも終わりです。本当に、惜しい人を亡くしました。彼とは生前から、女性は巨乳が貧乳かで熱い議論を交わした仲だったんですがね」

・・・最後のは聞かなかったことにしよう。いや、話を聞いてみたい気もするが・・・やっぱり止めておこう。

「・・・この金はどうするのだ？」

「勿論、聖杯戦争を勝ち抜くために使いますよ。余ればミコトに残していきますが」

この予算を使いきれぬ筈がない、絶対に余るだろう。命はこれで億万長者の仲間入りか、良かったな。

「・・・具体的に、どう使うつもりだ？」

「実は、今までも大分使ったんですがね。関羽殿の痛車も、私が渡ししましたし」

「あれはあんたのせいか!!」

「何を人聞きの悪いことを・・・最悪の場合を想定して、誰でも運転できる物を選んだに過ぎません。実際助かったでしょう？」

確かに助かったのは事実だし、命は何も言い返すことが出来ない。しかしキャスター、私は分かるぞ。君は面白いから痛車を選んだだけだ、君の目がそう言っている。

「その他にも、これなんてそうです」

そう言つてキャスターが指差したのは、私たちの周りを飛んでいた虫。まさか、これがそうだとでも？

「それは虫ではなく、最新型超小型ロボット『神虫X』です」

神虫X・・・なんだその名前は。・・・ネーミングセンスの無さは置いといて、このロボットがどんな力を持つというのか。私の方を見ながら、キャスターが説明を始める。

「まず最初の機能は、ビデオ能力。小型ながらに、超鮮明な映像を提供してくれます。機械ですから、魔術師にバレませんしね」

なるほど、確かにそれは有意義だ。これだけ小型で虫のようなフォルムなら、まず誰にも気づかれないだろう。以前私がランサーとライダーを襲撃した時、命たちが私たちが襲撃者だと分かったのはこれが原因なのだろう。

「次に、このロボットが数百匹集まれば、ある程度の威力までなら防ぐことが出来るバリアを貼れます。具体的に言えば、Bランクの宝具を一度なら防げますね」

これも凄い機能だ。宝具すら防げるとすれば、サーヴァントが守る必要が減る。最初に訪ねてきた時に余裕そうだったのも、これが理由か。

「他にも細かい機能がありますが・・・まあいいでしょう。これの欠点と言えば、エネルギー供給に食材を多量に必要とするぐらいですかね」

それは、食材のエネルギーを使って動いているということだろうか？つまりあの時食材が無くなっていたのは、このロボットにエネルギー供給したということなのだろう。・・・言ってしまうえば、櫂の逆鱗に触れそうだから言わないが。

「・・・つまり、君たちはライダーを囷としていたということか」
「まあ、平たく言えばそうですね。情報は戦の命ですから」

ライダーを命のマスターと誤認させ、戦ったサーヴァントの情報を手に入れる。そしてもしライダーが倒された場合、油断した所をキャスターが・・・というつもりだったのだろう。

「後はその他もろもろのハイテク機械も買いましたし、大分使いましたね。神虫Xが一匹500万円で数千匹購入して・・・あとはこれだけしか残っていません」

キャスターはまたカタカタと飛行ユニットを弄り、私にモニターを見せる。・・・いや、これだけあれば十分じゃないか？

「まあ、それはもういいでしょう。問題は、これからのことです」

今までの緩みきつた空気から、皆の顔が引き締まる。そうだ、私たちは今危機に瀕しているのだ。

「まず始めに、勢力の確認です」

そう言いながらキャスターが指を鳴らすと、新しい機械が現れる。その機械は空中に画面を表示する物で、プレゼンテーションなどによく使われる物だった。

現れた画面には、確認した全てのサーヴァントとマスターが映っている。これも、今までの情報収集の結果だと言うことだろう。

「今消えたのはライダーである関羽殿だけで、他は全員残っています」

キャスターがそう言うと、画面が変化しライダーの顔にバツ印がつく。

「そして私たちのグループには、私とアーチャー」

キャスターが手を動かし、私とキャスターが円で括られる。これでグループということだろう。

「そしてランサーが孤立し、他は全てあのアベルという者の傘下です。・・・また、アベルは何らかの能力により宝具すら扱えます」

厳しい顔をしながらキャスターがそう言うと、その通りにグループ分けされる。こうして見てみると、酷い状況だ。明らかにアベル

のグループが優勢である。

「はつきり言っておきます。もし今彼らが攻めてくれば、私たちは生き残れないでしょう」

・・・私、いや他の者だって、そのことは分かっていた。キャスターが断言することにより、それが急に現実味を帯びてくる。

「私は彼らに対抗しうる魔術を使えませんし、アーチャーは回復に2日ほどかかる・・・どうみても、負けしかありません」

ヴァルキリーはともかく、セイバーやバーサーカーに魔術は殆ど効かない。私たちが生き残れるとすれば、神殿を作って持久戦にするぐらいだが・・・向こうが総攻撃をしてくれば、それも不可能だろう。

「殆ど詰んだ局面です。ここから逆転する、唯一の展開は・・・」

キャスターが言う前に、警戒音が鳴り響く。そしてキャスターが飛行ユニットを操作し、画面に外の様子が映し出される。

そこにいたのは、高島治郎のサーヴァントであるヴァルキリーだった。彼女は一人で立っており、他に人影は無いようだ。

「・・・これは、唯一の展開が訪れたのかもしれないね」

「一応聞こう、その展開とは？」

キャスターは羽扇を扇ぎながら、ヴァルキリーを見つめる。そしてまた飛行ユニットを操作し、ヴァルキリーを中へと招き入れる。

「・・・敵の気まぐれ、悪手です」

第十七話 魔術師の策謀（後書き）

・・・書いてみたはいいが、小さな国の国家予算っていくらなんだろう？前にどっかで聞いたフレーズだったんで入れてみたんだけれど・・・

まあ、そんなこんなでまだまだ続く急展開ですが・・・次話がいつ出来るか全くの未定です！構成が難しいんだよ・・・テストも近いし・・・

とりあえず次話は、この小説の中で一番か二番くらいにエグい話になる予定。サブタイトルは『悪魔の脚本』・・・うみねこって思った人は大正解です。

第十八話 悪魔の脚本（前書き）

・・・今回は、ちょっと？強引な展開かもしれません。

第十八話 悪魔の脚本

キャスターが招いたことにより、遠坂邸の玄関が開いた。しかし、ヴァルキリーは一向に入ってこようとしない。警戒するのも当然か。普通、敵を自分から招き入れなどしないだろう。

なかなか入ってこないヴァルキリーを見かねたのか、キャスターは飛行ユニットからマイクを取り出す。そして、それに向けて喋りだした。

「ヴァルキリー、入ってきなさい。あなたも、それが目的で来たのでしょう?」

キャスターの言葉はヴァルキリーに届いたのだろう、ヴァルキリーは意を決して中へと入ってくる。キャスターはまたカタカタと機械を弄り、私たちの近くに神虫Xが集まってくる。

「一応の保険です。まあ必要ないでしょうが」

「・・・キャスター、ヴァルキリーがどうして来たのか予想がつく?」

命は少し不安そうに、モニターのヴァルキリーを眺めている。命としても、彼女が現状を打破する唯一の可能性となるかもしれないと分かっている。しかし、その内容が全くと言っていいほど分からないのだ。

「・・・幾つか予想はできますが、どれも正しいとは言えません。ヴァルキリーの話聞いた方が早いでしょう」

そう言っている間に、私たちがいる部屋までヴァルキリーがやつ

てくる。その表情は固く、警戒や緊張をしているのが見て取れた。

「ようこそヴァルキリー、私とは初めてですよね？」

「あんたは・・・キヤスターか。どうしてあんたが・・・」

「ちよつとした事情があつたのですよ。気にすることではありませんせん」

「・・・それなら、いいけどね」

「まあ、リラックスして下さい。そうでなければ、話が進みませんから」

「・・・いや、最低限の警戒は必要だろう？あかし達は一応敵同士なんだ」

「そうですか？別に私たちは、あなたと敵対する理由が無いのです」

キヤスターは本当にそう考えているように惚ける。だがおそらくは、ヴァルキリーから有利な情報を得るためにしているのだろう。本来なら、キヤスターとてヴァルキリーを警戒する筈なのだ。

「駄目ですよ？リラックスしなくては、柔軟な発想は出てきません。紅茶でも飲みながら話しましょう」

そう言いながらキヤスターは指を鳴らし、それに応えてロボットが紅茶を運んでくる。・・・この男、もしかしたら本気で警戒していないのかもしれない。

運ばれてきた紅茶をそれぞれが手に取り、ゆっくりと啜る。・・・美味しいが、まだまだだな。私の怪我が無ければ、もっと美味しい紅茶を淹れたのに。

「さて、そろそろ本題に入りましょうか」

しばらくは紅茶を嗜んでいたが、機を見てキャスターが切り出すというより、私たちは何故こんなにまったりとしていたのだろうか？最初はそんな空気では無かったと思うのだが・・・

キャスターの言葉に、少し警戒を解いていたヴァルキリーも顔を引き締める。そして、その重い口を開きだした。

「・・・・・・・・今回あたしは、あの悪魔にメッセンジャーとして送られたんだ・・・・・・・・」

「悪魔？・・・・アベルのことですか？」

ヴァルキリーがメッセンジャーとして使われるとすれば、高島治郎かアベルしかいない。そのどちらかと言えば、必然的にアベルしか残らないだろう。

「そうさ！あいつを悪魔つて言わずに何て言うんだよ？！あんなの普通の人間の考えることじゃない！！・・・・このままじゃ、ジロウも・・・・」

ヴァルキリーは非常に興奮した様子でまくし立てる。そして最後の言葉・・・・高島治郎がどうかしたと言うのだろうか。

兄の話が出たことにより、椛が動揺している。今までの流れから言って、必ず悪い話の筈だ。

「・・・・兄さんが、どうしたって言うんですか・・・・？」

「・・・・それは・・・・」

椛の問いに、ヴァルキリーは口ごもる。それほどまでに、言いにくいことなのだろうか。

「・・・話してくれませんか。あなたも、それを伝えに来た筈です」

キャスターはヴァルキリーに、今までよりも真剣な表情で促す。
ヴァルキリーも、元々話すつもりだったのが、決心がついていない
だけだったのだろう。

「・・・そのアーチャーが城から消えてから、こういうことがあ
ったんだ」

アーチャーが消えたアインツベルンの城では、アベルとセイバー
が会話をしていた。アベルが楽しそうに話し、セイバーが完全に聞
き役に徹していると言った所だ。

そしてその脇で、治郎とヴァルキリーが黙している。いやヴァル
キリーは、隣で佇んでいるバーサーカーをじっと見つめていた。彼
女に取ってヘラクレスは、一番会いたくて一番会いたくない者だっ
たのだ。

「くつくつく、楽しいとは思わんか？セイバー。やはりゲー
ムは、こうでなくてはな」

アベルは重厚な椅子に腰かけ、どこからか持ってきたワインを煽

っている。よほど上機嫌なのかもしれない。

「それはいいがな、アベル。奴らを潰しに行かんのか？」

今まで聞きに徹していたセイバーが、アベルにそう尋ねる。アベルはそれに対して更に上機嫌そうに、否定の言葉を返す。

「いやいや、まだ始まってから6日しか経っていないのだぞ？もう少し泳がせる方が楽しいだろうよ」

「・・・泳がす、か。お前はそういう所があるな。目的を前にして、わざわざ敵にチャンスを与える・・・我には理解できんよ」

セイバーは不満そうなセリフを吐くが、別に気にしているようではない。セイバーは元々、アベルにそういう所があるということを知っていたのだ。少し苦言を呈してみたただけなのである。

「理解できないか？そうだな・・・言うなれば、ルーレットに賭ける心境に似るか。

的中率の高い賭け方では、ある程度の潤いは得れるが得られる配当は少ない。逆に低くすれば、リスクはあるが多くの配当を得れる」

ようするに、アベルは樵たちにチャンスを与えることでレートを上げ、楽しみという配当金を得ようとしているのだ。結果のみを最善とする者には分らないが、理解出来る者には理解出来る考えと言えるだろう。

「・・・ルーレットか、確か前にもそんな例えをした者がいたな。的中率の低い賭けに張ることによって、奇跡が起こると信じるのだと」

的中率の低い賭けで勝利するということは、確率的に起こることが殆どない奇跡に等しい。そんなことが起これば、叶う筈のない願いだって叶うかもしれない。

「ほう？何やらその者とは気が合いそうだな。他に何か言っていないかったか？」

セイバーの話に、アベルは初めて興味深そうな顔を見せる。彼は今まで出会ったことがない、自分と同じような思考回路を持つと思われる人物の話が聞いてみたかったのだ。

「幾つか聞いたが・・・我が覚えているのは、物語の楽しみ方というやつだな」

「物語の楽しみ方？どう楽しむと言ったのだ？」

「生きてはその足掻きを愛で、死してはワタを掻き出して二度愛でる・・・だったか。この考えも、お前に共通するのではないか？」

つまりは、こういうことだ。生きている内には、生への足掻きを愛でて楽しむ。死してからは、その者の晒されたくない真実を掻き出して楽しむ。

柁たちの足掻きを楽しもうというアベルは、確かにこの考えに共感しそうだった。しかし、アベルは否定する。

「いや、私とは少し違うな。足掻きを愛でるということは同じだが、その後が違う」

アベルは椅子から立ち上がり、コツコツと音を立てて歩き出す。セイバーは無言でそれを眺め、アベルの次の言葉を待つ。

「死んだ後にワタを掻き出そうが、その者には何も関係ないのだ。

ワタを掻き出すなら、生きている内でなければならん」

アベルはくつくつと笑いながら、持論を展開する。アベルにとってそれは、自らの行動理念の一つなのだ。

「だからこそ、奴らを殺すのを先送りにしているのだ。足掻きを愛でた後でワタを掻き出し、死以上の苦しみの後に殺しきるのだよ」

そう言うアベルの瞳は、酷く狂気に歪んでいる。そしてその瞳が見抜く先には、きつとアーチャーや椀がいるのだ。

「ちょ、ちよつと待つて下さい！」

アベルの話を黙って聞いていた治郎が、聞き捨てならない話を聞いて介入する。彼としても師に物申すつもりは無かったが、流石に黙っていらなかったのだ。

「・・・なんだ、治郎」

「殺すつて、僕はそこまで求めていません！僕は、椀の上に立てればそれでいいんです！」

治郎は、椀を確かに恨んでいる。自分が苦しい時にぬくぬくと暮らして、そのくせ自分より才能に溢れる椀が許せない。

しかし、何も殺したいなどとは思っていない。この聖杯戦争で椀を下し、自分が椀より上だと証明したいだけなのだ。

「僕の八つ当たりなんか、力を貸してくれるのはありがたいです。でも、殺しまでは必要ありません！だから・・・！」

「・・・お前は、何を言っているんだ？」

「・・・え？」

アベルは本当に、治郎が何を言っているか分からなそうな目をしている。そんな目をされれば、治郎が拍子抜けしてしまうのも無理はない。

「まさかお前は・・・私がお前なんかのために、こんな事をしてい
ると思っていたのか？」

「え？違つ、え？」

「冗談はよせ、私は何故お前のような愚かな者に手を貸さねばなら
ん。私は、私のためにこそ行動するのだ」

アベルの言葉に、治郎は狼狽せずにはいられない。師は、自分の
手助けをしてくれていたのでは無かったのか？何故あんなに優しか
った師が、自分を蔑む言葉を言うのだろうか？

「じゃ、じゃあ・・・なんで、こんな・・・それに、どうして僕を
弟子に・・・」

「私の目的は、お前には理解できんよ。いや、誰にも理解されない
のかもな。それほどまでに、私の目的は狂っているのだから」

そう言いながら、アベルは治郎に近づいていく。それを見たヴァ
ルキリーは、彼らの間に割り込んだ。アベルのあまりの狂気に、己
がマスターの危機を感じたのだ。

「ジロウに、何するつもりだい！？」

「邪魔だ、ヴァルキリー。お前如きでは、私にすら勝てんよ。そこ
を退け」

アベルは、ヴァルキリーに冷たい目を向ける。そして空中に手を
翳し、数多の剣が出現した。

「きゃっ！！」

アベルが更に手を振ると、剣群がヴァルキリーを襲う。ヴァルキリーは何とかそれをかわしたが、アベルに迂闊に手を出せないのが分かった。

「さて、治郎。何故私が、お前如きを弟子にしたかだったか？」

「……はい」

「そんなもの、決まっている。お前が非常に都合がいい立場にいたから、駒にしてやろうと思った……ただ、それだけだ」

治郎はその言葉に、疑問を感じずにはいられない。アベルが自分を駒としか考えていないというのは、今までの会話からなんとなく分かった。しかし、都合がいい立場？

「分かりやすく言ってやろうか？お前が、藤村椋を家から追い出し、この聖杯戦争に参戦させることが出来る存在だったからだ」

「なっ！？椋を！？」

「お前は本当に、私の脚本通りに動いてくれた。わざわざ弟子にするために、色々と手を尽くした甲斐があったというものだ」

アベルの顔は、正に狩獵者のそれ。もはやアベルにとって、治郎は用済みの駒。いつでも捨てて良かった駒なのだ。だから最後にワタを掻き出すことで、アベルの渴きを癒やす糧とする。

「色々、手を尽くした……？」

「分からないか？お前の記憶にある矛盾……それを考えれば、すぐに分かることだろう」

「む……じゅん……」

治郎は自分の記憶を探る。矛盾、矛盾、矛盾、矛盾、矛盾、矛盾、矛盾……一体何が？

「お前は、父親に虐待を受けていた筈だな？」

「は、はい……」

「本当に、そんなことがあったのか？」

「………え」

父親からの虐待は、今の治郎を形成する要因の一つだ。アベルと出会うきっかけに、も……まさか……

「よく考えれば分かるだろう？ 私が何の理由もなく、あの場に居合わせるわけがないだろうよ」

「あ……あ、あ」

「認めたくないか？ ならば、私が断言してやる。『お前は、虐待など受けたことはない』」

バリイーン！！

治郎の頭の中で、ガラスが割れたような音が響き渡る。信じたくないが、アベルの言葉は絶対に真実だと感じてしまう。いや、本当にそれは真実なのだ。

「今の時代の安全性を舐めてはいかんよ。虐待などあれば、すぐに察知して子を保護してしまう。ニュースなどで虐待の話など、もはやないだろう？」

バリイーン！！バリイーン！！

「年齢を偽ってアルバイトをした？お前は今、一体何歳のつもりなのだ。まだ17歳だろう？私がお前を弟子にとったのが8年前・・・そんな歳の子を雇ってくれるアルバイトが、今の日本にあるのか？あるのなら、是非私にも紹介してくれよ」

バリイーン！！バリイーン！！バリイーン！！

「お前は、愚かで、才能も無く、自分を美化するのだけは一人前な者だ。・・・ふっ、私に目的がなければ、絶対に弟子などにはしなかったな」

バリイーン！！バリイーン！！バリイーン！！バリイイイイイ
ン！！！！

「あ・・・」

アベルの心を抉る言葉に、治郎の頭の中で何枚ガラスが割れたのだろうか。そんな治郎の頭の中に、本来の記憶が甦る。それはきつと、閉まっておいた方が良かった記憶・・・

両親が離婚した後、治郎は父親の方についていった。別にどちらが悪い離婚という訳でもなく、そちらの方が双方のためといった形

の離婚だったようだ。

治郎と父親の二人暮らしは最初、苦労の連続だった。父親には家事を満足にするスキルがなく、時間もあまり無かった。治郎もそんなことをする歳では無かったし、父親は大変苦労したようだ。

しかし、父親は精一杯努力した。仕事から帰ればすぐに食事を作り、部屋の掃除をし、洗濯をし・・・金に余裕が出来て、家事ロボットを購入するまでそんな生活を続けていた。

しかしそんな中でも、父親は治郎に愛情を注ぎ続けた。疲れているだろうに、治郎の遊び相手になってやり、クリスマスや誕生日には玩具を買ってやり・・・当然、虐待などある筈もない。

治郎は裕福な暮らしではないが、別に不自由な生活をしていた訳では無かった。学校には多くの友だちがいたし、自由な時間も多かった。

だがいつからだろう、治郎は現状に満足できなくなった。父親ではなく、母親の方がいいと思うようになったのだ。そして運命の日、治郎は父親に黙って母親の下へ向かう。

電車やバスを乗り継ぎ、冬木市まで一人で向かった。貯めていたお小遣いを使って、苦労しながらもたどり着いたのだ。

そしてそこで見たのは、妹である栞の姿。少し離れている間に、記憶にある彼女より大分大きくなっているようだ。綺麗な洋服を着て、花のような笑顔を浮かべている。

治郎は、栞に声をかけようとした。久しぶりに会えた彼女と、離れていた間にあった出来事を語り合いたいと思ったのだ。

だが、それは直前で考え直される。なぜなら治郎は今、彼女の前に出る勇気が無かったのだ。栞が自分を覚えているかも分からない

し、自分が何故ここにいるかを聞かれたら答えに詰まる。まさか母親が恋しくて帰ってきたなんて、妹の前で格好をつけたい治郎には言えないのだ。

そんなことを考えている内に辺りは暗くなり、椋は家に帰ってしまった。そしてどうすることも出来ない治郎も、結局何もせずに家へと帰宅していく。

家に帰ると、父親が凄い剣幕で怒ってきた。治郎が遅くまで帰らないことに不安となった父親は、友だちの家中に電話し街を駆け回り・・・むしろ怒らない方がおかしいのだ。

そして父親は遂に、治郎に手を出す。しかしそれは、驍の域を超えることはないレベル。決して、暴力とは呼べない程度の殴打だった。

だが今まで治郎は、父親に手をあげられたことがない。故にそこで、父親に対して恨みだとかいった感情が芽生えてしまった・・・

「馬鹿馬鹿しい話だな。そんな自業自得のことで、少し暗示をかけただけで優しかった父を恨み、その父を殺した私に弟子入りするのだから。本当は介入して父親を恨ませる展開を考えていたのだが、それを使うまでも無かったな」

「・・・そんな」

「ああ、お前は実に暗示をかけやすかった。私がこの方面が得意とはいえ、すぐに暗示にかかるのだから。妄想癖が強く、常に自分は悲劇のヒーロー・・・昔で言えば中二病だったか？くっくくく、はっはっはっは！！！」

治郎の心は既にボロボロだ。優しかった師匠に裏切られ、今まで自分の信じていたことが、全て否定されたのだから。

「もはや、お前は用済みだ。奴らの前に死体を晒して・・・いや、もっと面白い脚本にしようか」

アベルは、治郎のワタを掻きだしきった。そして用済みとなった治郎を始末し、その死体を柩たちの前に晒して絶望を味あわせてやるうと思っただが、直前で気が変わる。

「ヴァルキリー、お前がメッセンジャーとなれ」

「・・・どういう、ことだ・・・？」

「バーサーカーは、明日の晩には全てが元に戻る・・・戻り次第、私はバーサーカーを奴らに攻め込ませる。それを奴らに伝える」

「・・・何で、そんなことを」

ヴァルキリーには、アベルの言葉の意味が分からない。わざわざ敵に情報を与えて、何になるというのだ。

「決まっているだろう？奴らに少しでも希望を残し、そこを潰すのだ。・・・ああ、そうだ。ヴァルキリー、お前も向こうについていいぞ？その方が、まだ勝ちの目があるだろう」

バーサーカーの強さから言えば、アーチャーたちが全力で戦っても勝ち目は低い。しかも、アーチャーは負傷中・・・ヴァルキリー

しかし、少しは変わるのもまた事実。アベルはより楽しむために、少しでも向こうの勝率を上げるのだ。そして、そこを……徹底的に潰す。

「見上げた忠誠心だな、こんな者のために……だがその忠誠心があるなら、やはり向こうにつくべきだ」

「ジロウに、何を……！」

「なっ！？」

「あんたは、どこまで……！」

アベルのその言葉には、多分の嘲笑が含まれていた。やれるものならやってみろ、お前には無理だ、精々足掻いて楽しませろ？くひやっはっはっはっはっ！！！！

286

「では、向こうによりしく頼むと伝えてくれ」

最後にアベルはそう言いながら、ヴァルキリーに『破壊すべき全
ルルブレイカー
ての符』を突き立てる。これで完璧に、舞台は整ったわけだ。
そうしてヴァルキリーは、アインツベルンの城を素早く立ち去る。
早くしなければ、現界すらままならないようになってしまう。森を
走るヴァルキリーの耳には、あの悪魔の笑い声が聞こえてくるよう
だった・・・

「これで、全部だ・・・」

ヴァルキリーの話が終わり、誰ともなしに重苦しい雰囲気醸し
出す。柊は話の途中から顔を蒼白にしているし、命も苦虫を噛み潰
したような顔をしている。

「・・・つまり今あなたは、マスターがいないということですね？」

そんな中で、キャスターはいたって冷静だ。こんな状況だとして
も、必要なことはきちんと聞く。

「・・・ああ、そうだけど？」

「イリヤスフィール、あなたには今サーヴァントがいません。ヴァ

ルキリーと契約しておいて下さい。ヴァルキリーもそれでいいですね？」

「……分かったわ」

「……あたしに、拒否権なんて無いよ」

キャスターの指示により、パートナーがいない二人の契約が決定する。戦力が少しでも欲しい私たちにとって、これは必然の選択なのだろう。

「……キャスター、勝算はあるの？」

「……正直、厳しいですね」

命の問いに、キャスターは静かに答える。それは現実を見据えた、嘘偽り無い答え。私の怪我は明日の晩にはまだ治らないし、ヴァルキリーやキャスターではバーサーカーを殺す手段が殆どない。

「……ですがアベルが言うとおり、希望が無いわけではありません。アーチャーの怪我さえ癒えれば、まだバーサーカーに対抗できます」

「……私の力を買いかぶりすぎではないか？ 私に、バーサーカーを12度も殺す手段が」

「有るでしょう？ あなたの真名が、私の考えている通りだとすれば……ね」

「……」

確かに、私の『無限の剣製（Unlimited Blade Works）』ならば、バーサーカーを12度殺すことが出来る手段がある。だが……

「仮にそうだとしてもだ、私の完全治癒には2日かかる。まさか全

快で無い状態で、バーサーカーに挑めと？」

確かに全快で無くとも、明日の晩には戦える程度には回復しているだろう。しかしそんな状態で、全快でも勝てる見込みの少ないバーサーカーにかなう筈がない。

「勿論、そんなことはさせません。あなたが回復するまで、私やヴァルキリーで足止めします」

「・・・少なくとも見積もっても、私が回復するまで半日かかるが、それだけ耐えられるのか？」

「耐えるしかありません、幾つか考えもあります。・・・ヴァルキリーの能力を聞いて、その兼ね合いですね」

キヤスター、あの諸葛孔明が采配を振るうのだ。戦力さえあれば、半日程度なら保つ可能性もあるかもしれない。

「つまり、この戦いで重要なのは・・・」

「ええ、あなたが如何に早く回復するかです」

「・・・だが、私にはどうしようもない」

「いえ、気持ちの持ちようで大分差があります。あなたの心が次第で、私の策が上手くいく可能性も上がるのです」

気持ちの持ちよう、か。稀にこういう話がある。薬と偽って栄養剤を飲ませ、治療法の無い病気が治ったと。そして、早く治れと念じるのと、どうせ治らないと諦めるのでは、決定的に治癒速度が違うと証明されている。

「ふつ、最高の名軍師が、そんな不確定な要素に頼るとはな」

「不確定だろうと何だろうと、これしか道は有りません」

「・・・善処しよう」

「ありがとうございます」

キャスターは私の返答を聞いて礼をすると、すぐに目を閉じて瞑想する。おそらくは、バーサーカーとの戦闘に必要なことを考えているのだろう。

「・・・モミジ」

「は、はい。なんですか？」

しばらく考えていたキャスターが目を開けると、ようやく落ち着いてきた椛を呼ぶ。

「あなたは、この戦に参加するか否か・・・決めなければなりません」

「・・・どういう、ことですか」

「あなたは、魔術師ではない。この戦で影響があるとすれば、礼呪程度です。この戦は、礼呪を使っても勝てるか怪しい戦・・・決意無き者は、逆に足手まといです」

キャスターの言うことは正論だ。椛の礼呪があれば幾らか有利になるが、足手まといにならねば元も子もない。もしこの戦いに参加すれば、実の兄と殺し合うことになるのだ。椛にも、選ぶ権利がある。

「・・・私、は・・・」

第十八話 悪魔の脚本（後書き）

今回のボツネタ

「あの、お粥は・・・」

「お粥？あんなのよく食べたな？砂糖と塩を間違えて入れたのに」
「・・・・・・・・」

さすがにシリアスぶち壊しかな？と思って消しました。

今回は本当に構成が難しかった・・・うみねこ系の言葉入れなかったら、きつと今も出来てませんね。プロットの段階では、治郎の真実暴露と最後の辺りのことしか決まっていなかったので、どう繋げるんだコレ？的な感じでした。

あ、この話に詰まってる間に、別の作品を作って投稿してしまいました。ぬらりひょんの孫のオリ主物で、基本ギャグ路線です。良かったら見てやって下さい。

第十九話 椛の答え（前書き）

雰囲気的には好きな話なんだけど、言ってることは無茶苦茶な気がします。

第十九話 椛の答え

椛がキャスターから覚悟を問われた時より一日後、その椛は学校で授業を受けていた。あの場で答えを出すことができなかった椛は、一日考えることにしたのだ。

残っているサーヴァントから考えて、おそらく安全だということ、今日はアーチャーも傍にいない（もつとも、神虫Xが護衛しているが）。よって、椛は久しぶりに一人になったということになる。

「・・・はあ」

だが、ちつとも気は晴れない。授業は全く耳に入ってこないし、ずつと校庭ばかりを眺めている。こんなことだったら、家にいた方がマシだったかもしれない。

「・・・・・・」

そんな椛に声をかける、いや、かけられる者はいない。普段なら昨日休んだことと、命との関係について、意地悪く聞いたりする筈なのだ。それも無いということから、椛の纏っている空気の重さが分かるだろう。

「・・・椛」

そんな中、椛に声をかける者が現れた。椛にとって一番の親友と言ってもいい、綾ちゃんこと美綴綾である。彼女は椛の雰囲気につきながらも、出来るだけフランクに椛に話しかけた。

「どうした椛、辛気くさい顔して？あ、さては命先輩に振られたか

？今日命先輩来てないみたいだし・・・」

無論綾だって、椛がそんなことで落ち込んでいるとは思っていない。命と椛の関係は、普通の先輩後輩であることは分かりきっている。しかし、椛の暗い雰囲気、そんな風にしか話しかけられなかったのだ。

「そんなんじゃないよ」

だが椛は綾の気配りに対して、ぶっきらぼうに返してしまう。今日の夜には、兄の命はおるか自分の命すら関わる戦いが起こる。綾の冗談に付き合う余裕は、今の椛に全くと言っていい程ない。

「・・・・・・椛」

綾からすれば、椛の態度に怒りを覚えてもおかしくはない。せつかく自分が心配しているのに、ぞんざいに扱われたのだから。

しかし、綾は怒りなんて微塵も感じない。普段の椛ならば、こんな態度は示さない。それ程までに、椛の悩みは深刻なのだと分かる。

「・・・椛」

「・・・何？綾ちゃん」

先ほどの独り言とは違い、今度は椛に対して語りかける形で、綾は椛の名を呼ぶ。椛としても、それを無視することはない。

「椛、今日の放課後、弓道部に寄りな」

「え？」

「前に、寄れって言ったろ・・・それとも、今日も断るかい？」

「・・・・・・」

栳は考える、弓道部に寄るべきか否か。今の状況から言えば、弓道部になんて寄っている場合ではない。今夜のことについて考えなければならぬからだ。

しかし、親友が自分を心配して誘ってくれている。自分は彼女に、怒られてもおかしくない態度をとったにも関わらず、だ。それに、久しぶりに弓道をやってみれば、多少は気が晴れるかもしれない。

「・・・うん、分かった。今日は寄ってみるよ」

そして時間は過ぎ、約束の放課後が訪れる。栳と綾は揃って弓道場に到着し、弓道をするに相応しい格好に着替える。弓道をする者として、格好を正すのも作法の一つだ。

「む、栳また胸が大きくなったんじゃない？・・・ちよっと、揉ませて・・・？」

「ちよ、ちよっと、綾ちゃん止めて」

「ぐふふ。よいではないか、よいではないか」

着替え中に、綾がセクハラまがいの言動をとる。だが、実際にそうするわけではない。少しでも、栳が肩の荷を降ろせるようにとの配慮だ。

綾のそんな様子を見て、栳も次第にリラックスしてくる。別に悩みが消えたわけではない。しかし、少し楽になったのもまた事実であった。

「じゃ、まずは私から射るよ」

着替えを済ませて射場に移動し、それぞれが慣らした後に、綾がそう言つて的を狙う。その構えは美しく、栞の知らない内に随分と上達したようだった。

綾は静かに息を吐き、完全に集中する。綾の世界には、もはや自分とのしかない。いらない雑念を全て消し、的を目掛けて矢を・・・放つ。

「・・・と、こんなものかな？」

「・・・凄い、綾ちゃんいつの間に・・・」

綾の射は、完璧に的のど真ん中を射抜いていた。栞が知る限り、綾は一発でそんな芸当は出来なかった筈だ。それが、栞が来ていない少しの間にここまで・・・栞が驚いたのも無理はない。

「ちよつとある人に手ほどきをね・・・さ、次は栞が射な」

「・・・うん」

綾に促され、栞も的を射抜くために集中する。息を深く吸い、視線を的にだけ向ける。そしてそのまま狙いを定め、的に向けて矢を放った。

「あ」

「・・・」

栞が放ったその矢は、的に当たつてはいても、中心からは程遠い位置に刺さっていた。栞の普段の実力なら、ブランクがあつてもそ

んなミスはしない。

「・・・やっぱりね。今のあんたなら、絶対にこうなると思ってたよ」

「・・・綾ちゃん」

「何を悩んでるのか知らないけどさ、そんな乱れた心じゃ、中るものも中らないよ」

弓道とは、技術もそうだが精神が重要なウエイトを占めてくる。椀の今の精神状態では、普段の力の半分も出せているか分からなかった。

「椀、私は頼りないか？」

「そんなこと・・・」

「だったら！少しは相談しな！・・・私たちはさ、親友だろ？」

「綾ちゃん・・・」

椀の心は揺れ動く。ここで綾に相談すべきなのではないか、いい案を出してくれるかもしれない。しかし、相談すべきではないとも思ってしまう。これは、自分で解決すべきことなのだと。

「・・・あなたは、一人で溜め込みすぎよ」

椀が迷っている時、綾と椀以外の第三者の声がした。その声は、椀がよく知っている人物の声。

「お母さん！？」

「久しぶりね、椀。あなた、家に顔出さないんだから」

その声の主は、椀の母親である藤村堇。弓道着に着替え、椀を憐

然と見据えている。

「え？え？なんで、お母さんが？」

「大河おばあちゃんが今旅行中でしょ？それで暇になったから、綾ちゃんに頼まれた弓道部の仮顧問やってあげようと……」

董は普段家事のかたわら、既に軽く百歳を越えている藤村大河の話し相手をしている。その大河は今、全国を旅して回っていたりする。大河曰わく、『生涯現役！まだまだやっつたるぜ！』らしい。もうすぐ人類最高齢に達するというのに、実に元気なことだ。

「聞いてないよ……」

「会ってないのだから、当然でしょう？」

椈は聖杯戦争が起こったことなどもあり、結局家を出てから一度も顔を出していない。その間に弓道部の仮顧問になったのだとしたら、確かに聞いてないのは当然である。

「椈が出て行ったっていうのに、その原因の治郎も二、三日前にふらっと出てったきり帰って来ないし……まったく、もう！」

要するに、董は寂しいのだ。普段の話し相手の大河も今はいないし、子ども達も家に帰って来ない。そんな時の綾の依頼は、董にとつて渡りに船だったと言えるだろう。

「……兄さん、帰ってないんだ」

椈は治郎が家に帰っていない、いや帰れない理由を知っている。それが今の悩みなのだから、当然だ。そして董の言葉で、それが椈の心にまた重くのしかかる。

「そうよ・・・まあ、すぐに帰ってくると思うけど」

董としては、治郎が帰って来ないことにそこまで心配していない。今までも帰って来ないことは何度かあったし、それが数日続いているだけなのだ。

「治郎のことは置いて、今はあなたのことよ」

「・・・うん」

「話してご覧なさい。役に立てるかは分からないけど、話せば楽になることもあるわ」

「そうだよ、椛。私も、一緒に考えてやるから」

「・・・お母さん・・・綾ちゃん・・・」

二人の言葉に、椛は彼女たちに相談することを決める。しかし、全て本当のことを言うわけにもいかない。話すことを取捨選択して、それで自分の悩みを打ち明けることにした。

「・・・私ね、今ちよつとしたゲームに参加してるの。パートナーと組んで、7チーム対抗戦のサバイバル。・・・まあ私は、成り行きで参加したんだけど」

「・・・それで？」

綾は椛に続きを急かす。椛が重要なところをぼかしているのは、綾にも董にも分かっている。しかし、椛がほんの少しでも話そうとしてくれているのだ、話してくれることは全て聞いてやりたい。

「そのゲームで、今ちよつとしたピンチになってるの。一番強い人が、私たちのチームに攻め込んで来てて」

「・・・」

「その戦いで、私は少しは力になれる。・・・けど、同盟を組んでる人から『覚悟が無いなら足手まとい』って言われて・・・」

椋の話は、本当にただ要点だけを押さえたもの。違和感が多々あるし、重要なことを言っていないから、具体的なアドバイスなど出来る筈もない。

「・・・椋、少し昔話をしようか」

それでも、董は母親として椋が抱える何かを感じる。だからこそ、自分の出来ることをするのだ。

「昔話・・・？」

「そう、桜おばあちゃんの昔の話・・・」

董は目を閉じて、自分の語るべきことを思い起こす。その話は、椋の曾祖母であり董の祖母である藤村桜の話。

「桜おばあちゃんは元々、藤村じゃなくて間桐つてところの養子だったの」

「・・・うん、知ってるよ」

「でも、なんで藤村の家に来たか知らないでしょう？」

そう、椋もそのことには疑問を持っていた。どう考えても、おかしい話だ。

「・・・おばあちゃんはね、間桐の家で虐待を受けてたの」

「・・・噓、おばあちゃんが・・・」

「毎日毎日つらい目にあって、最終的には本当に絶望してしまったそうよ」

椛としては、信じられない話だ。自分はよく祖母のことを知っているが、とても明るい人物だった。そんな暗い過去を、微塵にも感じさせたことはない。

「でも、本当のお姉さんの遠坂凜さんと・・・衛宮士郎さんに救われたらしいわ」

「・・・」

「その時に差し出された手が温かくて・・・なんで自分は、最初から手を伸ばせなかったんだろうって言ってた」

絶望の底にいた桜にとって、凜と士郎のさし伸ばされた手はどれほどの救いになったことだろう。きっと、地獄から天国に登るようなものだっただけだ。

「その時、思ったらしいわ。今度は自分が救ってあげたいって・・・でも」

「でも？」

「士郎さんが、正義の味方を目指して世界を旅したの」

「・・・正義の・・・味方・・・」

正義の味方、この言葉が椛の頭に引っかかる。それは最近、どこかで聞いた言葉の筈・・・

「士郎さんは、自分の身も省みずに人を救っていたらしいわ。・・・時には人道に反することもある。それであなたの知っている通り、最後には、ね」

「・・・そんな」

「桜おばあちゃんね、そこで後悔したの。なんで自分は、先輩を救うために手を伸ばさなかったのかって」

桜が士郎を救おうとしても、おそらくは無駄だっただろう。しかし、行動すれば未来は変わっていたかもしれないのもまた事実。

「だから、あの家を守っていたの。もう、行動しなくて後悔するのは嫌だから」

「そう、だったんだ・・・」

士郎のことは、桜のせいなどではない。しかし、桜は自分の責任でもあると考えたのだ。故に、もう二度と後悔したくない。士郎の家を、奪われて後悔したくない。

「あなたも、後悔しないようにしなさい。行動しなくて後悔するより、自分が信じることをやってみなさい」

「自分が、信じること・・・」

桜は自分の心を省みる。自分の本心は、一体どうするべきと言っているかと。

「はあ、言いたいことは殆ど言われちゃったね」

「綾ちゃん・・・」

「あんたの心は、あんたにしか決められない。でも私たちも、その後であんたを支えることが出来る。助けが欲しかったら、いつでも私たちを頼んな」

綾はそう言いながら、桜に弓を渡す。桜はすっきりとした表情でそれを受け取り、的に向けて集中する。そして狙いを定め、真っ直ぐ矢を放った。

「・・・お見事」

「迷いは晴れたみたいね」

椀の放った矢は、綾が的的中させていた矢を裂いて刺さっていた。それは曇った心では、絶対に出来ない芸当だった。

「・・・ありがとう。綾ちゃん、お母さん。私、決めたよ」

椀は最後にお礼を言った後、そのまま弓道場を後にする。その顔は、とても晴れやかだった。

「・・・弓道着のまま行っちゃったよ」

「ごめんなさいね、後で洗濯して返させるわ」

「いえ、別に困るわけではないんで・・・椀も、吹っ切れたみたいですよ」

椀がいなくなった後の弓道場では、綾と董が苦笑しながら談笑している。彼女たちも、椀にいい影響を与えられたようなので嬉しいようだ。

「でも、いいんですか？椀、まだ何か隠してるみたいでしたけど・・・」

「いいのよ、そうやって自分で成長してくれるのはいいことよ・・・きつと」

「・・・きつと、ですか」

「ええ、きつとね」

最後は何か締まらなかったが、董は椀なら大丈夫だと信じているのだ。二人はその後、いつも通りの練習を始めた・・・

場面は移動し、夕闇に染まる遠坂邸。 柊を抜いた彼らは、今晚のことについて協議していた。

「・・・キヤスター、君は何故柊に覚悟を問うた？」

「・・・言った通りですが？」

「嘘だな、君は利用出来るものは利用する側の者だ。 令呪がある柊は、必ず欲しい筈だろう？」

キヤスターの頭脳なら、覚悟が有ろうと無かろうと、柊を足手まといにならない程度には使える筈。 確かに柊の気持ちも大事だが、勝利には代え難い筈だ。

「・・・確かに、令呪があれば多少有利になるでしょう。 しかし、モミジがいては出来ないこともあります」

「・・・高島治郎か」

「ええ、そういう選択を採らなければならぬ時がくるやもしれません」

そういう選択とはつまり、治郎を犠牲にするということだ。 出来る限りは生き残らせるが、どうしてもという時があるのだ。 いざその時になって、その選択肢がないというのは困る。

「故に、たとえすぐに参戦すると言っても止めていました。 そんな

薄っぺらい覚悟では、足手まとい以上に足手まといですから」

「・・・それを、すぐに選ばないのが椋だな。彼女は、きちんと自分の立場を分かっている。悩んだ末に、一番の答えを出すだろう」
「ええ、でしょうね。私としても、彼女にはじっくりと考えて欲しかったですし」

「・・・あんだ達、治郎を犠牲にする前提で話してるのね」

キャスターとアーチャーの会話に、命が少し不満げに割って入る。命とて治郎を犠牲にすることに迷いはないが、椋の兄であり自分の幼なじみは出来るだけ救いたかった。

「・・・想定される展開全てを考えるのが、軍師の勤めですから」

「・・・実際、その可能性は高いだろうしな」

「そう・・・椋は、泣くかしらね」

「さあな、私には分からんよ。一つ言えることは・・・私たちが勝たねば、この話に何の意味も無いということだ」

アーチャーの言葉に、皆の空気が更に重くなる。アーチャーの言う通り、勝利出来なければこの話に何の意味も無いのだ。

「・・・モミジが帰ってきたみたいよ。・・・何故か弓道着だけど」

そんな重苦しい空気の中、外を見ていたイリヤスフィールが椋の帰宅に気付く。キャスターの操作により玄関が開かれ、椋はすぐに部屋に入ってくる。椋の息は荒く、学校から急いで帰って来たのが分かった。

「・・・答えは、出ましたか」

「はい。私は、逃げません」

「・・・その覚悟は、本物ですか？兄や自分の命がかかっています、

半端な覚悟なら」

「私は死にませんし、兄さんも殺させません」

キャスターが椀の覚悟を問おうとするが、その言葉を遮って椀が宣言する。その目に迷いは無く、絶対の決意が滲んでいた。

「・・・あなたがそう決意するのは勝手です。しかし、現実は無情・・・あなたの力では、それらを達することは出来ないでしょう」

いくら椀が覚悟したからと言って、椀の力になれることは殆どない。結局のところ、椀の意思は大して関係ないのだ。

「確かに、私の力じゃ殆ど何も出来ません。だから、キャスターさんやヴァルキリーさん、それにアーチャーの力を貸して欲しいの」

「・・・他力本願ですか？」

「それを言われたら、そうですね・・・でも、私に出来ることは全部やります！だから・・・！」

私も、この戦いに参加させて下さい・・・椀の意思は示された。これでは、キャスターやアーチャーの対応次第。

「・・・椀、君のそれは理想論だ。君や私たちが全力でも、バーサーカーに勝てるか怪しい・・・結果として、全滅する可能性が高いだろう。それでもいいのか？」

「それは可能性の一つ、私はそれをさせないために参戦するの・・・後悔しないために」

椀のその言葉に思うところがあったのか、そのままアーチャーは黙ってしまふ。そして椀は、キャスターに是非を問う。

「・・・キャスターさん」

「・・・私としては、戦力になってくれるのなら歓迎ですよ。あなたの働き、期待させていただきます」

こうして、椀の参戦が認められた。椀が選んだ道は茨道、進んだ先があるかも分からない未開の道。

それでも、椀はその道を選ぶ。・・・その先に、自らが求めるものがあると信じて。

「・・・では、今晚の案配を説明します。この話が終われば、マスター達は仮眠をとるように」

椀の件が終了し、キャスターはすぐさま今晚の策を語る。天下の大軍師、諸葛亮の策。それは図に乗るや否や・・・

第十九話 椛の答え（後書き）

大河なら100歳超えようと、普通に生きてる気がするのはいれだけじゃない筈。

第二十話 決戦の開幕

「ふむ、こんなものか」

アインツベルンの城で、高島治郎は自分の体を眺めながら言う。いや、彼はもう治郎ではない。魔術によりその体をアベルに奪われた、ただの操り人形だった。

「治郎、見えているか？これからお前の体でシヨ―を始めてやる、特等席でゆつくりと眺めるがいい」

治郎の意識は、体を奪われながらも完全に残っている。その口はアベルの言葉を喋り、その体はアベルの意のままに動くが、彼は治郎自身なのだ。

どれだけ足掻こうとも肉体は言うことを聞かず、目を逸らそうとしても、その目はアベルの見るものを映す。自分の体でしたくもないことをされるなんて、それはどれほどの苦痛を与える拷問なのだろうか。

「バーサーカー、もう全て戻っているな？」

治郎、いやアベルは、傍らに控えていたバーサーカーに確認をとる。アベルとて戻っていることは分かっているが、これもまた形式美というやつだ。

「よし、ならば結構」

バーサーカーの咆哮により、最後の確認をし終えたアベルは、バ

「サーカーの上に飛び乗る。彼らはこれより、柵たちの蹂躪に向かうのだ。」

「……さあ、狩りの時間だ」

その言葉を最後に、アベルとバーサーカーは城を発つ。この狩獵の顛末は一体どうなるか、今は誰にも分からない……

アベルを乗せたバーサーカーは、森を抜けて街に辿り着く。今は大体12時を回るか回らないかと言ったところなので、彼ら以外に人影はない。もっとも、いたところでアベルには関係ないが。

アベルは治郎の体で、心地よい夜風に当たる。その顔は非常に愉しげで、機嫌が良いことが分かる。あるいは今日にも、積年の願いが叶うのだから当然なのかもしれないが。

「……さて、奴らはどこにいるかな？流石に、籠城戦などといった下策は使わまいが」

アベルは、命のサーヴァントであるキャスターの存在を知らない。故に、籠城戦という選択肢がないと判断する。バーサーカーに対抗する手段が、彼らには一つも無いのだから。

実際はキャスターがいるため、上手くやれば籠城戦というものもあるかもしれない。しかし、奇しくもアベルの考えと同じく、籠城戦を選ばないのだが。

アベルとバーサーカーはとりあえず、元衛宮邸の藤村家別宅に向かう。彼らがいる場所としては、そこが遠坂邸ぐらいしか無いのである。

藤村家別宅まで歩いてあと10分もかからない地点まで来た時、アベル達の前に一組の主従が姿を現した。アベルとしては、この展開は少しばかり予想外だった。

「……さてさて、何故にお前たちが私の目の前に現れたのかな？」

アベルは多少見下しながら、目の前の彼女たちに問いかける。バーサーカーに対して、対抗出来る者たちとはとても思えない。それ故に放たれた、ある意味当然の問いだった。

「……ジロウの体で、ジロウの声で、そんな顔するんじゃないよ。気持ち悪くて虫ずが走る」

アベルの前に立っている主従……ヴァルキリーとイリヤスフィールの内、ヴァルキリーがアベルにそう吐き捨てる。

治郎は、基本的には優しい性格をしていた。それを知っているヴァルキリーとしては、今の彼の姿には違和感が覚えない。

「……それはすまない、何分癖になっているものでな。だが、私の質問には答えてくれないのかな？」

「はっ、そんなもん決まってる……ジロウを返してもらっよう！」

ヴァルキリーはアベルを指差しながら、きつい表情で宣言する。

アベルは、言うなれば『はいはいどうぞ勝手に』という感じで涼しい顔をしている。そんな姿もヴァルキリーを苛つかせるのだが、アベルはどこ吹く風だ。

「・・・さて、ならば何故その人形はここにいるのかな？」

ヴァルキリーを無視して、アベルは無言のイリヤスフィールに問いかける。彼女のことを人形と称するのは、アベルはイリヤスフィールがホムンクルスであることを知っているからだ。勿論イリヤスフィールは、アベルのそんな言葉に気分を害するほど子どもではないが。

「・・・・・・・・バーサーカー」

イリヤスフィールはアベルに一瞥をくれた後、自分の元サーヴァントを呼ぶ。その声は脆弱で、今の彼女の心境としては、藁にすぎる溺れた者のようなだろう。

「・・・・・・・・」

バーサーカーは、イリヤスフィールのそんな呼びかけを受けても何も反応しない。今のバーサーカーは既にイリヤスフィールのサーヴァントではない、故に返答など出来るはずも無い。

「・・・・・・・・ねえ、バーサーカー・・・」

イリヤスフィールはよろよろと、バーサーカーの下へ歩み寄って行く。その様子はまるで、まだバーサーカーが戻ってくると信じているようだった。

「・・・やれ、バーサーカー」

近づいてくるイリヤスフィールを見下したアベルは、バーサーカーにそう静かに命令した。彼にとっては、イリヤスフィールの行動は全く理解出来ないのである。

「――！！！」

「ちっ、何やってんだ！」

バーサーカーがイリヤスフィールに危害を与える前に、ヴァルキリーが彼女を救い出す。ヴァルキリーはアベルの方をもう一度見た後、イリヤスフィールを抱えたまま逃走を始めた。

「つたく、あんたにあんな事されたら作戦が台無しだろうが！」

「・・・しょうがないじゃない」

「何がしょうがないだ！」

イリヤスフィールとヴァルキリーは言い争いをしながら、バーサーカーとアベルから距離をとる。アベルは蔑んだ目でそれを見据えた後、バーサーカーに彼女たちを追うように命じた。

「どんな策かは知らないが、実行する前に潰せば同じだ」

アベルとしても、バーサーカーが彼女たちに倒されるとは思わない。しかし、無駄な抵抗をされるというのは面倒くさい。そして何より、希望の策を潰してやるのが楽しそうなのだ。

バーサーカーはアベルを落とさないようにしながら、ヴァルキリーたちを追いかける。バーサーカーは巨体の割にとっても素早く、彼女たちとの距離をぐんぐんと詰めていく。

イリヤスフィールと契約した今、ヴァルキリーの力は治郎と契約していた時よりも上がっている。それにもかかわらず速さで劣るのだから、バーサーカーの実力がよく分かった。

「くっ、ヴァルキリー！もっと早く走れないの！？」

「これでも精一杯だ！奴が速すぎるんだよ！」

ヴァルキリーは実は、もう少しスピードを上げることが出来る。しかし、イリヤスフィールを抱えて本気で走るのは危険なのだ。故に、思うように走れない。

だがバーサーカーは、アベルを乗せつつも速度がある。アベルは実際は治郎であり、いくら体が傷つこうともアベルには関係ない。だからこそ、多少危険な速さで走ることが可能なのだ。

ヴァルキリーは、出来るだけ曲がりくねった道を走る。そうすればバーサーカーのスピードを抑えることが可能だし、上手くいけば撒くことが出来るからだ。

しかし、バーサーカーもそこまで甘くない。確実に彼女たちについて行き、距離を次第に縮めていく。

あと幾ばくもすれば、バーサーカーがヴァルキリーに追いつく。そんな時に、アベルはようやく違和感に気づいた。

「・・・ここは、先ほども通った場所だ」

今彼らがいる場所は、アベルにとっては見覚えがある場所だった。後ろに走り抜けていった景色の中に、この場所があったことを覚えている。それに今思い起こせば、ずっと同じ所を回っていた気がしてきた。

「止まれバーサーカー、何かが変だ」

アベルの指示で、バーサーカーはその場に停止する。アベルは周りの状況を確認し、ある事実気がついた。

「これは・・・結界か？・・・いや、結界というよりも迷宮と言っべきか・・・」

そう、アベルたちはいつの間にか、巧妙に隠された迷宮に閉じこめられていたのだ。しかも、どこからどこまでが範囲なのかも分からない、とても大きな迷宮である。

「なるほどな、実に上手いやり口だ・・・このようなことが出来るのは、キャスターぐらいなものか」

アベルは敵側の勢力の追加を理解し、見ることが叶わないキャスターを睨む。その顔はまるで、挑戦者を打ちのめそうとする王者のようだった。

「・・・かかりましたね」

アベルがいる場所から少し離れた地点にて、事の成り行きを見守

つていたキャスターがそう呟く。今のところは、彼の当初の作戦通りだった。

「これぞ、我が宝具の一つ『石兵八陣』……簡単には抜け出せませんよ」

アベル達が誘い込まれた迷宮……それはキャスターの言う通り、彼の宝具の『石兵八陣』である。

三国志などの逸話の中に、幾度か八門禁鎖の陣というものが出てくる。これは「休・生・傷・杜・景・死・驚・開」という八門を陣形に作るというものだ。「生、景、開」から入れば吉、「傷、休、驚」から入れば必ず障害をこうむり、「杜、死」から入れば必ず滅亡するという。

そして孔明の『石兵八陣』だが、これはその八陣を応用したものだ。三国志演義によると、夷陵の戦いで呉に敗れた蜀漢軍は呉の追っ手にあっていた。その時に、この『石兵八陣』が活躍することになる。

呉の將軍陸遜はこの石兵八陣を見つけ、その中に入っていく。それはただ単に石を高く積んであるだけで、大したものではなかった。しかし、陸遜がこの陣を出ようとすると、どうにも出口が見つからない。

そう、『石兵八陣』は出口を知らない限り出ることが叶わない。この時陸遜は運良く出口を知る者に助けてもらったが、そうでなければ確実に死んでいた。それほどまでに、強力な魔術による陣だったと言えるだろう。

「助かりましたよ、ヴァルキリーにイリヤスフィール」

キャスターは振り返って、役目を果たした彼女たちをねぎらう。

イリヤスフィールは涼しい顔をしていて、ヴァルキリーは少しげんなりしているようだった。

「まったく、あとちよつとで追いつかれそうだったじゃないか」

「その時はちゃんと助けていましたよ」

「・・・どうだかね、ギリギリでも何もしなかったくせに」

ヴァルキリーはジト目でキャスターを睨むが、キャスターはそんなことは気にしない。彼にとっては、もうそんなことは関係なかった。ただヴァルキリー達が、アベル達を『石兵八陣』に誘い込んでくれたという結果があればそれで良かった。

『石兵八陣』は罠のようなタイプの宝具であり、敵が入ってくるのを待たなければならぬ。だが、敵がちゃんと望み通りに動いてくれる保証などない。

そこでキャスターは、ヴァルキリー達を罠に使った。策を匂わせておびき寄せ、手はず通りに死門に誘い入れたのだ。

「こうなれば、ある程度の時間稼ぎは出来ます」

「・・・だったら、もう何もしていいんじゃないですか？」

キャスターの言葉に、今まで黙っていた桜が問いかける。出られない迷宮に閉じこめたならば、もはや手を加える必要はないと思うのは道理である。

「いえ、ああいうものは得てして力技に弱いもの・・・時間をかければ壊されてしまいます」

キャスターは首を振りながらそう答える。どんなに優れたものでも、圧倒的な暴力にはかなわないのだ。

「・・・じゃあ、あれは本当に時間稼ぎだけのものなんですか？」

「いえ、それも違います。戦に勝つには「天地人」が重要なのです」

「・・・天地人？」

椛は首をかしげながら、その言葉の意味を考える。どこかで聞いたこともある気がするが、覚えていなかった。

「天の時すなわち、戦を仕掛けるに良い時・・・要するにタイミングです」

戦においてタイミングが悪ければ、どんなに強力な軍でも敗れてしまう。日本の桶狭間の戦いなど、正に天の時を得た勝利と言えるだろう。

「次いで地の利、その場の状況を有利に使う・・・『石兵八陣』ならば地の利を十全に活用出来ます」

アベル達が『石兵八陣』にいる今、彼らの行動をキャスターはある程度操れる。行く先を上手く誘導出来るし、更なる罠にかけることも可能だ。

「最後の「人」っていうのは何なんですか？」

「それすなわち人の・・・皆が協力することが大事というわけです」

キャスターの話を聞いた椛は、更に気を引き締める。人の和というものに、自分も協力的一端を担うべきだと考えたからだ。

「ということで、次の策に移ります。頼みますヴァルキリー」

「分かった」

キャスターの指示を受けたヴァルキリーは、彼らから離れてアベ
ル達の方へ向かう。次の策は、彼女の力にかかっているのだ。

「・・・これで、アーチャーが戻ってくるまで保てばいいのですが
ね」

「そういえばキャスターさんって、なんでアーチャーの正体がか
つたんですか？能力を見たからですか？」

キャスターはこの作戦を立てる時、アーチャーの正体を前提にし
て立てていた。それはつまり、アーチャーの正体を完全に見破って
いたからであろう。

「いえ、アーチャーの真名はミコトの話を聞いてすぐに見当がつき
ました。能力を見て、更に確信しましたが」

「遠坂先輩の・・・話？」

「・・・私が聞いた状況でサーヴァントを召喚した際、出てくるの
は十中八九彼なのですよ」

「・・・それは、どういう」

桜は、アーチャーが召喚されたのは偶然だと思っていた。しかし、
偶然によって呼び出されるサーヴァントはいない。つまり、アーチ
ヤーが呼び出されたのは必然だったのだ。

「考える必要はありませんよ、大したことではないですから。それ
よりも、今は戦線に集中するべきです」

キャスターにそう言われ、桜は宙に浮かぶモニターを見る。その
モニターにはバーサーカーと治郎の姿をしたアベル、そしてそれを

見下ろしているヴァルキリーが映っていた。

キャスターからの指示の場所にたどり着いたヴァルキリーは、その視界に再びバーサーカー達を入れる。彼らはまだ動いておらず、『石兵八陣』について検討しているようだった。

「・・・ここからが本番つてわけだね。あたしをなめたことを、後悔させてやるよ」

ヴァルキリーはそう決意した後、自らの宝具を発動させる。それは彼女自身であり、彼女達自身の宝具。

「行くよ、『戦乙女の部族』^{アマソネス}」

第二十一話 戦乙女の部族（前書き）

初めに謝っておきます、今回は本当におかしいです。長い間放置
しといて、これはないだろ・・・って思っただんですが、生暖かく見
てやってください。

第二十一話 戦乙女の部族

「・・・ヴァルキリー、結局あなたの真名は何なんですか？」

時間はアベル達が攻めてくる半日ほど前、椛がまだ学校にいる頃に遡る。作戦を立てるにあたって、キャスターはヴァルキリーの真名を聞いていた。

「あたしの真名？あんだだったら予想ついてんじゃないか？」

「一つの仮説として、一人の女性が思い浮かんでいます。・・・しかし、その者は英霊となるような者ではないですから」

キャスターは今までのヴァルキリーの行動や発言から、ヘラクレスに係わりが深い者だと推測した。ちょうどそれにぴったりの者がいるのだが、その人物は、英霊となるほどの知名度も功績ももっていないかった。

「・・・いいから言ってみな、多分それで合ってるから」

ヴァルキリーはやれやれと漏らしながら、キャスターを促す。キャスターは少し思考した後、自分の推測を語り出した。

「バーサーカー・・・つまりヘラクレスは、罪を償うために12の試練を受けました。その中で、アマゾネスのアレースの帯を取ってくるというものがありません」

アマゾネスの集落についたヘラクレスは、最初は無理やり奪おうとするが、思い直してアマゾネスの女王に交渉する。するとその女王はヘラクレスの予想に反して、快くその帯を渡してくれたらしい。

その理由としては諸説あるが、その女王はヘラクレスに対して好意的な態度だったことには間違いはない。その後誤解により、その女王はヘラクレスに殺されてしまうのだが。

「つまりあなたの真名は、アマゾネスの女王ヒッポリュテではないか・・・と考えました」

キャスターは探るように、自らの考えを締めくくった。ヴァルキリーからすれば、隠すことではないので、そんなことをする必要はないのだが。

「点数つけるとすれば、95点つてとこかね」

「・・・残りの5点はなんですか？」

「あたしの真名は、そのままアマゾネスなのさ・・・精神つてのは、ヒッポリュテーだけだね」

ヒッポリュテーという人物は、知名度も低く、功績というものが大してない。いや、アマゾネスに属する人物は殆どそうだろう。

しかし、アマゾネスという部族の知名度は高い。故に、アマゾネスという英霊が生まれた。つまりヴァルキリーというサーヴァントは、アマゾネスに属する者の集合体であり、その代表として選ばれた精神が、ヒッポリュテーだったという訳だ。

「ああ、なるほど。要するにアマゾネスという名前だけでも、結局はヒッポリュテーというわけですか」

「まあ・・・大まかに言えばね」

平たく言えば、大体キャスターの言う通りである。ヴァルキリーの真名はアマゾネスであり、ヒッポリュテーなのだ。

「・・・もしかして、あなたの胸が残念なことになっている理由もそれですか？ アマゾネスの女性たちは、弓を射るために胸を削ぎ落としたと言いますし」

「これは地だ！！ 悪かったね！！」

「悪くはないですが・・・やはり女性は胸が大きいほうが、ね」

キャスターはものの凄く残念そうに、溜め息混じりにそう言った。キャスターは公私をわきまえて発言するタイプの性格で、真面目な話の時は冗談を言わないのだが、ついに我慢でなくなったといったところか。ヴァルキリーにとってはいい迷惑だが。

「・・・まったく、今回の聖杯戦争関係者の女性たちの中で巨乳なんて、モミジただ一人じゃないですか。誰かの作意を感じますね」

「そんなの感じるのはあんだだけだよ！！」

「何を馬鹿なことを・・・この世で一番愚かなのは、考えることを放棄して巨悪に屈すること・・・そうは思いませんか？」

「あんたは一体何と戦ってんだい！？」

この状況において、キャスターは凄く快感を得ていた。だってそうだろう？ ストレスが溜まっていた時に、力いっぱいツツコミをさせられるのだ、DS属性にとっては楽しすぎる。

「・・・ねえキャスター、ヴァルキリーを弄りたいのはいいいけど、先に話を済ませましょう？」

今までヴァルキリーとキャスターの話し合いを聞いていたイリヤスフィールは、何故か逸れていった話を引き戻しにかかった。まあイリヤスフィールもDS属性なので、ヴァルキリーを弄るのには賛成なのだが。

「ちつ、・・・こほん、そうでした。話が逸れていましたね」

「舌打ちしたよ、こいつ」

「まあ、それはそれとして・・・ヴァルキリーの宝具を教えてくださいませんか」

そう、今一番重要なのは、ヴァルキリーが持っている戦力。ヴァルキリーの真名がアマゾネス（ヒツポリュテー）だからといって、その能力は分からない。アマゾネスだとかヒツポリュテーだとかいった人物たちに、宝具と呼べる伝承をもつ武器は無いのである。

「あたしの宝具は・・・あたし（アマゾネス）自身だ」

「・・・詳しく、教えてもらえますか」

「あたしが持つてるアレースの帯・・・これはアマゾネスの女王の証。要するに、アマゾネスの支配権だ」

「なるほど。つまりは、アマゾネス本来の姿に戻る・・・と言ったところですか」

キャスターが出した答えに、ヴァルキリーは何で分かるんだといったような顔で頷く。キャスターが理解できたのは、まあキャスターがそれだけ優れていると言ったところか。

ヴァルキリー・・・アマゾネスの宝具『戦乙女の部族』アマゾネスは、アレースの帯によって、ヴァルキリーが自分自身を最大限に活用するといふもの。

それは自身の力を高めることも出来るし、彼女の本来の形 要するに、アマゾネスの女性たち一人一人 に戻ることすら可能なのである。ただし、出来ることはマスターの魔力量にかかっているが。

「では、イリヤスフィールがマスターとなったことで、あなたの力

は最大限発揮出来るというわけですね」

イリヤスフィールの魔力量は、全世界の中でもトップクラスと言っている。マスターの魔力量で出来る範囲が変わるということは、それだけ有利になるということである。

「当然ね、私がマスターなんですもの」

イリヤスフィールは少し嘲るように、上から目線でそう言う。彼女にとってそれは当然であり、言われるまでもないことなのだ。

「・・・でも、あたしの宝具じゃ、ヘラクレスに傷なんて付けられないよ？」

ヴァルキリーの宝具『戦乙女の部族』^{アマソネス}は、簡単に言えば自分の仲間を増やすような宝具（しかもそれらは、サーヴァントの中で最下層の強さ）。それは当然Aランクの威力の攻撃が出来る筈もなく、『十二の試練』^{十二の試練}の鎧は超せない。

「それに関しては無問題です。^{モウマンタイ}私は軍師、諸葛孔明・・・兵さえあれば、ね」

諸葛孔明であるキャスターの本来の領分は、魔術師ではなく軍師。兵士を手足のごとく使い、寡兵をもって強敵を倒す者。ヴァルキリーの能力は、キャスターにとっては一番欲しかった能力と言ってもいいのだ。

「ちいつ！ 何をワラワラと」

時間は戻り、2月11日金曜日の深夜1時。アベルとバーサーカーは、ヴァルキリーが生み出した大量のアマゾネスの対応をしていた。

ヴァルキリーの『戦乙女の部族』アマゾネスは、本来そこまで人数を増やせない。例えば治郎なら、せいぜい100人程度を一时间も保たないだろう。

だが、イリヤスフィールは桁が違った。数え切れないほどのアマゾネスを、まだまだ余裕をもって使役している。それほどまでに、彼女の能力が優れているのだ。

「はっ、どうした？ こんなに美女たちに囲まれて嬉しくないかい？」

「ふん、私を満足させたいのなら、その残念な胸をなんとかしろ」
「あんたまでそう言うのかい！！」

キャスターにあれからも散々弄られたヴァルキリーは、敵であるアベルにまでそれを言われ、大声でツツコんだ。戦闘中だということに、緊張感のないことだ。

「そうっすよ、女王。やっぱり女は胸がでかくなきゃ」

「そこ！ 黙れ！！ お前だつてそこまで大きくないだろう！！」

『でも女王よりはデカいっすし』

『戦乙女の部族』アマゾネスによって呼び出されたアマゾネスの内の一人と、

元々のヴァルキリーが口喧嘩　というよりは冷やかかし？　をしている。彼女たちはそれぞれに意志があり、それぞれに能力が違う。故にこそ、この口喧嘩である。

こんな口喧嘩やらをしながらも、ヴァルキリーたちはバーサーカーを翻弄している。ちょこまかと動いて狙いを定めさせず、例えば一人がやられても、新たに他の者が現れる。その様子は例えるならば、モグラ叩きのようなものだった。

「・・・貴様らの狙いは分かっている。どうせ、ただの時間稼ぎだろう？」

アマゾネスの集団に囲まれていたアベルは、相当苛立っているようにそう言った。アマゾネス達ではバーサーカーを倒すことは出来ないのです、この考えに行き着くのは至極当然である。

「遊んでやろうと思ったが、いささか鬱陶しい。・・・貴様らは、後でじっくりといたぶってやる」

アベルはバーサーカーに指示し、アマゾネスの包囲網を無理やり破っていく。今まではヴァルキリーを先に倒すつもりだったため、いいように扱われていた。しかし、その縛りがなくなった今、バーサーカーにとってそれはとても簡単なことである。

「——————！！！」

バーサーカーは咆哮と共に、アマゾネスの包囲から完全に抜けきった。そしてそのまま、キャスターの『石兵八陣』を破ろうとする。

「ふん、随分とまあ・・・難解な迷宮だ」

しかし、アベルが『石兵八陣』をきちんと解析してみたところ、『石兵八陣』はちゃんとした道筋を一発で通らなければ抜けられない。もし一度でも間違えれば、答えの道が変化する。難攻不落の迷宮だった。

「・・・ならば、抜け道を探ればいいだけのこと・・・バーサーカー、しばしの間私を守り通せ」

『石兵八陣』の特性を知ったアベルは、迷宮の道筋の解析に回る。全ての道を調べれば、答えの道は見つかるのは道理・・・故に、アベルはそれを調べることに集中する。

そのためには、ヴァルキリー達に邪魔されてはならない。アベルが道を調べている間、バーサーカーは一人でアマゾネスの集団を足止めすることになる。

「あたし達が、そんなこと許すとも思ってたのか！」

「思っているさ・・・バーサーカー、やれ」

アベルの指示によって、バーサーカーはアマゾネスの蹂躪にかかる。バーサーカーの突進によりアマゾネスの数名は姿を消し、アマゾネスの弓兵が弓を射かけても、バーサーカーは全て払い落とす・・・これでは、どちらが攻めている方がすら分らない。

「・・・ふっ、余興にもならんな」

アベルはバーサーカーが余裕であることを確認し、迷宮の解析に力を回そうとする。もはや、バーサーカーとアマゾネス達の決戦を見ることに価値はないからだ。しかし・・・

ドオオオオオオオオオ！！！！！！

「何・・・？」

突然起こった地を震わすほどの衝撃に、アベルの意識は呼び戻される。アベルが震源を伺うと、そこにいたバーサーカーの体に、大きな穴が生み出されていた。

「・・・ふう」

バーサーカーを一度でも殺すという偉業を成し遂げた命は、安堵したように一息を吐いた。彼女が少しでもミスをすれば、それで今回の作戦は全て水の泡だったのだから当然だ。

「・・・つたく、何なのよコレ」

命はキャスターの指示により、アーチャーの投影により生み出された宝具を、超電磁砲レールガンにより放ったのだ。・・・何故か、キャスターは『ミコトなら絶対に超電磁砲はやらなければ』と、親指を突き出していたが・・・何かあるのだろうか？

「・・・まあ、あいつは本当に凄いわね」

キャスターはアベルの性格を考えて、長い間ヴァルキリー達の相手をすると考えなかった。故に『石兵八陣』を破ろうとして、バーサーカーを自分から離して戦わせる。そうすれば、治郎の体を超レ電磁砲で傷つけることは無くなる。

キャスターはそこまで計算した上で更に、バーサーカーに確実に当てるタイミングすら計算していた。アマゾネス達の動きを全て支配し、バーサーカーが絶対によけられない隙を作る・・・文字にすれば簡単だが、キャスターにしか不可能な芸当だろう。

「さて、次の狙撃は・・・」

命は一つ深呼吸した後、キャスターに指示された地点に向かう。この後の行動も事細かに指示されていて、上手くいけばバーサーカーの命をいくつか奪えるだろう。

キャスターとしては、何も全てアーチャーに頼っているわけではない。アーチャーが来る前に状況を有利にしておく、ないしは完全に封殺する意気込みだった。

しかし、バーサーカーもアベルもそこまで甘くはない。そのことは、キャスターでなくとも誰もが理解している。そういう意気込みだというだけだ。

まだまだ戦闘は始まったばかり。今はまだ、序章が終わったに過ぎないのだ・・・

第二十一話 戦乙女の部族（後書き）

ヒップリユテなんて知らないと思うんで、Wikipediaから引用

ヘーラクレースは十二の仕事の一つとして、アマゾーンの女王ヒップリユテの持つアレースの帯を取りに行かねばならなくなった。当初、ヘーラクレースはアマゾーンの国に乗り込もうと考えていたが、争えば後々わだかまりを残すと考え、ダメ元で交渉に踏み切った。しかし、ヘーラクレース達の予想に反しヒップリユテはヘーラクレースを客として迎え入れ（一説では強靱な肉体のヘーラクレース達にほれ込んで、自分たちとの間に丈夫な子をつくる事を条件に）、帯を渡すことを約束した。しかしアマゾーンの一人に変装したヘーラーが、ヘーラクレースたちは女王をさらおうとしていると煽動し、アマゾンたちとヘーラクレースたちとの間で戦いとなった。ヘーラクレースはヒップリユテに謀られたと思いこみ、弁明する彼女を殺して帯を奪い去った。後にそれが誤解であったことに気づいたが、もはや後の祭りであった。

問題のヴァルキリーの設定について・・・

最初は普通にヒップリユテを真名にしようと思ってたんですが、ヒップリユテって英霊になれるのかと考えた時、無理だろと思いまして、あんな面倒くさい設定になりました。

そして『戦乙女の部族』^{アマソネス}は固有結界、要するに4次ライダーの劣化版にしようとして、色々和不都合が起きまして・・・今の形にしようとした時に、これどんな宝具だ？とか思っで・・・多分、無

理あると思うんですがスルー推奨で。

命のレールガンもね、あんまり理論知らないからなあ・・・おかしかつたらご指摘ください。

最後に・・・多分あと二、三話は更新が遅くなるかと。プロット段階で、一番練り込んでなかったところですから・・・すいません。

第二十二話 槍剣の対話（前書き）

今回は、ちょっと短めです。続けて書こうと思ってたのに、思ったより長くなったんで・・・まあ、伏線的なのが無駄にありますが。

第二十二話 槍剣の対話

「・・・ランサー、貴公か」

バーサーカーとアベルがヴァルキリーやキャスター達と死闘を繰り広げている頃、彼らの身内のセイバーは、そこから少し離れたピルの屋上で佇んでいた。

そんなセイバーの下に、少し前に争ったばかりのランサー（あとティアリスも）が現れた。今残っているサーヴァントは、これですべてが相対しているわけである。

「セイバー、お前こんな所で何してるんだ？ お前のマスターは、どうもあっちにいるみたいだが」

ランサーはヴァルキリー達の戦闘を見ている訳ではないが、バーサーカーがその場にいることが分かっている。故に、アベルがその場にいると考えたのだ。

「何、我は今回お払い箱だ。もしも邪魔する者が現れば、それを阻止せよと言われているがな」

「ほー、じゃあ俺と殺り合うつてわけだな？」

本来、ランサーはバーサーカー達の戦闘に介入するつもりは無かった。何やら死力を尽くして戦っているようだし、そんな中に入るよりは一人でいるセイバーと戦おうと思ったのだ。

そうでなくとも、前回戦った時に次は全力で戦おうと言っていた。今回セイバーが命令を受けているなら、絶対に邪魔はないことになる。

そこまで考えたランサーは、好戦的な笑みを見せながら、セイバ

ーに如意棒を向ける。だがセイバーは目を向けるだけで、体は一向に動こうとしなかった。

「・・・悪いがランサー、我は今日はその気分ではない」

「あん？ 何言ってるんだよ、マスターからも命令受けてんだろ？」

「確かに命令は受けているが、それは邪魔が入れば、だ。貴公が邪魔しなければいいだけだろう」

セイバーは事も無げに、ランサーに引けと言う。だがランサーとしては、全く意味の分からないことだった。

「ふざけてんじゃ、ねえぞー!!」

ランサーは多少苛つきながら、セイバーに如意棒を繰り出した。これでセイバーも、戦わないわけにはいかないだろう。

「・・・ふん」

セイバーはランサーの突きを、持っている剣で軽くはじく。セイバーはやはり関心が薄いようで、それからも動こうとしない。

「・・・てめえ、一体どういつつもりだ？」

「先ほどから言っているだろう、我は今日は戦うつつもりはない。貴公も、戦う気がない者と戦うなど興ざめなのではないか？」

「・・・ちっ」

ランサーは舌打ちをして、如意棒を自分の手元に戻した。そしてそのまま胡座をかいて座り込み、無然とした表情でセイバーに尋ねる。

「なんでまた、今日戦う気にならねえんだ？　サーヴァントはいつかなる時でも、戦う心構えつてのがあるもんだろ」

「・・・マスターの目的が、今日達するやもしれんのだ。我としては、この戦いを見守っておきたい」

セイバーはそう言つて、ランサーから視線を外す。もしかしたら、アベル達の戦闘を見ているのかもしれない。

「マスターの・・・目的？　聖杯を手に入れることじゃなくてか？　だとしたら、なんでお前がそんな気にしてんだよ」

ランサーの疑問はもつともである。本来ならばサーヴァントもマスターも、聖杯戦争に参加する理由は聖杯を手に入れることだ。ランサーのように戦闘を楽しみたいというのはあるが、基本的には前者だろう。

だがセイバーは、マスターの目的が今日達するかもしれないと言う。これはつまり、目的は聖杯ではないということになる。そしてセイバーもそれを非難するどころか、見守ると言っている。これはおかしいと思わざるをえない。

「聖杯か・・・欲しいなら、お前が持つていけばいい。我もマスターも、そんなものいらぬからな」

「・・・なんだと？」

「マスターの目的は聖杯などには無いし、我とてそんなものいらん・・・それだけだ」

セイバーは二度に渡つて、自分たちに聖杯はいらないと言い切つた。それは嘘偽り無い、彼の本心だろう。

「・・・じゃあ、お前はなんで」

「何故聖杯戦争に参加しているか、か？」

「ああ・・・その、マスターの目的ってやつか？」

「まあ、な。我としては、奴の目的は達成させねばなんのだ・・・
例え、それが間違っているもな」

セイバーは憂いを帯びたように、遠い目をしてそう語る。もしかしたらアベルの目的は、生前の彼に何か関係があることなのかもしれない。

「お前のマスターの目的って、何だ？」

「・・・あやつの目的は、他人から見れば間違いなく悪だろう。ただ一つのこのために、多くの犠牲を払っている」

そこでセイバーは一つ呼吸をおき、アベルの目的の愚かさを思い浮かべる。そしてその口は、更なる情報をもたらす。

「しかもその目的は、最初の信念からはずれてしまっているのだ。手段が目的に変わるというやつか・・・もっとも、奴も自覚はしているようだ」

「たちが悪いな・・・それでも、お前はマスターについていくのか？」

ランサーは眉をひそめて、セイバーに問う。サーヴァントはマスターに従う者だが、それでも従う命令には限度がある。先の説明から言えば当然、従うべきではないものだろう。

「・・・確かに、我が我でなければ従わぬだろう。我だからこそ、奴の目的を止めることはないのだよ」

「我だから、か・・・お前の真名が何か関係あるってことか？」

「さあな、ただそれだけだ」

「ああ、そうかい」

セイバーはランサーの質問に、答えを出し渋る。いや、本来ならここまで話したことの方が異常なのだ。

「それで？ 結局、俺のこの所在無さはどうしてくれんだよ」

「そうだな・・・明日の深夜に、以前戦った森に来い。そこで決着をつけよう」

以前戦った森、つまりはアインツベルンの城がある森だ。そこで
明晩 2月11日の晩 に戦おうと言っただ。

「ん、まあ・・・それでいいか。うちのマスターも、どうやらおねむのようだしな」

「・・・別に、眠いわけじゃない」

ランサーは自分の後ろで眠そうにしていたティアリスを差して言うが、ティアリスはそれを否定する。彼女はまだ少女であるし（実年齢以上にその傾向があるが）、最近はあまり寝ていない。だから、眠いのは当然なのだが。

「ふん、ならば疾くと帰って休眠を取れ。明日の決闘で、マスターが足手まといになどならぬようにな」

「わーった。じゃ、また明日」

ランサーはそう言いながら立ち上がり、多少不満そうにしているティアリスを捕まえて飛び去って行った。セイバーはそれをちらりと見て、すぐに視線を戻す。

セイバーとランサーが決闘をするのは、必ず今起こっている戦い

の後だろう。ならば、状況によっては、それが最後の戦いとなるかもしれない。

「・・・いや、それはないか」

それがちらりと浮かんだセイバーは、すぐにその考えを棄てる。彼の中では、そのことは有り得ないことなのだ。

「まあどのみち、4日後には全てが終わるのだが・・・」

その言葉を最後に、セイバーの思考からランサーのことは消え去る。その言葉の真意は、一体どこにあるのだろうか・・・

第二十二話 槍剣の対話（後書き）

そういや最近他の小説を見て、挿し絵があるのがあったんですが・・・ああいうのってどうやるんでしょうかね？携帯じゃ無理なのかな？

第二十三話 闇夜の明けし時（前書き）

待つてくれている人がいたら、遅くなつて申し訳ありません。前半部分で足止めをくらい、後半部分で躓き・・・苦心して仕上げてみました。生暖かい目で、みてやって下さい。

第二十三話 闇夜の明けし時

遠坂命の超電磁砲^{レールガン}による攻撃により、バーサーカーの命は一つ削られた。その時から数時間経過した今、未だにバーサーカーとアベルは『石兵八陣』の中にいる。

「・・・ちいっ」

「—————!!!」

それというのも、アベルが思うように抜け道の探査が出来ていないからだ。命の超電磁砲^{レールガン}は、バーサーカーの命を奪うことが出来る。アベルの指示が無ければ、瞬く間に命が奪われていくのだ。

アベルが指示することによって、超電磁砲^{レールガン}がバーサーカーを貫くことはほぼ無くなった。しかし、それもキャスターの計算通り。彼の元々の目的は、ただ時間稼ぎなのだから。

「バーサーカー、そこを右だ！」

アベルを乗せたバーサーカーは、石兵八陣の迷宮を突き進む。その進路にはアマゾネスが大勢いるが、バーサーカーには全く関係ないことだった。

アベルは今までの超電磁砲^{レールガン}の射出角度から、それから逃れられる死角を探している。それは暗闇で黒の基石を探すようなものだが、必ずどこかにある筈なのだ。

「・・・っ!!」

そしてバーサーカーが角を右に曲がった途端、視点が急変した。

今まで見えていた壁が、次第に高くなって・・・いや、彼らのいる地点が次第に低くなっているのだ。

「く、落とし穴・・・か。単純故に、見落としやすい」

そう、それは落とし穴。ただ穴が空いているだけだが、相応のスปีドが出ていれば、それを避けるのは難しい。単純で馬鹿げているからこそ、それは効果を生むことになるのだ。

アベルとバーサーカーはそれに落ちていく。深さはサーヴァントにとっては、それ程でもないので、特に逃げようということはない。下手に動けば、逆に罠にかかる可能性が高まるのだ。

「・・・だが、そこから先も見据えるか・・・」

落ちていく中で、アベルは目を細めて呟く。その細められた瞳が映すのは、落とし穴の底にあるそれ。なんとまあ、キャスターは用意周到なのだろうか。

それはいわゆる、放電気というやつ。起動すれば、辺り一面が微弱な電撃に包まれる。するとどうなるか。

微弱とはいえ、それは人の意識を奪うには十分。つまり、アベルの意識が飛ぶ。そうなれば、バーサーカーに指示を出す者がいなくなるのだ。

「私の指示がなくなれば、バーサーカーを手玉にとるなど容易からう・・・だとすれば、これしかあるまい」

アベルは静かに呟いて、バーサーカーに指示する。それを受けたバーサーカーは、アベルを上に向けて放り投げた。

アベルは現在、治郎の意識を操っている状態。故に、治郎に出来ることしか出来ない。治郎は衝撃を和らげられても、電撃を防ぐ術を持っていない。ならば、この選択は妥当と言える。

「・・・そしてそれは、向こうも承知済み・・・」

アベルがそう呟くと同時に、落とし穴に爆音が響く。アベルを投げたことにより出来る僅かな隙、そこを狙った超電磁砲^{レールガン}。そのタイミングすら、キャスターには計算済みなのだ。

今の攻撃により、バーサーカーの命はまた削られた。この調子でいけば、バーサーカーの無力化に成功できる。そして更に・・・

「これで、詰みだ!!」

落とし穴の上に立ったアベルの下に、ヴァルキリーを始めとしたアマゾネスが集結する。彼を守るバーサーカーは、落とし穴の下・・・これで詰みであることは明白である。

「詰み、ねえ・・・」

だがその考えは、あくまで希望的観測。アベルに更なる手の内があれば、容易に突破できる窮地。だとすれば、突破出来ない筈が無いのだ。

ヴァルキリーを先頭に、アマゾネスがアベルに襲いかかる。バーサーカーはすぐに上がってくる筈なので、これが最大のチャンス。故に、失敗は許されない。

「だから貴様らは、雑魚だと言う」

アベルは不敵な笑みを浮かべ、ヴァルキリーたちを嘲笑する。そして自分の周りに向け、治郎の使いこなせる中でも、強力な部類に属する魔術を放った。

「なっ・・・！？」

これはヴァルキリーにとって、想定外の行動。そんなことをすれば、自分の方にダメージがいく。ヴァルキリーには、まったく理解不能だった。

「ぐ、ふ・・・だから・・・愚か、なのだよ。貴様らは」

アベルは少しよろめきながら、再びヴァルキリーたちを嘲笑した。その嘲笑が終わらない内に、落とし穴からバーサーカーが舞い戻ってきた。

この時になって、ヴァルキリーはアベルの意図を知る。アベルが魔術を放ったことに、大した意味はない。必要だったのは、自分たちの困惑だったのだ。

アベルの行動の意味が分からないヴァルキリーたちは、その行動に困惑し、動きを止めてしまう。そんな無駄な時間があれば、バーサーカーが戻ってくるには十分過ぎる。

「くそっ・・・だからって、こんな・・・！」

「・・・この程度のこと、何を言っている？ 勝利を得るためには、どんなことでもする・・・これこそ、戦う者の在るべき姿だろう？」

アベルは持論を展開し、ヴァルキリーたちに問いかける。そしてヴァルキリーの返答を待たず、バーサーカーの肩に乗った。

「・・・さあ、反撃といこうか」

場面は移り変わり、少し離れた位置にいるキャスターたちの視点。モニターを見ていたキャスターは、眉間にシワを寄せて浮かない顔をしていた。

「・・・キャスターさん。何で、そんな顔をしてるんですか？」

「・・・決まっているでしょう？ アベルの意識を奪うことに、失敗したからですよ」

椀の問いかけに、キャスターはそう答える。

「でも、別に構わないんじゃないですか？ 元々、アーチャーの回復までの時間稼ぎなわけですし・・・」

「そうよ、今は大分順調じゃない。もうすぐ、夜も明けるわ」

椀がキャスターに反論し、それにイリヤスフィールも同調する。今はもう夜明けが近く、空は白みがかってきていた。だとすれば、元来の目的の達成はすぐそこだ。

「・・・ええ、それはそうなんですが・・・軍師の勘とでも言いま

すか、不安があるのです」

キャスターのその言葉は、とてつもない重みがある。今までの指揮や、その名声・・・キャスターの軍師としての力は、疑うまでもない。故にこそ、椛やイリヤスフィールの精神をかき回す。

「それは、どういった・・・」

「あの男は・・・つつー!!」

キャスターは何か言う途中で、モニターの中の異変に気づく。慌てて椛とイリヤスフィールもモニターを見るが、ただアベルとバーサーカーが、石兵八陣の迷宮を走っているだけだった。

「一体、どうしたの？」

訳の分からないイリヤスフィールは、直接キャスターに問いかける。

「・・・バーサーカーが走っているあの道順は、正しい、のです・・・」

「
なっ!?!」

椛とイリヤスフィールがもう一度モニターを見ると、そこには迷いなく突き進むバーサーカーの姿。それは一体、どういうことか。彼らは知っているのだ、正しい道順を・・・!!

「拙い・・・これでは時間が足りない。ヴァルキリー!! 先回りして、罠をはって下さい!! ミコトは、超電磁砲で地面を破壊・・・くっ、間に合わないか・・・!!」

キャスターが急いで指示をするが、それをさせないようなスピードで、バーサーカーは正しき道を往く。これはもはや、石兵八陣を突破されるのは、時間の問題だ。

「キャスター、どうして・・・」

「おそらく・・・ですが、アベルは今までの攻防の中で、道の探査を続けていたのでしょう・・・」

「嘘・・・そんな、馬鹿な・・・」

イリヤスフィールが絶句するのも無理はない。今までの激しい死闘の最中、同時進行で探査をしていたと言うのか？・・・しかも、自分の体ではないのに・・・

「私も、嘘だと思いたいですが・・・そう考えるしかありません。・・・それより、これから先について考えることの方が有意義です」
「・・・はい、そうですね」

キャスターの諭すような言葉に、桜も頷いて同意を示す。今必要なのは、狼狽することではなく、打開策について考察することだ。

「このスピードだと、おそらく・・・あと数分で石兵八陣が破られます。そうなれば、彼らはここに一直線にくるでしょう」

「・・・じゃあ、どこかに隠れるとか」

キャスターの話聞いた桜は、率直に自分の意見を言う。しかしキャスターは首を横に振り、その意見を切り捨てる。

「どこに隠れると言うのです。それに・・・ここで此方が引いてしまえば、アベルは何をするか分かりませんし」

そう、もう樫たちに、逃げ場など存在しない。それに、例え有ったとして、そこに逃げ込むとするとどうなるか。

目的のためには何でもするというアベルのことだ。おそらく、手段を選ぶことはないだろう。下手をすれば、一般人に危険が及ぶかもしれない。

「そんなことになれば、目も当てられません。・・・ここは、迎え撃つしかないでしょうね・・・」

「・・・それしか、ないんですね？」

「・・・ええ」

そんな話が終わるか否かの時に、モニターの中のバーサーカーが、石兵八陣を突破した。こうなれば・・・もはや四の五の言っている場合ではない。

「あと、10分といったところですか・・・」

そのバーサーカーの速度から、キャスターはだいたいの時間を推し量る。10分という時間は、何かを準備するにはあまりにも・・・短い。

「何か、手を考えてないの？」

イリヤスフィールはキャスターに尋ねる。キャスターは先から、幾重にも策を張り巡らしていた。それに、以前、最悪の展開を考えるのが軍師だとも言ったことがある。ならば、この展開に何か手を考えているかもしれない。

「まず、この戦を勝つには、バーサーカーに対するアベルの指示を奪うのが最善。そこから考えて、幾つかの手を用意しています」

「なら……」

「……ですが、それを使うということは……選択しなければならないということです」

キャスターは真剣な目で、静かに椀を見据える。それにより、イリヤスフィールも気付くことになった。それはつまり、治郎を……切り捨てるとのことだと。

「……もちろん、それが上手くいくとは限りません。むしろ、難しいでしょう。……ですが、選ばなければならないのは、事実です」

「………」

椀は無言で、キャスターを見つめ返す。この場にいるキャスターとイリヤスフィールは、椀に余計な口を挟まない。この話は、他人が口を出せるものではないからだ。

それから、数十秒が経つただろうか。不意に椀は目を閉じ、すぐに再び見開いた。見開かれたその目には、断固とした意志が感じられる。そして、自らの答えを語る。

「……キャスターさん。つまりは、アベルさんの……兄さんの指示が無くなればいいんですよね」

「ええ。ですが、それを選択するということは――」

「なら、簡単じゃないですか。兄さんの意識を奪うだけでいいんでしょう?」

椀は笑顔を振りまき、こともなげにそう言った。それに対してキャスターとイリヤスフィールは啞然としてしまうが、すぐに反論にまわる。

「いえ、それは不可能です。アベルの意識を奪うには、攻撃するしかない。しかし、意識を奪うだけというのは」

「大丈夫です。私が、やります」

そう言った椛は、夕方学校から持ってきていた弓を掲げる。それは、弓でアベル……いや、兄である治郎を射抜くということか。

「本気ですか……？ 限りなく難しいですし、第一防がれたら終わりです」

キャスターがそう言うのは、至極もつとものだ。弓で射抜き、意識を奪うに留めることは神業に近い。そしてその矢が防がれてしまえば、それすら意味がないことになる。

「キャスターさんがサポートしてくれれば、防がれないでしょう？ それで駄目なら、それは私のせいです」

その言葉に、キャスターは再び啞然としてしまう。だが、すぐに復帰して、念押しで椛に確認する。

「……本気なんですね」

「はい」

「……わかりました、いいんでしょう。どのみち、手間は大きく変わりませんし……ただ、失敗すればその時は……分かっていきますね？」

「承知の上です」

失敗すればその時は、キャスターは確実に治郎を切り捨てにかか
る。椛もそれを理解していて、キャスターの問いに間髪入れずに返

答した。

「でしたら、早く準備をしましょう。もうすぐ、彼らはやってきますから」

「分かりました」

やると決めたからには、もたついている時間はない。キャスターは柊が一番射抜き易い位置を瞬時に判断し、そこに柊を潜ませる。そして、アベルがやってくるのを待つ。

それから幾ばくもたたず、アベルは悠々とやってきた。キャスターとイリヤスフィールの姿を確認し、アベルは勝ち誇ったような顔で話しかける。

「お前がキャスターか。随分と手こずらされた・・・一体、どこの英霊だ？」

「・・・中国は三国時代の蜀漢の丞相、諸葛亮孔明と申します。どうぞ、お見知りおきを・・・」

アベルの問いに、キャスターは恭しくお辞儀をしながら返答した。それについてアベルは多少驚いたものの、すぐに探り合いに発展させる。

「なる程、それならば合点がいくことが多い・・・だが、何故私にそれを教える？」

「さあ、何故でしょうね？」

「私の警戒心を喚起させる、あるいはブラフとして使う・・・一番有り得るのは、話を続いて時間稼ぎとすることか？」

「・・・そう思いたいなら、どうぞご勝手に」

「ふん・・・まあいい、ヴァルキリーたちに来られても面倒だから。早めに、倒させてもらおう」

|||!!!

キャスターの魔術の主なところは、赤壁での東南の風、南蛮において嵐を鎮めたこと・・・そこから分かる通り、天候を操ることにある。だから、風を引き起こす魔術のレベルは、相当に高い。

「……なるほど、直に戦えば……やはり違いますね」

「キヤスター、お前は私の意識を奪いたいのだろうか？　だが、残念だなあ？　バーサーカーの防御は、崩せんよ」

354

の通りなのだ。キャスターに、バーサーカーの防御は崩せない。

「やってみなくては・・・分かりません、よ！」

その言葉と共に、キャスターは再び暴風を引き起こす。その風は、先ほどよりも鋭利にして強大。おそらくは、それがキャスターの出来る、この状況で一番有効な魔術なのだ。

「そんなそよ風、バーサーカーには効かぬ・・・つまりは、そういうことだろう？」

「・・・ちっ」

アベルはキャスターに、疑問の体をしながらも、確信を持ったように話しかける。要するにこれは、おとりの攻撃なのだ。

バーサーカーはキャスターの風からアベルを守る。それと同時に、アベルに向かって、離れた地点から飛来物が・・・だがそれも、バーサーカーにとって造作もなく防げるものだ。

「これは・・・」

アベルはその防がれた物体を見る。

「こんなもので・・・私を倒そうとしたのか？ 随分と、お粗末な作戦だ」

アベルはキャスターをあざ笑い、バーサーカーに指示する。かの愚か者を、さっさと殺してしまえと。

「

—————！！！！」

「・・・くっ」

バーサーカーはキャスターに突進し、キャスターは苦悶の表情を浮かべる。既にアベルは、敵の手の内を知り尽くした。ならば、バーサーカーを前に出そうが問題はない！

「だから・・・効かぬと言っているだろう」

そして再び、アベルに飛来物があるが、今度はアベル自身の魔術で叩き落とす。来る方向さえ分かれば、それを落とすのなんて容易いことだ。

「天下の名軍師も、堕ちたものだ、があっ!？」

キャスターに向かつて、またもや皮肉を言おうとするが、途中でそれは途切れてしまう。その理由は至極簡単。彼の腕に・・・矢が刺さっているのだ。

「一体・・・何、がつ、ぐうつ・・・!」

アベルは状況を把握しようとするが、再び彼の体に矢が突き刺さる。それは、先ほど銃弾が飛んできた方向とは、真逆の方向から飛んできていた。

「キャスターさんっ!!」

「ええ。ふっ!」

「がふっ、う・・・」

その方向からの楳の声に、キャスターは反応し、意識を奪うのに十分な魔術でアベルを襲う。これで、彼らの目的は達成された。

最初に放たれた銃弾・・・あれは、アベルを油断させるためのおとり。イリヤスフィールがリモコンを押すことによって発射される、機械の攻撃だったのだ。

先に手の内を全て見せたと思わせれば、必ずアベルは油断する。その状態で、真逆から、機械でも魔術でもない・・・ただの矢が放たれば、察知出来ないのも無理はない。

桜の矢を受けて、キャスターの魔術をかわすことの出来なかったアベルは、動くことはない。それを確認したキャスターたちは、安堵に包まれた。

「・・・ふ、上手くいくかは危険な賭けでしたが・・・上々の仕上がりです。あとは、高島治郎を拾って、バーサーカーを無力化させるだけ」

「はい。兄さんは、私が」

「ええ、頼みます」

アベルの指示がなければ、バーサーカーを手玉にとることなど、キャスターには簡単だ。ここで彼らには、明確な余裕が出来た。そしてそれは、油断にも通じる

「・・・なかなかどうして、いい腕じゃないか」

「あ」

「だが、詰めを誤ってはいかんよ」

治郎を肩に担ごうとした桜は、そこでようやく気づいた。アベルの意識は、奪われてなんかいない。先ほどまで動かなかったのは、ただのブラフ・・・作戦だったのだ。

「くっ、モミジ」

「

そのことに、キャスターをはじめ、ようやく追いついてきたヴァルキリーや命も気づき、彼女を守ろうとする。しかし、彼らの距離はあまりにも遠く、魔術が発動されるのは・・・あまりにも短い。

「もはや・・・間に合わないさ」

アベルは意地の悪い笑みを浮かべて、椀に魔術を放つ。椀は動こうとしない。いや、動けないのだ。彼女には、どうすることも出来ないのだから。

夜が完全に明け、朝日が椀たちを照らす中、椀の目の前には、アベルの魔術が迫っていく。

そして椀の頭に、走馬灯というやつだろうか？色んな考えが浮かぶ。自分が死ねば、この後一体どうなるのだろうか、とか・・・アーチャーは、どうするだろう、とか・・・

アーチャー、ごめん・・・

「体は剣で出来ている。(I am the born of my sword.)」

魔術が放たれる瞬間、どこからともなくそんな詠唱が聞こえた。
その声は、椀がちょうど考えていた、あの赤い弓兵の声だった。

「
熾天覆う七つの円環」^{ロー・アイアス}

それと同時に、椀の前に7枚の花びらを模したような盾が現れる。
その盾は『熾天覆う七つの円環』^{ロー・アイアス}。その花卉一枚で、古の防壁一基
に匹敵するという盾。アベルの魔術を防ぐなど、造作もない。

「血潮は鉄で心は硝子。(Steel is my body, a
nd fire is my blood.)」

そしてアーチャーは、そのまま詠唱を続ける。それを止めるもの
はおらず、アーチャーの詠唱は止まることはない。

「幾たびの戦場を越えて不敗。ただの一度も敗走はなく、ただの一
度も理解されない。(I have created over
a thousand blades. Unknown to D
eath. Nor known to Life.)」

アーチャーの詠唱が続く中で、ヴァルキリーは椀を保護する。だ
が、アベルはそれを止めようとはしない。ただ、アーチャーだけを
見ていた。

「彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。(Have withs
tood pain to create many weapo
ns.)」

ヴァルキリーに保護された椀は、アーチャーをじっと見つめる。
そして自らの従者の、真の力を知る。

「故に、生涯に意味はなく。(Yet, those hands will never hold anything.)」

キャスターはアーチャーを、厳しい目つきで観察する。アーチャーが今ここにいるということは・・・おそらくはまだ、彼は回復しきっていないはずだ。なのに、急いで駆けつけたのだろう。

「その体はきつと剣で出来ていた。(So as I play, "Unlimited Blade Works")」

そして、アーチャーの詠唱は終わった。最後の言葉が紡がれたと同時に、アーチャーを中心に火が出現する。

「うわっ」

桜はその火が迫ってきたので、反射的に目を閉じる。だが、いつまで経っても痛みはこない。そこで、おそろおそろ目を開けてみた。

「・・・！ こ、れは・・・」

その視界に入ってきたのは、先ほどまでとは全く違う景色。曇天の空には大きな歯車が回っており、不毛の大地には無限と思える剣が墓標のように立ち並んでいる。

「これは・・・固有、結界・・・」

桜の疑問に答えたわけではないだろうが、命がこの世界の正体を言う。そしてそれを聞いた桜は、今までの情報と照らし合わせ

「衛宮・・・・士郎・・・・」

己が従者の、真名を知った。

第二十三話 闇夜の明けし時（後書き）

今回は（も？）、本当に難産だった・・・双方に駆け引きさせなくちゃいけないし、椀の見せ場つくらなきゃいけないし・・・不自然な点とか多かったと思います。次は、もう少し早めに、もう少しまともにしたいな・・・

第二十四話 無限の剣製（前書き）

すみません。もう少し早く出来ると思ってたら、そんなことはありませんでした。次こそは、早めの更新を・・・！

第二十四話 無限の剣製

椀の目に映る光景・・・それは、剣の墓場とも言うべき、寂しい光景。これはアーチャーの固有結界『Unlimited Blade Works』。アーチャーの、心象世界。

固有結界という単語、それを椀は聞いたことがあった。いつのことだったか・・・確か、命がそれを口にしていたはずだ。それは、誰についての話の時？

それは、すぐに思い出せた。あれは、命と初めて会談した時のこと。家の話になって、昔の話になって・・・それで、その人物の話題になった。

そう考えてみると、何故今まで自分はそれに気づかなかったのか分らない。あれだけ沢山、ヒントはでていたというのに・・・

アーチャーが剣をどこからともなく出していたが、命は確かそれについても言っていたはずだ。彼の人物は、正にそれをしていたと。

以前彼の夢を見た時に感じ、彼が認めた正義の味方・・・その言葉を己が母に教えられた。そう、彼の人物の話の時に。

そしてキャスターの言葉。ほぼ確実に、アーチャーが召喚されるというもの。サーヴァントの召喚には、触媒が必要である。椀はそれを持っていたか？・・・いや、持っていなかった。

しかし、持っていないなくとも、触媒はあった。そう、あの屋敷自体だ。彼の人物の育った家であり、使った土蔵・・・これほど、繋が

りが深い触媒もあるまい。

つまり、アーチャー……彼の真名は

「衛宮……士郎……」

彼の錬鉄の英雄、衛宮士郎その人。正義の味方として、1を切り捨て9を救う……曾祖母である桜を救った、あの衛宮士郎なのだ・

私は『無限の剣製（Unlimited Blade Works）』を展開し、バーサーカーの前に立つ。高島治郎……いや、今はアベルか。アベルは、体を起こしてバーサーカーの後ろに控えている。

そのアベルの目は、ギラギラと私の方を見つめてくる。あの男が何を思っているかは知らないが、おそらくは私によくないことなのだろう。

「……アーチャー」

アベルの視線を軽く受け流していた私に向かって、キャスターが話しかけてきた。その顔は呆れ顔で、私をなじる気満々なようだ。

「あなた、まだ治りきっていないでしょう。・・・まったく、治してから来いと言ったのに」

「私が来なかったら、拙かったのではないか？」

「まあ、そうですね・・・で、どのくらいです？」

キヤスターのこの問いは、私の回復具合を問っているのだろう。
・・・ふむ。

「そうだな・・・だいたい、八割方と言ったところか」

「八割ですか・・・もう少し余裕が欲しかったですが、いた仕方ないでしょう」

今の私の状態は、戦闘をすることに大して支障はない。しかし、バーサーカーと戦うには、その大してない支障が命取りとなる。だから、私は完治してから来るつもりだった。

だが、そんなことを言っている場合ではなかった。遠坂邸のモニターに映る状況・・・そんなものを見せられては、じっとしている方が愚かというもの。

「まあ、安心したまえ。私は生前、このような状況に陥ることも多かった・・・故に、慣れている」

私の生前、瀕死の怪我を負う中で、自らよりも強力な敵や、数え切れない敵と争ったことも少なくなかった。その中でも、私にただの一度も敗走はない。

「英霊エミヤ・・・そういえば、そういう逸話も残っていましたね」

キャスターは得心したように、そう語る。ふ、この時代には私の伝承も伝わっているのだったか。自分のした事が歴史に残っているとは、少し妙な気分だな。

そこで、私はふと椀を見やる。無限の剣製を使ったということは、椀も私の真名に気づいたはずだ。・・彼女は一体、どういう反応をするだろうか。

「・・・アーチャー」

私の視線に気づいた椀は、小さな声で私を呼ぶ。その顔に浮かぶ色は、困惑・懷疑・驚愕。・・まあ、当然と言えば当然の反応と言えるのかもしれない。

「椀、既に察しただろう？・・・つまりは、そういうことだ」

「うん・・・分かってる」

「怖いかな？ 私は、争いを引き起こした大犯罪者だからな」

実際は、必死でそれを止めようとしたのだが。責任を押し付けられて、最後には絞首刑。・・まあ、そんなことはどうでもいいことだが。問題は、それが歴史でどうなっているかだ。

「・・・うん、怖くなんてない・・・。アーチャーはアーチャーだし・・・それに・・・」

「・・・そうか」

まだ椀は話を続けようとするが、そんなに長く話している暇はない。後でゆっくり話すとして　私は、バーサーカーと雌雄を決することにする。

「バーサーカー、以前は君に敗れた。しかし、今回はそうはいかん」
そう言いながら、私は手を上に挙げる。その動きに合わせ、数十の剣が浮かび上がり、バーサーカーに照準をつける。

これらの剣は全て贋作であり、本物には幾らか劣る。しかし、それでも、これらが保有する神秘は、バーサーカーの命を奪うことが可能だ。

「いくぞ、バーサーカー!!」

私は手を振り下ろし、それに伴って剣群もバーサーカーに向かう。そしてそれだけではなく、私自身も剣をとり、バーサーカーに斬りかかりに行く。

「—————!!」

バーサーカーは咆哮と共に、剣群を叩き落としていく。私としても、この程度であの大英雄がやられる筈がないと分かっている。故にこそ、自身での突進だ。

「うおおおお!!」

握りしめた剣を、バーサーカーの隙を狙って振り下ろす。先ずは上段、続いて下段……だが、やはり簡単には倒させてくれないように、全て防がれる。

「アーチャー、助太刀するよ!!」

そんな折にかけられる、快活な女性の声。それを発したのは、考

えるまでもなくヴァルキリーだ。彼女の宝具により現れたアマゾネス達と併せて、バーサーカーに突っ込んでいく。

「すまない、助かる」

私は彼女に礼を言いながらも、剣を振るう腕を止めることはない。バーサーカーとはいえ、いつ隙が出来ないとも限らないのだ。

そしてヴァルキリーやアマゾネスも、バーサーカーを攻める列に加わる。彼女たちの手に握られているのは、無限の剣製に保存されている宝具。

自分たちの武具よりも、有効だという判断だろう。その判断は正しい。真名解放が出来ないとはいえ、彼女たちのそれよりは、遥かに強力なのだから。

「ヴァルキリー、隙を作ってくれ。トドメは、私がやる」
「了解だ」

短く会話をし、役割を決める。ヴァルキリーやアマゾネスではトドメをさすのは厳しいだろうし、これは当然の成り行きだろう。

アマゾネスの数名が、バーサーカーの下に群がる。多すぎても戦い辛いし、適度な人数で攻めなければならぬ。

バーサーカーは群がるそれらを、斧剣の一振りで駆逐する。密着して戦う以上、彼女たちに避けることは難しい。それ故の結果だ。

「二陣、三陣！ 前へ！！」

ヴァルキリーの命令により、新たなアマゾネスたちがバーサーカーに向かう。彼女たちの使命は、バーサーカーの隙を作ること。故

だ。

「……くるぞ！」

バーサーカーが復活し、此方に突進しようとしているのに気づいた私は、ヴァルキリーに注意を促す。彼女も承知したようで、体勢を前屈みにして構えている。

「——————！！！」

咆哮と共に近づく、かの者の巨体。以前戦った時と同じく、巨体とは思えない速度だ。すぐに私たちは、バーサーカーの斧剣の攻撃範囲内に入ってしまう。

「ふ、悪いな」

だが、その程度でやられるわけにもいくまい。私は剣群を再び浮かび上がらせ、バーサーカーから身を守る盾とする。

それによりバーサーカーの進撃は一時止まり、私とヴァルキリーは十分な間合いをとることが出来た。

これを繰り返し続ければ、バーサーカーを倒すことも可能かもしれない。いや、必ず倒さねばならないのだ。

無限の剣製内で戦闘を開始してから、一体どれほどの時間が経過したのだろうか。長い時間戦っていたように思うが、確かなことは言えない。

「ハ　ハ　」

だが、今までの戦闘によって、ヴァルキリーの体力は大分削られているらしい。かの大英雄と一切隙を見せずに戦おうというのだ、サーヴァントと言えど、無理からぬこと。

そう言う私も、幾らかの傷を負っている。流石にクリーンヒットは受けていないが、余波だけでこの有り様だ。いかにバーサーカーが強力かが分かる。

「　だが」

だが、そのバーサーカーの命も、今までの戦闘で幾つか奪うことに成功した。私が読み間違えていなければ　あと三度殺せば、かの大英雄は陥落せしめる。

「ヴァルキリー、やれるか？」

「・・・勿論だ」

小さく合図を交わし、小休止となっていた戦闘に、再び私たちは戻っていく。あれだけいたアマゾネスたちも、残りは数えきれる程・
・これは、早く決めなければ拙い。

ならば次の攻撃で、決めよう

そうと決めれば、かの大英雄を三度も殺せる武器を探さねばなるまい。そんな武器は、この無限の剣の中でも、数える程しかない筈だ。

そして最初に思い浮かんだのは、以前七つの命を奪った『勝利すべき黄金の剣』^{カリバーン}。セイバー（アルトリア）がいないとはいえ、三度殺すには十分だろう。

「・・・いや」

だが、『勝利すべき黄金の剣』^{カリバーン}を私は使わない。いや、使えない。・・・とも言おうか。単なる、私の意地のようなものだが。

そんな思考の内に、バーサーカーに一部の間が出来る。それを見た私は、この機を逃すまいと、バーサーカーみ向かって駆け出す。

「
トレースオン
投影、開始」

私が使う武器は、バーサーカー（ヘラクレス）の本来の宝具であるもの。これならば、バーサーカーを三度殺すこととて可能の筈だ。

「
トリガー・オフ
投影、装填」

あとは放つだけ・・・そういう時になって、バーサーカーの近くにスッと、アベルが立った。そしてその顔は、ニヤリという黒い笑みに染められていた。

ここで私が技を放てば、確実にアベルにも当たり、治郎の体は死を迎えることになる。・・・構うものか。やってしまえ。

このダメージでは、バーサーカーを追い詰めるには難しいだろう。既にアマゾネスの女性たちは消えていて、残りはヴァルキリーだけ。・・・これでは、難しいどころの話ではない。

「・・・ア、アーチャー・・・私・・・」

そのことに、桜も気づいているのだろう。小刻みに震えていて、今にも崩れ落ちそうな顔をしている。

・・・だが、桜の行動も無理からぬことだ。自身の兄が殺されようとしているのに、見捨てるという方が無理だろう。

だから、私は桜を責めることはしない。そんなことに意味はないし、逆にもっと状況が悪くなる。

「・・・しかし」

私には、流れ落ちてくる冷や汗を止める術がない。これでは、バーサーカーを倒せずに、私たちはここで全滅になる可能性が高い・・・

どうする・・・？

第二十四話 無限の剣製（後書き）

Fateの設定を、大分無視している気がしないでもありません。いつものことですが。無限の剣製って、確か長時間できなかった気が・・・色々とスルー推奨！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3329n/>

Fate/return

2010年12月12日01時38分発行